

ふりよ一祭の語に付きては、古來學者間の疑問とす。蓋し降雲の讀にはあらざるか。いづれ雲には相違なからんと云ふ。陰曆七月七日筒袖に野袴、獅子頭(實は龍頭なり)を冠り、胸に羯鼓を横たへ、左の横笛につれ踊るなり。

○ふりだしたく、寅卯のかたから大雨ふりだした。

(笛の俗譜) ヒータリタ ヒータリタ、

虎坊 妻女 大尻
とらばうが かかまか おべ たれたー。

獅子(かりにししといふ)第一一人(牝)第二一人(牡)第三 親獅子。

一順の後亂舞となる。こは牝獅子を隠し、牡獅子狂氣の如くに之れをたづね、其尋ね當りしに當り、牝、牡、親三にて喜び舞ふかたをなす。

又棒即ち棍手と、一種の劍舞とあり。甚高妙を極めたりと云ふ。

(歌)南 雨 暗
みーなみから、あーめのふるやうーに、くーらくなつた、お暇申していざかへらーか。(拍子ささ)イヤーサツサ。(安房郡)

摺臼歌

○曾呂の五ゑむが、よめどりで、うさぎなますに、かほちや汁、ホラヒケ、サーンヨー。

○曾呂の五ゑむが、筆とりで、一分せきだの音がする。ホラヒケ、サーンヨー。(安房郡)

○井尻六左衛門がたてた臼、やり木押さずにまはりうす。なんほ六左衛門がたてたとして、やり木おさずにまはるまい。

○久留里五丁目(梅の木)は、枝は龜山葉は小糸、花は佐貫の城にさく。影は養老のたもにさす。木挽新參こやなれぬ。萬事たのむよもとりに。(君津郡)

○茂原門左のたてた臼、行り木を押さずにまはる臼。

○御臺所でひく米は、これは百姓のをさめ米。

○これが今宵の仕舞臼、煙草一ぶくすふがよい。

○江戸が見たけれや八幡見ろ。八幡八幡こけら貴。(千葉縣)

盆踊歌

○坊様山の道は高低あれば、儒者も學者も踏み迷ふ。○坊様山のみちは衣がすれる、衣すれても、お世話にやならぬ。(市原郡)

○十よ七と八百屋のお七は、品川表で釣をする。釣竿は、しちくやの竹、糸をば三味線三の糸、三の糸、二の糸きれても、わたしとおまへさんはきれやせぬ。

○坊様、ヨホイ、山の道ぢや衣がすれるよ。衣、ヨホイ、すれでもお世話にやならぬよ。お世話、ヨホイ、どころかお茶でもあがれよ。お茶は、ヨホイ、新茶で今のんたばかりよ。今も、ヨホイ、のんだんべいが、又のみなほせよ。

○つんつらつけたよ、此の麥は。つけたはずだよ千百ついた。ウントサノドソコイサ。(印旛郡)

稻刈歌

○東のやつだてをな(女の)が稻をかる。おかりやれ、こたばに根ふしそろへて。(山武郡)

○やりぎもとから、おだしやれ。やりぎおさずに、まはれ臼。

○寺山の兎がねてのナ、ねてのねごとに、ナーエー、その豆を、芽から、葉まで食ひたい。ナーエー。

○じよ七が、柳の下で、下で芹を摘む。ナーエー、芹は細し、柳はよれて、よれてからまる。ナーエー。

○木更津の、今朝たつやどの、ナーエー、やどのこむすめが、ナーエー、花ならば一と枝折りて、ナーエー、折りて國のみやけ。ナーエー。

○東金の茂右衛門のせどで、ナーせどで、うがなく。なんとなく。茂右衛門の小嫁、サー小嫁こひしとなく。濱、曾我野尋ねてなくば、サーなくば江戸までも、江戸も江戸も本町の茶屋の、サー茶屋の小娘がよ、長持七さを、つづらが、サーつづら八つづらへー、腰よかけ、酒のサーさけの銚子づけ。エー。(市原郡)

○東金の茂右衛門の嫁は江戸から。江戸も江戸、本町の茶屋の小娘。(千葉縣)

千葉縣 ぼつちやらぶち 米搗歌 粉挽歌

○東金の茂右衛門の裏で鶴が鳴く。何となく。茂右衛門の小嫁戀しと。
(印旛郡)

ぼつちやらぶち

稻の穂のちぎれたるものを土間に集めて之れを打つ。方言ツタツカブチと云ふ。多く夜業として、多人數揃うて廻りながらうつ。

○むかひこやまのゆりのはな、一枝さいてもゆらくと。
○たこのたかねのさるひきは、日さへくれればひきたがる。
○おらがおつかさんは、ふくのかみ、ふくはふくだがおたふくだ。

(囃) ハードンチバートカラ、オララモカツサリ、ハーア
ネラガオトキケ、ドンタラカツサリ。
(印旛郡)

米搗歌

○かぶらきの、ナーヨー、酒屋のナーヨー、嫁の寢言には、この米つかずに、酒になればよい。
○權左が西國、ナーヨー、長のたびーする。あとでは、おかだが、ナーヨー、お茶の水くむ。

○あんばの臺でお江戸を見れば、お江戸がやけてみなこやかけて。

○高神の名主、ナーヨー、庭のほしもの、ひじきに、のけのり、ナーヨー、かぢめかいそに、あをのり。

○小原子、田中の、ナーヨー、よごれ不動さま、ご利生が、かなへば、ナーヨー、まるれともだち。

○東金茂右衛門、ナーヨー、嫁はどこから。横濱尋ねて、ナーヨー、なくて、お江戸から。江戸一本所の、ナーヨー、茶やの小むすめ。繪もかく、手も書く、ナーヨー、ひぜんかさかく。

○太田のやけ日中見て底つけ。石でも粉になれ。小石はなほさら。
(香取郡)

粉挽歌

○野田のしどめを、たがもぢいた、こなかやさしどの、草苳りがもぢいた。

○あれもだごやの、だごむすめ、砂糖のきなこでおさいた。
○土氣にるながら土氣しらす。しんのやみに、くらみざか。

○このへの、おせどへごままいて、知行とらしやれ五萬石。
○このへのなんとでなるかみは、おるべす、おでや黒福の神。
(山武郡)

猪の子

○猪の子だー、これは何處の猪の子だ。旦那様の猪の子だ。
○今年は世なみがよくて、穂に穂がさいて錢倉に金倉。
○ぞろつと一ぱいつめこんで、さー寄つて祝ひませう、もう一つ祝ひませう。
(海上郡)

香取神宮神田耕式歌

神田耕式は、古來より天保年間まで、年毎に(陰曆十一月吉辰を卜して行ふ。)行ひ來りつるを、其後は十ヶ年、或は十三ヶ年に一回づつ行ふこととなりたり。然るに安政度行ひて後、専ら中絶の姿なりしが、明治十六年十一月再興して執行せり。
當日早且神職殿上の座に着く。耕夫等神庭に列立す。

千葉縣 猪の子 香取神宮神田耕式歌

- 次 神職神饌を供す。 次 宮司祝詞を奏す。
- 次 一同拜禮。 次 神職神饌を撤す。
- 次 耕夫に神酒を賜ふ。 次 音頭發聲。
- 次 謳歌者聲を次く。 耕夫等庭上にて假に耕の式をなす。
- 次 路歌にて進行、耕地に到り暫時休息す。
- 次 一同神田に下り、左右雁行に列立す。 音頭及謳歌者は前に立つ。
- 次 音頭發聲。
- 次 謳歌者聲を次く。 耕夫一同謳歌に連れて、蹶を揃へ神田を耕す。
- 畢りて神田の中央に幣を立つ。

○あれみさい、つくばのやーまのよーこぐもー、ホーイ、ホーイヤーホーイ、
よこぐものしたこそ、わーらがおーや國ー。(囃子)
○ヤレー見あけてみればおほかんどり、(同上)
見おろせば津宮名所舟つき。(同上)
○ヤレー、我夫は飯岡の濱であみを引く。(同上)

千葉縣 地搗歌 木遣歌 船歌

かかれかし、くだんの網の目毎に。 (同上)

○ヤレーめでたい物は芋のたーねー、 (同上)

くきながく、葉ひろく、子どもあまたに。 (同上)

○これ様の床間に掛けしかーけもの、 (同上)

をし鳥に、千鳥に、梅に、うぐひす。 (同上)

○これ様の七つの藏のくらびらき、 (同上)

白銀やこがねのてうし盃。 (同上)

○ヤレー十よ七が柳の下でせーりをつむ。 (同上)

せりはなし、柳はよーれてかーらまる。 (同上)

○十よ七がまてなら、しーどのでーさきでー、 (同上)

ヤ間を見てやれ。それでははやい(此間耕夫 鋤を止む)

はやければ親ちの息がきーれそろ。 (香取郡)

地搗歌

○東金茂右衛門、ナーナーヨ、嫁はどこから。七濱尋ねて、
ナーナーヨ、無くて江戸から。江戸く本町の、ナーナー
ヨ、糸屋の小娘、繪もかく手もかく、ナーナーヨ、ひー
ぜんかーさかく。

木遣歌

○うらの窓から、けつ三つつんだして、今月来月、さらい
月。 (香取郡)

船歌

初春

○はつ春の雪日をどしのきせながに、エンこざくら、をど
しとなりける。エンさて又夏は卯の花の、垣根の水に、
洗革、秋になりての其の色は、いつも軍に勝ついろの、
エン紅葉の窓に眺むれば、遙か向うに錦革、冬は雪氣に
空晴れて、エン宵の星の菊のさも、はなやかにこそ、を

どしける。思ふ敵を打ちに取る。エン我が名は高くあけ
まくの、エン剣は箱に納め置く、弓は、袋を出たさじと、
エン富貴の御代とはなりにける。

しらなみ

○やれ白浪の、打つや鼓の川柳、エン水にもまれて根こそ
出でける。けし風も花も櫻も藤あふひ、エン太鼓のばち
も川うつぎ、雨も林も五月雨る、たのむみぎはに田歌
のおんど、拍子を揃ひはやしなほ、エン勇んで植ゑる面
白や。植ゑく、早少女はり笠かうて、きじよへの。かさ
買ってたもるるならば、なほも、田をばうゑる、よへけ
に。いかに早少女よもの山々に、花の咲いたもけにさい
ても、咲いても御代は御目出度いとなり。ほにほがさい
ていろづく、あたりや、おしていかや、よのなかさんよ。 (此處不明)

お船おろし

○是のおせどの梅の木に見ゆき鳥が三つとまる。エン亦
三つ連れて睦じく、エンあれなる鳥と人間はば、エン

四季

○春は吉野に花さいて、かすみかかりてめがあかぬ。夏は

千葉縣 船歌

涼しき卯の花の、つつじつばきでめがあかぬ。秋はたつたのうす紅葉、はぎは錦でめがあかぬ。冬はささ山雪降りて、みぞれ嵐でめがあかぬ。

正月くどき

○御めでたいな、ヤイン正月御祝ひ松竹に鶴龜、千歳も萬歳も、さて其外は限りなし。代々御世はいづれはもしめかざり、さかざり、ヤインくもられ向ふおもかけの、ヤインヤイン、このいつもときはみよわかみぞれの、ホホンヤハ、さかいさかゆる國々も、島もひとつにゆたかなり。民もかまども賑うて、ヤインとささの御世となりける。

初春

○ヤ目出度いな。初春のよきひをどしのきせながらに、ヤイン小櫻をどしとなりける。ヤインさて又夏は卯の花の、ヤインたきねの水にあらひ革、秋になりてのその色は、いつも戦にかつ色の、紅葉にまがふにしき革、冬は雪根

松はハハ祝ひのものよ。

鹿島くどき

○われは、ヤハンとほどの田舎の順禮にごさる。めぐりくつて神の社を尋ぬるに、ヤインヤインヤヨ、この千早振ありがたの御事よ。天照大神熊野の権現、まことやら鹿島浦にて、ノホホンコリヤリヤみろくを船につみいと、ともへには伊勢と春日の、ホホン、ウンリリヤ中はかしまの神社。
(安房郡)

大漁歌

○江戸あしなかのおほこども、ばんずはさきで揃勢ひ、長濱の砂の数々急けども、百首根先でからまれて、もうち網にてあてられて、息つく所が金谷村、明金沖の胃島、ぐるり廻れば保田の浦、吉といふ地に引かされて、息つく所が家の下、しめる所が神明下、黄金のわくの、が日影浦、捕つてもく、捕れないのが、はさきのはなで、ホホホ納まつて候。これやまた一とや、すすきを捕つてすん

千葉縣 大漁歌

にそらはれて、ヤイン胃のほし水きくのざも、花やかにみこそをとしぎの、思ふかたきをうちにとり、ヤインわが名は高くあけまきの、ヤインつるぎは箱に納めおく、弓は囊にゆらさんも、ヤインとささのみよとなりける。

八幡くどき

○ぎをん精舎に上のみや、かたじけなくも八幡の、御立ち給ふみやしろを心静に尋ぬるに、總じて神の御数が九萬八千七社なり。ヤイン高天原に神います。神のふもとにいざなぎいざなみ様の御事よ。ヤイン吾等が古郷出雲國に立ち給ふさらばや、ヤイン神の御爲に、ヤインそをまんどころ、をんこんとあゆみをはこぶ、ともがらよ。たれかれ、うけさらに、ヤイン此の御利生を受けて、ヤイン引く矢はなさば高砂の、松は祝ひのよ。

西の宮

○ヤ目出度いな。西の宮、夷三郎るびすすむらは、命長くも長壽をたもたれ、よをしけり松山さんくとおとたよな。

まいた。

此歌は延享年間より傳はると云ふ。

(安房郡)

○今年や世がよい豊年どしで、濱が大漁で陸満作で、當處若衆が一同に揃つて、西の上總の鹿野山様へ、そのや歸りに木更津宿へと通りかかり、上なる通りは寺町通り、下なる通りは漁師町通り、中なる通りは旅籠屋町で、中でも名高き伊勢屋というて、宿の娘はさても美しい娘ぢや。一夜明ければ前掛たすきで、色よき衣服で門へと出でて、頃は六月半の頃に、上り下りの御客をあやなす。お上りならばお休みなさい。お下りならばお泊りなさい。何んと供達今は七つで未だ宿早い。この子に引かれて木更津伊勢屋が宿だよ。木更津今朝立つ宿の娘はさてもよい子だ。花に譬へて見やうぞーならば、正や二月は梅か紅梅、三月櫻で四月は卯の花、五月は野で咲く薊の花よ。六七月は野でも山でも、ちよと出て咲く野百合の花よ、立てば芍薬すわれは牡丹、わしらが歸る時や向うなる小山の小高き所へ、三月櫻を色よく咲かせて、一枝なりとも中な

るお枝を、一枝折りて國の土産に。 (市原郡)

中山踊 (ノホホン節)

○やれこのみだーどーじ、みだーのほさまが、雨ふりあがりに、しゆぎやうーと出かける。のむからたんねー、ぶつからはだか。向うのあねさん、これものだよ(下略) ○おえとこそーだよ。今出て踊る子は、あれが又白松の粉やの娘か。なるほどよいこだ。あのことそふなら、三年みつきも、はだかではらしよへ、うんとこ、しよつてもなんともねえ。(下略) (長生郡)

○おいとこ、そーだよ。今出て、踊るが、あれがまた、白舂の、粉屋のおさよか。なるほど、よいこだ。あのことそふなら、水もくみます、手鍋もさけましょ、三度に一度は、人の目も、しのんで、おまんまも、たきましょ。むこになりたや、むこになるには、あだやおろかぢや、むこにはならぬ。いちだい、二だいの、こなやぢやぢぢらぬ。先祖の代から、親の代から、ちやうど、わたし

○おいとこそーだよ、あれが平松(地名)平松(地名)の、こなやの娘は、なるほどよいこだ、あのことそふなら、三度にいちぢどは、手鍋もさけませうよ、おまんまもたきませうよ、おつけもしかけませう。それで粉箱かづいで、飯岡の端から銚子のはづれまで、粉よしよしとナ、賣らばなるまい。(海上郡)

高砂

○高砂もんくは、千人よれば、ア、十色でござるよー。わたしの覚えは、當世はやりの、もんくでござるよー。高砂ぢさまと、高砂ばさまはエ、はうきを手に持ち、くまぜをかづいで、かごをばしよいそろ。尾上の山へとさうぢにゆきます。五葉の松のナ落ちたる枯葉を、はうきで集めて、くまぜでつくねて、かごいに入れてナ、いろいろとすればヨ、高砂ぢさまは、あたりを見廻し、あたりを見ればナ、下なる小池にや、めがめとをがめと、そらを一ながめ、それにうかされ、高砂ぢさまは、松へ手をかけ、上を見ればナ、一なる枝には錢花さきそろ。二

で、十代つたはる、粉屋であればナ、むこになりたや、むこになるなら、明けのむつから、夜の夜中まで、大きな石臼で、粉をひきます。こなが、たまれば、白木の粉箱へ、どさらこんと、つめてナ、お家のごさほふ、そむいちやならぬと、うんとこどつこい、なんともござらぬ。こな箱かついで、西は七浦、東は九十九里、たいとはなから、いをかのはなまで、こなよこなよと、こまかにせります。さればこれより、花のお江戸い、そろそろのほりて、花のお江戸は、ひろしといへども、大名小名を申すに及ばず、うらだな、こだなを、こまかに、せります。おいせかいは日本橋より、東海道は、五十三次、かはいこひぢは品川宿だよ、川崎神奈川程ヶ谷、戸塚は、大磯、小田原、箱根をこえてナ、京都まではナ、又程長いが、ここにとりわけ、中山よなき石のナ、あたりきんじよの、十三四五から、六七八なる姉さんたちをば、ちよいとちよいとナ、まめのもち、くはせて、こなをうります。白舂粉屋も、又先きはながいが、こころでとめます。(山武郡)

の枝見ればナ、金銀小粒や、大札小札が見事になりそろ。三の枝には、よくく見ればナ、鶴の巢ごもり、これこそめれたき、尾上の松だよ。おめれたい。此歌は婚禮、紐解など、目出度き席上にて歌はる。(印旛郡)

肴節

○小西が、ナーナーヨーイ、小西、ナーヨー、小西がふかば、ナーヨー、船橋入りこめ、ナーヨー、船橋のりこめ、ナーヨー、船橋のりこめ。ナーヨー、船橋お茶屋でのんだるその酒、ナーヨー、お江戸の地酒か味淋酒さけか。ナーヨー、其の酒のめば、ナーヨー、其の酒のめば、ナーヨー、其の酒のめば、ナーヨー、末代長者となる。(夷隅郡) ○肴肴と、のぞまれて、沖のいなだに、二のかさご、これを肴につまいて。 ○肴肴と、のぞまれて、菊のさはちを、指にかく。 ○これのお背戸へ井戸堀りて、水もろともに黄金わく。 ○これの旦那は、酉の年、酉は目出たい、羽を重ね。

(市原郡)

○さかなくと望まれて、なにをさかなにいたしませう。
沖のいなだに根のあはび、これをさかなにみつまるる。
右の歌をうたひ終らんとするとき、座客中より左の褒
め詞を述べ。
(安房郡)

ほめことば

○ヨイ、しばらく、しばらく、しばととめたるこのやつこ、
ほめる作法は知らぬども、ちん、ちくとばかり、ほめま
うさう。
八十ばかりのこやつこが、錢を八文手に握り、酒屋の内
へかけこんで、酒を八文くだされや。酒は劍菱、男山、紙
屋の菊に七つ梅。酒の肴は何々ぞ。澤庵漬か奈良漬か、
または奥山千兩株漬と、ホホーつつしんで候。こらまた
一座御家御繁昌すんまいて、シヤン、シヤン、シヤン。
(座客一同三たび拍手す。)

右文政年度以前より現今に至るまで、中流以下の紐解
き祝ひの宴席に歌はる。

おりくる浪はしらすかの、太鼓はどんく乙濱の、私は
なんにも白間津の、おほかくと来る人は、千田まんだ
の重い人。ホホーやむこまた一座御家繁昌、すんま
いた。

此のほめことばは、安房郡の白濱附近の地名を唄ひ込
みしものなり。

○しばらくく、しばらくととめたところは、ごめんなり。
山家育ちの、やぶすけが、ほめる作法は知らぬども、ち
んちくとんばかり、ほめまうさう。ここに當村なにかし
さまの、花息子、今年七つの、紐解きに、七珍萬寶不足
なく、御器量あつばれすぐれたり。めした衣裳の、うつ
くしさ、緋紗綾、緋緞子緋縮緬、綾や錦でかざりたて、
染めも染めたり好んだり。さては仕立の見事さや、さて
もめでたき家孫子、ここに御家の高砂も、祝ひさざめて
おざしきに、鶴と龜との、みぎたりはうらやま、高
砂松も諸共に、千秋萬歳末御繁昌と、ホホ敬まつてま
うす。

○しばらくなく、しばと止めたるこの奴、ほめる作法は

○しばらくく、ほめる作法は知らぬども、ちくとんばかり
ほめ申さう。一に柏崎浦へ漁かして、二ににそつぱり
(二艘の船にて)はり立てて、三に三杯積みたてて、四つ
よるひる上げ次第、五ついつものおほせぐろ、六つ昔の
千兩どし、七つ波風ない様に、八つ山中へほし上げて、
九つ此處でたてぎして、十でとーかひ積み送り、二儀二
分のしきりとり、親方萬作、のりこ豊年。ホホーやむここ
また一座おふね繁昌、すんまいた。シヤンく、オシヤ
シヤンノシヤン。

○ちよいくと、とめおきましても、ほめる作法は知らぬど
も、ちんちくとばかりほめ申さう。私は此の岡沼の者、
あさぎの手拭頼冠り、松にこやしはごさらぬがと、ホホー
おやまつた。

○しばらくく、ほめる作法は知らぬども、ちくとんばかり
ほめ申さう。伊戸と川名のきそんにて、そのすのさきは
平砂浦、山と山とのあひの濱、其の根本尋ねれば、砂と
りどりの川下の、昔頼朝公の御休みなされたる野島かや。
腰はごみし海老島の、はらなぐらの平島やしほらさき、

知らぬども、ちんちくとん、ばつかり、ほめまうさう。
しばしく、すぎし七月七日始めての、あきなひ始め、
ちーさん、ばーさん、われのあきなひもの買つてやらう
ぞよ。久しぶりのあひさは山、大井なまつりは見事なま
つり、なぎなた、木刀をひびやかし、向犬切、前犬切、
御子神で御子が鈴ふる。宮下でなだかき山とは、渡渡淺
間、處で名處は中の森、川を渡れば川谷村、一寸腰かけ
れば石堂原、目出度いことには大杉、わしのなじみの若
衆は、めつた矢鱈にほめて下さる。ざとーざ頭まんまる
丸ごひいきとして前田くつき、沓見、安馬谷、すいも
にがいも色も香も、わしは松田の御文通り、すーつと通
れば、御文通り、大原小原の立つた處、沼でおちあひ、
狂言見に行かうぞや。たいしゆーぎ引きまはし、わた
しなじみの若衆は、めつた矢鱈にほめて下さる。西原
西原、池田の松とほめて候。
(備考)——を付せるは地名。
○トーザイく、止めてほめる作法は知らぬども、あの歌
之助様を、ちくとんばかりほめ申さう。船つくしにてほめ

申さう。おんともろうやともろうやともつれなくて來やせまい。目の前に前艫があるそばで、わき心を出す親を、五挺艫にかけて七挺艫でも頼まずば、人に前艫とは言はれまい。馬乗りは同じ五尺の身を持ちながら、人に身よせだといはれない。大鍋小鍋水樽はよ小口なきれのみ、大包丁艫杭の様な肩のせまい子をもてば、人に入込まれて、身の置き座がない。つくづく堀立や帆柱けた棒咄つて二番しめ、兩帆をあて後三番はやりくりの物どもから、かぢ棒でもくらはんは、親かた木ならどここのいづこでも、かぢはきくらん。

こらーまた、一座（三つ子祝 七つ子祝 或は何々） お家繁昌すんまいた。ヨード、シヤンノ、オシヤシヤンノ、シヤントコセ。

○東金のもゑむの、およめは、どちらから。三か村尋ねて無くて、江戸もく、本町二丁目の御茶やの娘。長持七棹や、つづらが八棹、やつづらに腰懸け、いけのてうづはよけれども、目ごちであみをひく。ほめことばは専ら宴席に歌はる。

（安房郡）

○ほめまうさう、ほめまうさう、ほめる作法はしらねども、ちんちくちんばかりも、ほめまうさう、ゆふべ生れた、鼠子をはじめて、はりをわたるとき、ちゆー、にけやう、にやー、やらんと、オホー、うやまつて候。此歌は七つ子の祝の席に限りて歌はる。

（夷隅郡）

東金節

○東金の茂右衛門のよめはどちらから。江戸も江戸も、本町二丁目の茶屋の小娘、長持が七さを、八さを、八つづらと、八つづらへ腰をかけ、あひのお銚子、お銚子の浦で網を引く。網引かばみごしにかかれ、このしろで。サシナー。

（安房郡）

十七節

○十七が小ざるを手にもち、柳の下で、芹を摘む。日は暮れる、芹はたまらず。柳は折れて、よれかかる。柳殿ゆるして下さい。お前も主ある花だもの。○十七と八百屋のお七と、品川真沖で小はせ釣る。日は暮

れる、小はせはかからず、さらば、歸りませう、船宿へ。

○十七が初でみもちで、何が喰ひたい。くはせたい、奥山の雪か、氷か、霜月師走の筈か。

（安房郡）

○十六七と、八百屋のおしちは、品川表で釣をする。釣竿はしー竹、矢の竹、絲よーは三味線三の絲。三の絲切れてもわたしと二人はし、切れやせぬ。○（山武郡）

これさま節

○これさまの旦那は、華のよい旦那、天からは米がふりそよ、地からは泉の御酒がわく。此の御酒をあがりし御方は末代長者と暮すべし。

（安房郡）

初瀬

○こらほどのお座の半ばに、うたこのまれて、のぞまれて、好きなればうたひ申すよ。おわらひあるな座の衆。さかもりは今がなかばよ、をり島臺をおだしやれ。しま臺のうは置などは物の上手がかざらいて、鶴龜に松竹するぞ。

千葉縣 これさま節 初瀬 歌題目 のがおし歌 蘿蔔種

よ。ご壽命ながく御繁昌。

○これ様の目出たいのご祝言、相盃のお酌には十七の二親もちに、長柄の銚子をさげさせて、鶴龜はまひてをさめる、蝶はひけを揃へしぞや。

（君津郡）

歌題目

村田の權ごん

○濱野日泰様へ、村田の權のが月参り、後ろには吳座を脊負ひ、前には重箱たたいて、親すごす。皆人は、村田の權のは馬鹿だとおしやるが、馬鹿では御座らぬ。今の浮世は、親さへすごせば、馬鹿では御座らぬ。

中山

○中山の御祖師の前で、題目お船が、おつきやる。檣七字の御曼陀羅帆に揚げて、表には、三十番神五番天神、あの船に皆が乗るなら、わし等も乗りたい。南無妙法蓮華經の帆の下へ、この船を風に任せて、お祖師の前におつきやる。

（市原郡）

のがおし歌

○佐倉御領の八重櫻、散りて御庭が雪となる。
○佐倉新寺だ（印幡郡）が建てた。日本ひびかす加賀様。

蘿たい甸たね種

舊幕名主庄屋の久松、多古藩主に参賀せしとき歌ひし者にて、今猶祝の席上にては必ず歌はる

○めでたいものは、だいこだね、はなさいて、みなりて、俵かさねる。サーテハイ、ヨイコラサノ、ゾブリトセー、モー一ツオマケニ、ゾブリトセー。

○めめよい鳥は、こいもよい、うぐいすは、姿ねいたにいたせて、音を出す。

折返

○ななつの倉の、くらびらき、しろかねの銚子に、こがねさかづき。
（香取郡）

茨城縣

苗取歌

○苗代の、みの出口に生えたる松はなに松。たるじが目には、姫子松、外の目には、若松。若松の一枝に殿の鷹が巢をかけた。巢をかけるには、只かけぬ。主を長者とかけた。巢の中をのぞき見れば、黄金の粒が九つ。一つは他所へ参らせ、参らせ、八つで長者になりとな。八つで長者になるならば、伊勢と熊野へ参らうぞ。伊勢と熊野へ参るならば、金で築土つくらうぞ。金でついで、つくるならば、鶴と龜を放すぞ。鶴と龜をはなすならば、蓬萊山を祝ふぞ。蓬萊山祝ふならば、錢ですだれ、編まうぞ。ぜにて簾を編むならば、米のさん三合がふ、まーかうぞ。
（久慈郡）

○オーヤ、苗取り上手が苗を取る、オーヤ、元うらそろへて中ごりに。ソラヌゲ〜。
（行方郡）

田植歌

○この苗をとりあければ、なごがなにへすまうぞ。よしのはで、船をつくり、東濱へ乗り出す。

○川原ごに晝寝して、鳥や籠を忘れた。十六七のあねごよりも名残りをしい鳥籠。鳥籠も籠によりけり。しじく竹の鳥籠、鳥はさんご三百、籠が二かん五百。

○六十六反六畝まき、たんだ今にさなぶる。まんがのとりえさ、お手うちかけて、明年ござれや田の神様。

○明の方から田うないやつこが参りました。一畝さくりこ、二畝さくりこ、三畝目畝先で金銀茶釜をほりだした。おぢーさんが金勘定、おばーさんは錢勘定といつてゆく。

○苗代の水なくち、はえたる松はなにに松。よその目には姫小松、たるじの目にはわーかまーつ。若松の一と枝、殿の鷹が巢をかけて、巢の中をのぞき見れば、こーがねつぶが、九つぶ、一とつぶをば京へのほせ、八つをば、長者に、なるならば、伊勢と熊野に、参らうぞ。伊勢と熊野へ参らうならば、駕籠で道中するならば、錢のさがふ

も、まーかうぞ。ぜにの三合も蒔くならば、うらさ池をほらうぞ。うらさ池をほるならば、鶴と龜をはなさうぞ。松と竹とを植ゑうぞ。蓬萊山ともいはぶぞ。千秋樂ともいはぶぞ。
（久慈郡）

○日はとろとろと山端にかかり、代田は富士の山程ごさる。そのよに夜田を植ゑるなれば、提灯たつお出しやれ。植ゑてしやれ〜。

○オーヤ、おひかけ、まくりかけ、くーるならば、オーヤ、たーだも、はーしるべい、きものー。

○オーヤ、だれよとみーかけて、追ひかける。オーヤ、おまーさんとみーかけておひかーける。
（行方郡）

○この田で千石とれたら、太郎次。伊勢七度熊野へ三度。

○出羽の羽黒の、イヨつり鐘は、ついてはなせば、千里もひびく。

○苗とり上手の苗とりやうは、もとうらそろへて、中よくしめて。

茨城縣 麥打歌

○おひかけく、おひかけまする。追ひかけく、来るなら
ござれ。

○まんがのとり柄に兩手をついて、明年御出てよ、お田の
神よ。

○腰の痛さにたつぞや、たるじ。そらに、立つとは、思ふ
な太郎次。

○富士の裾野の曾我兄弟は、親の敵をとりたいままに。

○この田はこれぎり、千秋樂よ。千秋樂とは、めでたくか
しく。

○日暮小松原しよなく、行けば、松の露やら涙の雨が。

○潮來出島の、よれまこも、殿に、からせて、よれささぎ、
ささぎ、そろへて舟につむ。舟はどこ舟、潮來舟、梶を
よくとれ、舟人どの。梶は舟人の役ぢやもの。ここはど
こだよ、舟人どの。ここはこーざき、森の下。森の下に
は狐すむ。わしも二三度だまされた。

○この苗なんどの、とりよささうな。蒔いたる殿ごの心の
様に。

○田うゑかやよめもしうともおなじふし。

なほよし。

(久慈郡)

盆踊歌

○今日今晚ごたいぎてござる。おやどはどこだく、一の
丸越えて二の丸越えて、三の丸さきへ堀井戸堀つて、井
戸は堀井戸、つるべは黄金、黄金のさきへとんほがとー
まつて、やーれそれとんほく、飛はねばねをきりぎ
りす。きりこくどなたのさいく。わかとの様のお手ざ
いく。

○向うのお山になにやらひかる。月か、星か、螢の蟲か。月
でもないが、星でもない。姑ばばの目がひかる。

○ここの子供にいやしんほ一人。後架こうかの前で、瓜の皮
ひろつて、ままごといたそ、く。ままごといやよ、く、
あね様ごとがよいわいな。

○こーこと坂町がどぶならよかる。どぶ板流して、あの入
のせて、あとから鎗でつつきめる。つつきやい、はり
やい、いしなけいたそ。石ちもなけて、けがでもすると、
てんでの親の迷惑ぞ、く。(行方郡)

茨城縣 盆踊歌 米とぎ節 酒造歌 念佛歌

○たうゑかや下女もあとからかけていく。

○ちのみ子のなくのもしらで田うゑうた。

○ほつとりとふとつたよめの田植うた。

○おやも子も見さかいのない田うゑうた。

○でまかせのうたもききよし田うゑうた。(西茨城郡)

○ヤレモサドツコイ。此田で千石とれたるときは、伊勢へ
七度、熊野へ三度。

○ヤレモサドツコイ。ほさまくくと名ばかりほさま。今朝
も前の茶屋で玉子酒飲んだとき。

○ヤレコラドツコイ。あはれなるかや石童丸は、父を尋ねて
高野の山へ。(西那珂郡)

○石をたたんで石菖を植ゑて、植ゑた石菖をお玉とつけて、
晩に九つ今朝また七つ、一つ残して袂に入れて、馬に乗る
のにほたと落とし、取るに取られず、下りるはかなし。

米とぎ節

○仙臺の、ヤーヨー、宮城か原の萩花、咲き揃うた、ヤエ
ー、錦に勝る萩のはなし。ヨーイトコラサナーヨーエー。

○今日は、ヤーヨー、目出度いお米とぎ初め。皆様、ハーヨー、
御手を揃へて、願ひます。ヨーイトコラサナーヨーエー。

○燕は、アーヨー、酒家の方に巢をかしけて、夜が
あければナー、酒賣りだせとさいづるし。ヨーイトコラ
サナーヨーエー。(久慈郡)

酒造歌

○がんだか、かもだか、かたあしやまつかだ。お茶のご飯
で、おさかなつきなら、仕事が出来ます。なつばのこーこ
で、お麥のご飯ぢや、仕事が出来ない。(久慈郡)

念佛歌

○水戸黄門光圀卿の安産御祈願所たる、瀑布山玉簾寺觀
世音の御利益を嘯歌せる歌なり。

群馬縣 田植歌 機織歌

簾の、瀧のほとりをながむれば、あらありがたや観世音、
懐胎婦人を救はんと、たつとき守りを懐中して、その聲
いかがと「さとまたや、よとだがはらにまく種に、不淨
を去りておつるみどり子」とそのうた三度となふれば、
安産芽出度くいたすなり。申さぬものこそなかりけり。
花のお寺にいたるまで、即身成佛いたすなり。

(久慈郡)

群馬縣

田植歌

○おいとしや篠田の森の、ヤーノ、葛の葉はー、くすの葉
はわが子をすてて、ヤーノ、走り行く。
○おいとしや八百やの娘、ヤーノ、火のとがでー、火のと
がで、あすにもしれぬ、ヤーノ、鈴ヶ森ー。
○十七がむかひでまねく。ヤーノ。橋がないー、橋がない。
わがみを橋に、ヤーノ、わたらせるー。
○利根越えてやはたの森の八重さくらー、やへ櫻八重には
さかぬ。ヤーノ、ここのいろー。
○鎌倉の八幡宮は、ヤーノ、何んで葺くー、なんで葺く。
檜の木とさはら、ヤーノ、こけらぶきー。
○夕暮に濱邊を行けば、ヤーノ、千鳥鳴くー、ちどりなく。
わがつまこいと、ヤーノ、三聲鳴くー。
○夕暮に山道行けば、ヤーノ、鹿が鳴くー、鹿が鳴く。わ
がつま来いと、ヤーノ、三聲鳴くー。

奈良縣

田植歌

○奥山のおざみのはなは、ヤーノ、いくつ咲くー、いくつ
さく。七つも八つも、ヤーノ、九つもー。
○すがはらの松王がせがれ、ヤーノ、小太郎はー、小太郎
は、我君さまの、ヤーノ、みがはりにー。
○鶯が御庭の梅で、ヤーノ、晝寢してー、晝寢して、いさ
しの來るを、ヤーノ、ゆめに見たー。
○奥山で鹿なく聲は、ヤーノ、なんとなくー、なんとなく。
妻こいくと ヤーノ、三聲なくー。

(勢多郡)

機織歌

○桐生めいぶつ三つあり。だつそーおめしに、からつかぜ、
なぜか、よこ町、おづしといふ。
○わたくしは、行きもかへりも、人力車、のるものらぬも、
ほところのせね。
○おまへ提灯なら、蠟燭一つ本とほしん。からりん、とん
とまからりんナー。
○おまへ雀ならば、竹藪一つほんともりん。からりん、と
んとまからりんナー。

(山田郡)

奈良縣 田植歌

○あーこを植ゑて、こゝを植ゑて、のしろも植ゑてさなぶり。
(宇智郡)
○本が千本、まさりて三本で、一石五斗とらう。
○上田のまるせ町、いつか植出て腰をのす。
○此田を八つ植出て、春日の山の桃をとらう。
○宮崎を夜更けて通れば、何事するやら、なく子さすりて、
寝さして、何事するやら、子がなく。
○苗持が苺をもりよつて、その苗ないと腰をのそ。
○面白の湯の峯の湯が、下でたかぬと上でわく。(吉野郡)

奈良縣 麥打歌 盆踊歌

麥打歌

○家内中、中のよいのが、神遊び、たかまがはらでわらふことあり。

○早蕨が、にぎりこぶしをふり上げて、山のよこづら春風のよな。

○しのびくして、来たからぢやもの、さぐればさはる、こしばかき。

○ふん、ここは、おにはさきの、しをりもん、戸をた、くにもた、かれぬ。
(宇智郡)

盆踊歌

○踊子よ。「なんぢやいな。なんぢやどころか、きよろくと、ヨイトシヨ、きよろくとなされては、音頭がとれぬ。

ヤートセー、ヨイトコセ。
○盆の十五日に踊らぬものは、ヨイトシヨ、猫かねづみか、空飛ぶ鳥か。ヤートセー、ヨイトコセ。

○白いおま、に、くろめのおかず、ヨイトシヨ、あすから紺

緋の糞たれる。ヤートセー、ヨイトコセ。

○私の音頭は葱の畑、ヨイトシヨ、節のないのが合點か。ヤートセー、ヨイトコセ。
(生駒郡)

ながし

○ナーン、ヨーイ、ヨーイ、私は今晚この席はじめ、コラはじめでおかどを、コレワイ ふみあーらす。サノヤレトコセー、ドッコイサノシヨ。

○ちよいと登れど高いとこ、ソラ 高々御免を蒙りて、コラ、でさはるところの、やーつがれが、ホラ はぢもちーじよくも、かへりみず、ドッコイ 音聲もかやうに

まーまならず、コラ、おき、苦しくは候らへど、コラ、ざーんじ、しばらく、おつきあひをねーがふ。サノヤレトコセー、ボンヤトシヨ。

○わたしは、ナーンヨーイ、ヨーイ、たーびーがーけー、みはよそのーもーの、ドッコイシヨ こゝらののかくしき、コレ、知らねども。サノヤレトコセー、ヤットコ

サノセ。

○とかく、ナンヨイヨイ、音頭と、コレなすびとは、

かけこゑ一つで、コレとれたもの。(以下略す)

○わたしは、ナンヨイヨイ、ちよいとでて、やぶれがさもろて、ヤットコシヨ、もろたのはよけれど、それこゑがない。

○ナンヨイ、盆はこいこい、正月くるな。年のよのがなさない。

○盆と、ナンヨイヨイ、あら正月と二處にきたら、こだつせたらうて、コレをどろもの。

○アナンヨイヨイ、もりと馬おひと、ときよりなしや。遊ぶ日がのておいとしや。
(南葛飾郡)

伊勢踊音頭

○伊勢の山田の今切る竹は、もとは尺八中は笛、末はおやまの筆の軸、筆の文句は何とかく。狀かく文かく耻をかく。

正二月をかき入れて、花の三月後に見て、蚤の四月蚊の五月、蟬の六月なきぐらし、盆は七月十五日、踊ろとはねよとそちのま、八九月は秋の頃、秋の頃になつたれば、

奈良縣 盆踊歌

あちらの谷にも鹿がなき、こちらの谷にも鹿がなき、鹿

がなきや又秋ぢやそな。なぜに紅葉が色づかぬ。ソラソ

ラヤットコセーノヨーイヤナ、アレハイセツセー、コレハイセツセー、ソレヤヨーヤナ。 (以上伊勢踊) (高市郡)

○盆の十四日の、どきくさ餅は、置けばぬぐさる、人にやりや惜しし。持つて行つて流そよ、五條川へ。

○盆と、正月と、亥の子と、節句と、祭りと一所に來たら、すし食うて、餅食うて、寝て踊る。

○正月二日のはつゆめに、白きねすみがつつれて、また三つつれて、六つつれて、お家のなんどへ、金はこぶ。

そのかねくづして、くらをたて、くらのぐるりに松うゑて、松は三代ごよのまつ、一のえだには一分金、二の又

枝には二米や小判がだらくと、三の小枝の其の末で、鶴と龜とが舞ひをまふ。なんの舞ぞとたづねたら、お家

繁昌のまひをまふ。
○硯船とし筆ほばしらに、かいたふみをば、ほにまき、たがひのくぜつを船につみ、思ふ港に、ついたなら、はや

奈良縣 盆踊歌

くいかりを、おろさんせ。
○鯉をつりたい、たかせがうらの。さをは二間のしのびだ
け、いとかはらぬきぬのいと、はりはきんばり、金の
しづ、こひといふじをうきにつけ、つられながらも、お
もしろい。

○わしとおまへは、そろばんのこひよ、さんし十二て、い
ろづいて、さんご十五で、よめいりし、四五二十でかね
つけて、五五二十五で子ができて、五六三十で、いね、
いねと、いふや又いにする、おちるなみだは、八八六
十四とやら、かみもしまだに、はもしろに、もとの十五
にしておくれ。
(宇野郡)

お花踊

○我等の殿御は春咲く花よとおち見えたり。花さく花に品
々ござる。梅に櫻に八重菊。八重菊のイヨ散る時は、殿御
に花が散りかゝる。左程に思ふ君様よ。思はゞござれ茂
り籤。お花踊りも是迄よ。
(吉野郡)

薩摩踊

まれて、サイく、アーヤレー、白い模様ある着物きて、
諸國諸商の店次に、ヨーサイ晒し出されて悲しさは、お
客か付いたら買ひ取られヨー、ヤレトコサンセドッコイ
シヨ、狭い所に振ちこまれ、嫌な男の腰付に、サイく
つもまれつがれ私や飲まれ、灰になるまで苦勞をする
ヨー。ヤレトコサンセ。ドッコイシヨ。

○一寸出ました御愛敬に、コラサイ、乗るか乗らないか知
らないけれど、サイく、乗れば頂上ぢや。乗せかけます
る。ヤレトコサンセドッコイシヨ、アーヤレー采々盡し
でやりませうかいナ。サイく、一采まくるは博奕の
こと、煮菜くはぬは上人様よ、ヤレトコサンセ、ドッコ
イシヨ、アーヤレー。散財するのはお茶屋の二階、サ
イく、四さいはお伊勢のサテ津の近所、ヤレトコサン
セ、ドッコイシヨ、後妻は女房サテ二度貰ひよ、サイ
く、六七歳は牛馬のさかり、八歳どめろは始末がつかぬ
。ヤレトコサンセドッコイシヨ、實際調べはお上の役
目ヨ。ヤレトコサンセ、ドッコイシヨ。
(吉野郡)

奈良縣 石搗歌 ざざんざー節

○丸くなれくまん丸くなれ、十五夜御月より丸くなれ。
○ひしになれくまつびしになれ。十津川さんのごもんの
やうに、まつびしになれ。
○かくになれくまつかくになれ、太政官のご判のやうに
まつ角になれ。
(吉野郡)

祭文踊

○煙草になるなよ、煙草の種に。サイく、蒔かれて生え
るは易いけど、コラサイ、一葉二葉になりたなら、許多の
先きから戀しられ、廣き畑に植ゑだーされよ、ヤレトコサ
ンセドッコイシヨ、アーヤレー、十七八にとなりたなら
ーよ、サイく、目鼻も腕も掻きもがれ、罪なき私に繩を
掛け、サイく、アーヤレー、天井裏と釣り上げて、少し
色けが付きたならーよ、ヤレトコサンセドッコイシヨ
ー、アーヤレー、元の我が屋へ連れ込んで、寄りたる籤
をば引き延し、サイく、ヤレく、大骨小骨とはなされて
ー、轉り轉りと巻き取られてーよ、ヤレトコサンセド
ッコイシヨ、上からぐうと押へ付け、一分二分にと刻

石搗歌

○此屋敷は、目出たい屋敷、鶴と龜とが舞をまふ。面白や
いよのへうたんや。
○此屋敷に、ゐどをほりそめて、水もわきだす、金もわく。
面白やいよのへうたんや。
○此屋敷扇を拾つて、扇めでたい、末繁昌。面白やいよの
へうたんや。
○此屋敷に、松の木植ゑて、枝も榮える葉も茂る。面白や
いよのへうたんや。
○此屋敷は、前から繁昌、今はわが世で、なほ繁昌。面白
やいよのへうたんや。
○子を持ちて、親となりたる人の身は、我おとなしく、子
をそだてよ。面白やいよのへうたんや。
○祝ひめでたの若松様は枝も榮える、葉も茂る。面白やい
よのへうたんや。
(宇野郡)

ざざんざー節

三重縣 鈎引音頭

○濱松の音はざざんざー。打ちませう。シャン／＼、もひとつせ。シャン／＼、祝うて三度。オシヤシャンノ、シャン。婚禮の時に歌はる。
(生駒郡)

三重縣

鈎引音頭

○敬つて申するは、天下泰平五穀成就、謹上再拜。目出度い鍵の引き始めし、年號月日、月の數は十二月、日の數は三百六十五日、あわせ(早稻)もとづき(十坪につき)なかくて(中稻)もとづき、おくて(晚稻)は一斗二升、豆小豆はさけうち、きびそばなたね(雲薯)は萬石、粟、唐きびは穂さがれ、午莠だいこ(大根)根深うし、二十四種の作りもの、南の國のおひきひつ、北の國ののたからもの、西の國の絲やわた、東の國の錢や金を萬斗船に積み重ね、何村字何々へ皆引きよせよ。
○早稻も斗付き、ウワー、中稻も斗付き、ウワー、晚稻は一斗二升、ウワー、豆小豆は提打ち、ウワー、美濃の國の絲や綿、二十四の作り物、此處に引き納め、ウワー。
○わーせもとづけし、なーかてもとづけし、おーくてもとづけし、大根かぶらはきねほどし、豆小豆さけうち、

西の國の絲綿、東の國のぜにかねし、山細の在所へ引寄せよ。

○山の神さん三十五まるらせ、わせも斗づけ、中稻も斗づけ、おくても斗づけ、いも大根が根がふかく、いて豆小豆はさけうち、一束に付き一斗五升、東の國の錢金、西の國の絲綿、このばんどみね山の神ごんぢや、川原の石のごとくに、引きよせ積みかさねてたまふ。

一月四日早朝各戸男子一人づ、山の神に参りて、七五三繩を木の鈎にて引くときとなふ。唱ふる文句は村によりて異なるれども、大同小異なり。
(阿山郡)

○やまとの國の麥米、かはちの國の絲綿、伊勢の國のぜにかね、山のかみひきよせよ。
凡四十有餘年前當地にもてはやされし歌。(名賀郡)

初午歌

○鶯よく使に來たか、たゞ來たか。ことし初めて伊勢参宮、一夜の宿を借りかねて、濱の小松の二の枝へ、しば

三重縣 初午歌 苗取歌

ごをかきよせ巢をくんで、十二の卵を産みそろへ、十二を一夜に目をあかし、親諸共に立つ時は、金の盃、黄金の銚子、飲んで喜ぶ福の神。
○此れのお家の庭に井戸ほりそめて、水が出もせで金が出た、有難や金が出た。
○檜柱を買ひととのへて、くらをたてよ、やれ金庫を。
○めれたくの若松様は、枝も榮える、葉もしける、有難や葉もしける。
○今年や世がよて穂に穂が咲いて、樹はさておき箕ではかる、有難や箕ではかる。
○これのおせどに胡麻蒔きそめて、知行がますかよ五萬石、有難や五萬石。
(志摩郡)

苗取歌

○こじうとめがとる苗は、もとがしどろで、ホーライ、植ゑられん。
四五十年前までは頻りに歌ひしが今は歌はず。
(志摩郡)

田植歌

○ながの、まち(田のこと)歌うて植ゑれども、それやまちなかに立つ。ソリヤナイヨ。
○やまどりや、わなにかゝりし羽はねはづし、たつはよろこぶ。ソリヤナイヨ。
(阿山郡)

○松竹や七五三のしめなはで、ところだいぐゆづりは。
○あねまされ、いもとごまされ、なかなるじらうは、まだましぢや。

○この町は大の町、水はだんぐ畦まぜぎり、こう路ち細かに植ゑおきて、米は八石ようござる。
○たもれぐ、おて苗たもれ、早くおて苗餘計たもれ。

○この町は大の町、十七はつほへはまる。苗たもれ編笠の殿。

○十七がつほへはまりて、そこなたもれ、苗たもれ、編笠のヨ一殿。

○十七がこほす涙が、高野山の奥の院の花立のヨ一水。
○十七が植ゑた茄子は、もとへなるな、末へなるな、中は

○神なれとよ、神なれとよ、ワウ、苗をおしわけて、ならな、妻や。ナウ。

○三本植ゑて、なれや、曾加の郡、たのめ、田の神や。ナウ。
○小管の笠を、かたむけて、何をナ、其の手入れや、ていれて、ソヤ、ていれてソヤ。

○京より下る、京より下る、早稲は、よいわせ、はびろのわせ、稲は三ばに、こめは八石よ。ナウ。

○宿はどこでとらうぞ。み山す、きの穂の上で取らうよ。一身田村大字一身田の一御田神社にて、毎年五月廿二日に御田植神事を執行す。其際神主及氏子うち集ひ、

神前に於いて上の歌を唄ひ、田植の形式をなす。歌は嘉吉年間のものなりといふ。
(河藝郡)

○娘には五貫五百の笠きせて、嫁には味噌がさ。
○わしの殿御の田すくふうは、蝶よはいよと、それや廻れ。

○甚七がかけたたすき襟は雪か、霞か、初霜か、手にもたまらんナ。
○十八が棚へあけられて、苗たもれ、苗たもれ、さいはかのとの。

ヨ一あざ花。

○けふは殿のお田うゑ、あしこ植ゑこ、植ゑ、苗代までヨ一植ゑよ。

○山中やまなかで婚をもてば、粟を三升に、栢五升に、うど一ヨ一ほで。

○濱ばたで婚をもてば、あらめ三把に、こぶ五把に、小鱈ヨ一九つ。

○伊勢雀、奈良の春日へ巢をかけて、伊勢の巢ヨ一戀しや。殿は何處へ、殿は瀧の吉原へ、ヨ一梅の花に。

○けふの田うゑの田主様は、大金持と聞こえた。奥は奥州南部や津輕、外が濱まで聞こえた。

○此の田で千石とれたるなれば、伊勢へ七度、熊野へ三度。

○雨は程よく降れよふれ、風もふくならほどよくに、秋は粃米倉にみて。
(名賀郡)

○此を戸あけよ。戸あけにや歸る。さいたかたなに露うけて。
(員辨郡)

(解)十七八の處女未だ手なれぬ田植をするに、中間に取残されて、面目もなければ、早く苗を給へ、苗を配る男子よと云ふ事。

棚とは田植のとき兩端には熟練の女を置き、中央に手なれざる女を置く。この中央を棚と云ふ。あけらるゝは獨り残る事。

○ふとほそもきたこそよけれ。おかせかづきのおかしさよ。
(解)絲太しとか細しとか小言を云ひつゝ、機もおらずに時を過し、早田植の期節来りても、新衣出来ず。

去年のま、の衣服を着けて、田野に出でたるに、人は皆新衣を着けて、甲斐ぐしく働くを見るに付けても、小言云ひ居し者は、新衣の着るべきものなしと云ひて、今更かせ(機に織らんと調製したる絲)をかつぎて行くべくも非ずと。(一志郡)

○あらおもしろや、苗とろや。苗の葉に置く露は、たーまか、つーゆか、おほつゆぞ。テ一ヤク、テ一ゾローヤ一。
○あの田も植ゑて、この田も植ゑて、伊治里小濱いぢりこはまへ尻乾しほほしに。

三重縣 麥打歌 かるかれ節 祇園踊歌

- ぢいへ(祖父の家)の田植、ばばへの田植、菊汁でようこんだ。
- 五月田植にや一せう(いちじょう)と思つた。手拭(てぬぐい)ふるて一できぬ。
- ヤレ腰(こし)いたや、腰(こし)いたや、袴(はかま)のこしで板(いた)ごしぢや。
- はねやれ駒よ、はねやれ駒よ、ばくちの采(いろ)となれ駒よ。
- 長澤谷(ながさわたに)の鳥追(とりお追)ひたて、甲賀(かよか)へかよふ半次郎(はんじらう)は草取歌。
- 生(なま)えも生(なま)えたよ、此田(このた)の草は。誰(たれ)をにくさに生(なま)えたやら。
- 誰(たれ)をにくさに生(なま)えたでないが、三十三日(さんじゅうさんにち)の草揃(くさぞろ)ひ。

(志摩郡)

麥打歌

- 私の殿(との)子は小鳥(こどり)が好きで、ヨ一夏(よいつか)は野(の)にで、小松(こまつ)の下(した)に、
- ヨ一(よいつ)小鳥(こどり)来(き)いと(と)の苗(こゝろ)を吹(ふ)くヨ一。

(河藝郡)

かるかれ節

- かゝるかれー、かゝるかれー、おやまもよーかーれー、お
- らけ(等)のて、(父)らはやーまーよーかーれー。ヤレー。
- 富士(ふじ)のーすそのでーひるねをーしーたーらー、サ一山(さん)が
- よいとのーのーめーをーみーたー。ヤレー。

申年(しんねん)富士詣(ふじゆぎ)に歌ふ。

(志摩郡)

クカラカ、ツ一カラカ、ヨ一オ一、ツクノツンツ
 クノツン、サ一アイ、ツクノツン、ツクノツン、
 ツクツンツクツン、ツクノツ一、ツンツクツ一ノツ
 。

大江山

- 大江山(おほえ)の鬼神(おに)どのは、都(みやこ)へ出(い)で、騒動(さわどう)なす。高い低い(たかいひくい)のへ
- だてもなしに、數多(あまた)の人々(ひと)つかみどり。源(げん)の頼光(たのひかり)は三社(さんしゃ)
- の神(かみ)にきせをかけ、鬼(おに)じんを亡(な)す企(こころ)を、渡邊(わたなべ)の綱(つな)、金時(かねとき)、
- 保昌(たもむね)、季武(きぶ)、貞光(さだひかり)、引連(ひきつら)れて、鳥(とり)も通(とほ)はぬ、深山(ふかやま)へ、登(のぼ)りて見
- れば細道(こまぢみち)傳(つた)ひ、神(かみ)の教(おし)へか有り(あ)りがたい。酒吞(しゆん)童子(どうじ)は、ち
- 童(わらわ)ぎよ一の姿(すがた)、酒(さけ)を吞(の)ませばよひがます。姿(すがた)はきじんと顯(あらわ)
- れた。残(のこ)らず鬼神(おに)を平(ひら)けて、神(かみ)の御生(みう)か有り(あ)り難(がた)い。

姫子

- 駿河(しゅんが)の姫(ひめ)の戀(こひ)の踊(おど)。都(みやこ)にお殿(との)は多(おほ)けれど、つぎのぶ庄司(ぶぢょうじ)を
- 一と見(み)上げた。つぎのぶ庄司(ぶぢょうじ)はよい男(おとこ)、召(よ)したるお馬(うま)は
- 名馬(なうま)なりけり。お馬(うま)の毛色(けいしき)は何(なに)ござる。ぜん(連)錢(せん)葦毛(あしげ)に

三重縣 天王祭音頭

祇園踊歌

- 津島(つしま)祇園(ぎおん)をこゝに遷(うつ)して、勸請(かんじやう)申(まう)す、惡事(あくじ)遁(に)れうと伏(ふ)し
- 拜(まが)む。(拍子(はし)を入(い)る)お庭(にわ)の境内(さかいうち)眺(なが)むれば、名木(なぎ)色々(いろいろ)植(う)ゑ雜(ぞう)
- せて、先(ま)は見事(みごと)なお庭(にわ)かな。(拍子(はし))天王(てんわう)様(さま)のお前(まへ)へ参(まゐ)り
- て、謹上(きんじやう)再拜(さいはい)再拜(さいはい)と、惡事(あくじ)を逃(に)れて有り(あ)りがたい。(拍子(はし))
- 社の境内(さかしのさかいうち)眺(なが)むれば、八方(はつぱう)八(はち)つ棟(むね)、檜(ひの)はた葺(ぎ)、之(これ)れにまし
- る事(こと)はない。(拍子(はし))宵(よ)のしんぎよく眺(なが)むれば、お山(やま)に提(た)
- 灯(あ)かざられて、まづは見事(みごと)な飾(か)りかな。(拍子(はし))お山(やま)の境
- 内(うち)眺(なが)むれば、青木(あおき)色々(いろいろ)敷(し)れず。先(ま)は見事(みごと)なお山(やま)かな。
- (拍子(はし))あ(あ)の山(やま)越(こ)えて櫻山(おうざん)、花(はな)折(お)り散(ち)らして、もむやうな。
- (拍子(はし))テンノテンテン、カラカ、テンノテン
- テン、カラカ、チツカカン、テコテ、チツカカン、
- テコテ、チチチチン、テコテ、カツカラカ、
- カインカラカ、テンノイヨ、テンコンテンコ
- ン、テコテンテコテン、テコテコテテンテンテ
- ン、テコテ、
- (終りの句の拍子(はし))ツク、カラカ、ツ一カラカ、ツ一

ひおどり糟毛(ぞうげ)、まづは見事(みごと)な毛色(けいしき)なるらん。越後信濃駿河
 で衣裳(いさやう)を仕揃(しぞろ)へて、かのかたびらで飾(か)られた。武藏野
 に色(いろ)よき花(はな)は多(おほ)けれど、露(つゆ)深草(ふかぐさ)で折(お)りに行(い)かれず。武藏野
 野(の)をはるく通(とほ)れば月(つき)入りし、今宵(こんよ)はこゝで泊(と)りまじく
 の。月(つき)入りし後に残(のこ)りし雲(くも)見(み)れば、後出雲(あごしゆん)がなごり惜(お)し
 やの。最上川(もゑがは)如何(いか)なる神(かみ)の光(ひかり)りして、浮(う)きたる石(いし)が流(なが)れ
 なるらん。峯(たかね)の小松(こまつ)が枯(か)る、とも、最上(もゑ)の川(がは)がいつくと
 も、姫御(ひめみこ)の心(こころ)は變(か)りまじくの。(安濃郡)

天王祭音頭

- このしゆくに井戸(いど)ほれば、水(みづ)が出(い)もせで金(かね)が出(い)た。
- 川(がは)の名所(ななところ)を尋(たず)ぬるには、あつたの川(がは)こそ名所(ななところ)なれ。
- 月(つき)の名所(ななところ)を尋(たず)ぬるには、明石(あかし)の月(つき)こそ名所(ななところ)なれ。
- 山(やま)の名所(ななところ)を尋(たず)ぬるには、富士(ふじ)の山(やま)こそ名所(ななところ)なれ。
- 津島(つしま)には鳥(とり)のやうな黒鳥(くろどり)を、つくりならべて、小松(こまつ)の小
- 枝(えだ)にとまらして、六月(むつき)ぎをんにあかした。
- 津島(つしま)にはもの御上手(おんじやうず)がござるやら、鳥(とり)のやうな黒鳥(くろどり)を
- つくりならべて、六月(むつき)ぎをんにあかした。(志摩郡)

雨乞歌

- 雨ぢやもの、あめぢやもの、何をなけくぞ川柳、サー水の早いをなけきそよ〜。
- 奥の川原へひるねして、サー水の出ばなをゆめに見て〜。
- むかひの山からしぐれきて、サーみんなじよろたちやしよほぬれた〜。
- しよほり〜とうゑた田を、サー今くる夜雨にからそかよ〜。
- こよひ、くはなの、はしいで、サーかさをとられた雨風に。
- よどの、よそいの水車、サーなにをまつやらく〜と〜。
- かもの、はんじが、おじやたやら、サーいぬがほえそよ、よつつじで〜。
- うるほひの後、里人禮の舞踊に用ふる歌。
- 榭と、とかけと、みと、ゆりと、サー人の心をゆりなほす。

盆踊歌

- 心で鬼にも蛇にもなるぞ。神にも佛にも。
- 二つある目が一つもなしで、八つ目うなぎのつらにくさ。
- おの山で鳥が鳴く、何と云うて。いつまで待てども来んと鳴く。
- 四日市から石薬師へがんをかけ、庄野わるいをなほさんと、こちや龜山ほど思ふぞへ。
- おまいにもろた煙草入、かはばたの柳にひつかけわすれた。
- すすきにとまりし玉の露、玉の露くしくとよんだも、むりはない。
- たーから船がー三ぞきてー、先なるふねにーは、なーにつんでー。綾やにーしきーを帆にあーけてー、綾やにーしきーを帆にあけてー、金襴緞子をつーんできたー、金襴どんすをつんで来た。中なる船にーは、何つんでー。

○稻は三束五把なれど、サー米は五斗五升五合ござる。(志摩郡)

酒とさーかなーをつーんで来たー、酒とーさかなーをつんで来たー。後なる船にーは何つーんで、後なる船には何つーんで。壽命藥をつーんで来たー、壽命藥をつんで来たー。

- 西山では、何やらー光るー、何やら光るー。月か星か螢のむーしーかー、螢の虫かー。月でもないーが、星でーもーなーいーがー、星でもなーいーがー、牛若殿が寺入りめーさーるー、寺入りめーさーるー、お馬のお鈴が光り候。七つでは鞍馬の山で、くらまのー山でー、ひるはお寺で學問めーさーるー、學問めーさーるー。夜はみたちでお立合ひー、おーたーちあーひー。牛若どーのが姿をみーせーる、すがたをみーせーるー、お身にやこがねのよろひをめーしーてー、腰にはー木太刀をどんどとかーまーへー、どんどとかーまーへー。牛若殿は五條の橋で、五條の橋で千人切をなされたよ、なされたーよ。鳥か、小鳥か、とぶ鳥か、とぶ鳥か。日本で一のまれ人よ、まれ人よ。ソレ〜。
- 日永若衆野々ほり参り、野々ほり参りは大儀でござる。

- 一の坂こーえて、二の坂こーえて、三つ坂目には、小池がござる。小池がすんだら金魚を見やれ。大鮒か、小鮒か、ねばちよでもないか。浮いてはしーづみ、ういてはしづみ、あの水のーむな、この水のーむな。山ではほー正が身をなけられた。
- 勘平かーらして、おか、をよんで、おーか、はよけれど、手くせがわーるい。あの種ほーぜり、此種ほーぜり、もーち米種をほぜくりだして、七合鍋で八合たいて、おーそろしやつかな、みなくーろた。みなくろた。
- 庭のかーかりに何植ゑて、庭のかかりに何うーゑおいて、下から薦めが舞ひあがる、下から薦が舞ひあがる。夕べ生まれたかーもの子が、ゆふべ生れた鴨の子が、けーさはちよろ〜、ゆーけめ候、けさはちよろ〜、ゆーけめそろー。水で足をはりつめらーれて、朝日のでーるのーをまーちかーねるー。夕日の入るのは、せひもなし、夕日の入るのーは、ぜーひもなーしー。
- 天竺のをーばごのとこからしる物一反へーてこそ、しろ物一反へーてこそ。こーれを紺にそーめて下され、はり

三重縣 盆踊歌

まの庄社の紺屋どの、はりまの庄社の紺屋どの。之を紺に染めれや、やすすいが、かいたのほそめがしーれてこそ、かいたのほそめがしーれてこそ。右のたもとにやー何をつけめーす紺屋どの、何をつけめーす紺屋どの。八重椿が一重ひらいて、二重つほんでー先でみだれすこころや、さきでみだれすこころや。左のたもとにやー、何をつけめーす紺屋どの、何をつけめーす紺屋どの。奥山の一本薄をもー機様にして、一本すすきをもーよにして、上前すこには、何をつけめーす紺屋どの、何をつけめす紺屋どの。谷の鶯こゑはーりあけて姿をみーせるこころや、姿をみーせるこころや。下前すこにはーな、なにつけめす紺屋どの、梅の折枝、中は小女郎のそーればし、そーれ橋にお茶屋をたてて、めめよーし小女郎

に茶をうーらさう、めめよーし小女郎に茶をうーらさう。ソレソレ。

○西の山から一本をきりだして、何にせうとて一本をきりだした。はたごにせうとて、千切にせうとて、めめよーし小女郎に、はたおーらそー、はたおーらそ。

○こなたの千歳福榎木、こなたのさしたる一の枝、何が何そろ江戸金が、何が何そろ江戸金が。東さしたる二の枝は、東さしたる二の枝は、何が何そろ江戸金が、何が何そろ江戸金が。北にさしたる三の枝、北にさしたる三の枝、何がなにそろ江戸米が、何が何そろ江戸米が。南さしたる四の枝は、南さしたる四の枝は、何がなにそろおめでたや、何が何そろおめでたや。

○天白川原をわたりるとして、わたりるとして、こんにやくせほねで足をついて、足をついて、薬やないかと、醫者衆にとーへば、いしや茶にとー

江州音頭

へーば、薬やいろく、ごさりーごさりー、ごさりーごさりー。山の奥なる蛤と、はまーごりーと、海の底なるかちごりーと、かちごりーと、牛の上齒に馬のつーの、うーまのつーの、しらみのせーすぢ、のみーのきーば、のみーのきーば、夏ふるゆきを手にしーて、手にしーて、水でやいて火でーねりて、火でーねりて、それをつけたらよかろござんせう、よかろござんせう。

○たーから島に、田をうゑて、一本かれば、千もかゝる、二本かれば一萬もかゝる、三本かれば一かすしれ。お蔵にお米が富士の山、酒にすめが和泉酒、牛でやるにも小石原、馬でやるにも道せまし、道せまし。車でやるにも、山坂を、ふねでやるにも、海はなし、うみはなし。ソレソレをどりはこれやまで、これやまで。

三重縣 盆踊歌

○一寸と出ました御愛敬に、なるかならぬか知らねども、覺えただけのあらましを、今からほつゝ述べます。ヤレ懸聲なくてとれるのは、豌豆と蠶豆ばかりなり。兎角音頭と荒畑は、懸聲なくてはとりにくい。御眞負の懸聲を頼みます。ヤレ奇妙頂禮遠州の濱松在の娶殺し、可愛い我子と添ふ娶を行けの去れのとどう慾な。行けと云うても行きもせず、去れと云うても去りもせず、臍線金の四五兩も、ヤレお醫者の前にと差し出して、もし是れもし御醫者様。毒な薬があるならば、一服合せて下さんせ。ヤレそこで御醫者様の申すには、人を助くる醫者だもの、毒な薬があるものか。そこで婆々様はうち戻り、ヤレ行燈にもたれて思案する。やれ、思案も付きました。青貝鶴に青とかき、流しの下の黒土と、五色五品とり寄せて、ヤレお茶の中へと煎じ込み、お茶が沸いたに娶ごされ。いつも險阻な婆々様が、今朝の言葉のやさしさは、一口飲むでも氣も付かぬ。二口飲むでも氣もつかぬ。三口には目がまうて、ヤレ死ぬる其身は厭はねど、後に残りし其

子が不便。上手で長いはよけれども、へたでながいは座の御無禮、こゝらで一寸と留めおいて後は諸君にまかせます。

(拍子) ハレワイサノコレワイサノヤットコドツコイ
シヨ。
(三重郡)

地藏縁起

左の歌は舊曆七月廿四日、地藏盆の地藏會式に歌ひ踊りしもの。

○地藏薩埵のそのむかし、とーじにあがめ奉る、二千年に及びける、靈驗あらたましませり。

○大慈大悲におーければ、地藏さつたにしくはなし、其經文に見えにけり。踊となして營みし。

○魂ちゆうに入りぬれば、従ふ者もなかりけり、此の時何を頼むべき。たゞ願はくは地藏の尊。

○衆生の福を得る中に、五穀のみのりを守り給ふ、稻葉に風がそよぎける、露ひやくくと潤ひて。

○二せの願をぞみ給ふ。一種の花を供するに、衆生の若患

鹿がすむ。秋の景色とまづ見えた。

○北のかゝりを眺むれば、松や竹に雪降りて、空が曇りてした晴れて、冬の景色とまづ見えた。

◎もみ歌

○御山のかゝりを眺むれば、松や檜を植ゑならべ、御裏のしんほくあら見事く。

神樂

○まづ一番の御廣前は、當所の總社をあがめける。なんとー春日御靈でござる。いざまづ神樂をまゐらせうエ。

○第二の社へ参りて見れば、弓矢守る八幡宮よ。宇佐の社に御神體、いざまづ神樂をまゐらせうエ。

○第三番の由來を聞けば、伊勢の齋宮の女宮なりし、五百の皇女の御靈でござる。いざまづ神樂をまゐらせうエ。

○第四の社は紀伊の國の、熊野御山のなぎの葉に、移りしこゝにあとたて給へ。いざまづ神樂をまゐらせうエ。

○第五の社は名に高き、祇園神社の牛頭天王よ。津島の社

に代り給ふ。そのほんぜいの深くして、あらありがたやく、かゝるみよりを守らせんく。

大宮

左の歌は早魃の時、村社高宮に雨乞の祈願をし、其靈驗ありしときに、御禮として歌ひ踊りしもの。

○参り來て此の宮に、鳥居のかゝりを眺むれば、七かい半の茅柱、是程たいそな鳥居をば、何たる人夫をかけたやら、何たる車であけたやら。自然木とはまづ見えた。

○御宮のかゝりを眺むれば、八つ棟造りに檜皮葺、是ほどたいそな御宮をば、なんたる大工が建てたやら、なんたるたくみがたくんだか。飛驒の工がたくんだか。巧にたくんだ此の御宮。

○東表を眺むれば、梅や櫻が咲き亂れ、春を知せる鶯が、はなふみちらすとさーへづる。

○南表を眺むれば、青きあやめがさきみだれ、水に螢がかゝやきて、夏の景色とまづ見えた。

○西のかゝりを眺むれば、青き山も赤くなる。萩や紅葉に

に御神體、いざまづ神樂をまゐらせうエ。

○さて寶殿の御内には、あまたの寶を積み重ね、氏子繁昌のみとの音、いざまづ神樂をまゐらせうエ。

◎もみ歌

○御山の木に年経りて、雌松、雄松の枝も榮えく、榮えるありがたや。

御禮

○ながき日照にありければ、下萬民に至るまで、皆々これを惱みける。

○あまり日照のものぐさに、當所の總社は春日の社、其外氏の御神や。

○あらゆる處の龍神へ、雨を祈りの神かぐら、神と君とのみちすぐに、氏子のなけきを憐みて。

○てんおんがんおんありければ、けふほーじゆんの時を得て、忽ちうるほひあめがした、五穀成就のいざほしゆや、けにありがたき恵みなり。

○眞如のほーどもおーそれながら、氏子どーもがそーでに

三重縣 盆踊歌

つられ、田笠のまゝに出で立ちて、拙き拍子のこをどり
を、神かしこくも知ろし召し。

◎もみ歌

○けに御利生の雨降りて、たづらの稻あぜぎりかゝる。五
穀成就ありがたや。

世の中

○神代の昔天照神の初めて御田をば作らせ給ひ、次第に
五穀もさかえける。今年の夏は思ひのまゝに、五風十雨
と程よく渡り、さかひの外に五穀もみのり、さては樂し
き御世なれや、七穂で米が五斗五升、尊い神の教とや、
其米を酒に造らせ、お伊勢の港へ諸國の舟が、帆かけて
みゆる。百艘の舟に米をつみ、百艘の舟に酒を積んで、
先はお伊勢へ奉る、有りがたや。神と君との道直ぐに千秋
樂とや、萬歳樂とや、歌ひよろこぶ限りなし。

無名

○そも日の本の國民はじまり、一天雲なきいすゞの神の末
たのしく。四方のうみやましづかに治まり、弓はふく

二ツとかよ、ふた、びかいらぬ身もちながら、なぜさ
て後世をねがやらぬ。

三ツとかよ、皆人ごとに思へども、上はだいそんせそん
のはじめ、しもはだいに至るまで、のが
れがたしは無常なり。

四ツとかよ、世はさかさまの浮世かな。わかいが先にた
つほどに。

五ツとかよ、いつ、七やは、三十五日。玉のすだれをま
きあけて、さんぞの、あみだが、ごらいこ
なざる。二十五菩薩かけんをなざる。黄金
づくりのその橋越えて、地藏菩薩が迎ひに。

六ツとかよ、無情の風にこそはれて、むしをのあみだが
まし〜て、はや極樂のかねをきく。

七ツとかよ、な、つなぬかは四十九日。三途の大河はは
やうち越えて、ゑんまの前におつきある。大
帳とりだし鏡にみせて、ゑんま大王の仰せ
やる事にや、しやばで作りし罪科ないか。し
やばで、つくりし罪科もない。ぐせいの船

三重縣 盆踊歌

ろにたちはさやよ。枝をならさぬ御代なれよく。民も豊
にかまど〜のにぎあひ、しるしにかゝるいさめをなす
とかやく。庭の千草も常磐の色増し、たくみにたくみ
しいらかのやかた、わけにもたふとく見えにけり〜。
神も佛も納受まし〜、幾代かはらぬ君の恵みごありが
たやく。

(安濃郡)

○さて今晚はご當處の、おみや様の御祭禮で、お若衆さま
が、ヤレコリヤセー、ヨヤサノセ、踊をなざる、ことな
るで、私ふぜいの者までも、ア、ヤレコリヤセー、ヨイ
サノセ、いかい御世話にあづかるぢや。ア、ヤレコリヤ
セー、ヨイサノセ。

(河藝郡)

○東西、しづまりよく聞きなされ。やれよい御庭ぢや、見
事な御庭。このよな御庭で、踊るとすれば黄金の眞砂が
足につく。なむあみだよ。

一ツとかよ、し〜とりうまれてし〜とりゆく。さては、
はかなき〜きよかな。

をはやくしらへて、綾や綿の帆を巻きあげ
て、みだの淨土へはなやかに。

八ツとかよ、八萬四千のその御經よりも、なむあみだぶ
つにしくはない。

九ツとかよ、こ〜こであはねば極樂で、あみだの淨土で
あひませうに。

十とかよ、十萬億土は遠けれど、南無と六字を唱ふれ
ば、即ちこ〜こが淨土となりて、やれあり
がたやなむあみだ。

太鼓踊

○若衆は聞くか、若衆は聞くか。歌つまおろして踊らせま
せうに、これほど靜かに目出たいさ、イヨお寺へ参りて御
門を見れば、柱は唐木戸扉は黄金、ようひぢかぬき皆
赤銅。氏神様へ参りて見れば、相生ひ大木が二本ござる。
下から黄金のつたがはえる。枝葉にぜにがなり下る。
(以下略す)

(以上太鼓踊)

(鈴鹿郡)

○丸くならいせ、それまん丸くなれよ、ドコイシヨ、十五夜お月の様にまん丸くなれ。サカヤツサカ、ヨイヤサカ、ドコイサカシヨ。

○わしの音頭で踊はしゆまば、踊をやめまい夜明けまで。シヨガイナ。ヤレやめまい、踊をやめまい夜明けまで。ヨヤサノサ、ソレ大豆畑の刈干しは、一つはしれば、皆はしる。わたしも一所についてはしる。

○音頭とる子が橋から落ちて、コラセー、音頭とる子が橋から落ちて、サノヤツサノセ、ヨイヤマカセ、橋の下でもちよと音頭とる、コラセー、橋の下でもノ音頭とる。サノヤツサノセ、ヨイヤマカセ。

○大文字屋のーかほちやーとして、その名はよ、市兵衛と申しまーす。お背は、コラ、ひくうとして、も、オーオーニ、さるーまーなこー。サトヨイワイ、ササヨイワイナ。

(南牟婁郡)

三つ拍子踊

○盆にやをーどらう、正月にぬー。ヨホホイ、あーひの

三井寺の鐘、いつかかへりて、又大津ぞや、いとまこへたへ、はやたびそらに、せたのからはし、はるくくとほる。草津いしべは皆くちくち、坂はてるくすゞかはくもる。

(度會郡)

○一ツとかよ、人の此身は朝露に、いかけに貫うて命なり。二ツとかよ、不淨の如き身を持つて、なぜに後生を願はんや。

三ツとかよ、未來を大事と思ふなら、なぜごしやうを願はんや。

○エーエー、金の迷ひの目をさます。シヨンガイナ、エーくく。

○サトヨイソラ、ヨイソラ、ヨイヤサ、ソラエー茄子のしんやき、やけたらもてこい。ヨイヤサ、ソラエー。

○ハイトコサ、ハイトコサ、ハイトコサの聲ならしめたもの、先づ今晚は今日は、日からもようて日もようて、踊りも首尾よく出来ました。サトヨイ。

日待ちにやよー、ヨホホイ、ちよいと歌習はう。チヨイトチヨイト。

(南牟婁郡)

大和踊

○大和通の栗木谷で、コラセ、命取られた、チヨイト金のー忍に。ヤツサノセ、ヨイヤマカセ。(南牟婁郡)

しよんがい踊

○扱どなたにもく、私は本國旅の者、旅は偽り他處の者。田を越え山越えて田圃越え、畔豆踏むで叱られて、盲目の人には見附けられ、足ない人に逐はへられ、手のない、にどつかれて、漸く此の地に着きました。サー今日は今晚は、御當處お村の御會式、踊は止めまい夜明けまで、夜明けて鳥が鳴くまでも。(以上しよんがい踊) (飯南郡)

○伊勢のはつ雪、あはれのことよ。月にむらくも花には風よ。さかりちらすや無情のあらし、はなにあらしの三右衛門こそ、伊勢の落萩浪花のあしも、さつとくどいて、

○チヨイト御免を蒙りまして、置いて行きな手拭なりと、ホイく、忘れたと云うて又おいで。ヨイトサンセ、ドッコイセー。

(一志郡)

源平踊

○壽永三年きさらぎに、おごる平家の一ぞくを、うちほろほせとの院宣を、源氏に下しおかれける。範頼義経兩將は、七萬餘騎を従へて、追手搦手ひきわかれ、一の谷にむかはる。平家の一門たてこもる。一の谷の城廓は、戦にかしこき知盛が、要害けんごに築きたり。されども勇將よしつねは、ひよどり越の難處より、みづから進みせめよれば、城はたやすくおちにける。打ちもらされしひとくは、八島が城へこもりしを、源氏おひよせせめよれば、城をはなれてふねに乗る。いそにみちたる官軍も、八千餘艘のふねにのる。平家のふねをとりまきて、數萬の矢先を射かけつ、平家の運や盡きけん、さしもにたけき知盛が、いかりをせおて海に入る。つづいてのこらずいりにける。平家の赤旗色さめて、源氏の白旗世

にてたり〜。

正月踊

○青葉の春にたちかへり、そらものどけきあけほのに、むすびあけるや初からず、あきの方をはじめとし、わが日のもとのかみくへ、いざやそなへん、かみもち。かれいのかぎりもことすみて、千代もゆるがぬ齒がためや、尻蘇をいはふめでたさよ。うたひはじめ、ふではじめ、さてくらひらきつかひぞめ、その日を選んでこれをする。七草はやす日となりて、わが衣手は雪のふる、野にうちいで、若菜つむ、睦月も半、たつ今朝は、かざりし松やかざり繩、ほこらすたけのおとたしか、ながれゆく日によどみなく、はやくはつ日となりきたか、なにしおふ日のをはりかな。ほんは間遠し正月はしまふ。雛の節句をまつばかり。

七夕踊

○夏も過ぎゆく七月の、心とびたつたなばたの、川をへだて、たなびく雲のその中に、いさみす、んでよぢのほり、おみねのはいしよをふしをがみ、こ、にしばらく休みつゝ、高いおみねとみなおほしめし、はるかしたにてらいがなる。それよりくだりはさしむかひ、しづかなりけるおん山に、参りあはせしうれしさよ。かたじけなさをかたりあひ、裾野にこそはおりにけり。踊子たちも皆うちつれて、笠にくに名や處をしるし、浴衣の模様も一つにそめて、老せのうちにまららしやれ。

廻船踊

○江戸廻船も多けれど、勢州白子のしんしやう丸、せん四五こも荷を積み、天明二年の極月に、鳥羽の港を出船し、相州灘をはしるとき、大西風が吹ききたり、山のごとくの大波が、ともかたよりうちかけて、駿河の沖にて吹かれたり。風はいよくふきつのも、ふねの上下をするには、せんしやう山と谷底へ、のほりくだるごとくにて、梶つか折れて飛びちりて、帆はすんく〜にさけちぎれ、十七人のもろともは、たゞ茫然としたりしが、

て、おりひめも〜、まれにあふとはひととせに、こよひばかりとやるせなく、ふかきちぎりはひと夜けり。せめてよはひはなが、れと、いのるもけにやしやく八の、ふしにおもひをきりこめる。たがひにつもるかすく〜を、ふきはらしたるみつのをも、とわたるふねの梶の葉に〜、いく秋書きつ玉章も、今やわかる、星合の、名残つきせぬあまの川。はやあけほの、鐘のおと、いざやかへらんをどりこしゆ。七夕をどりはこれまでよく〜。

山詣踊

○過ぎ行く年のみな月に、親しき友にさそはれて、つれもにはかにおもひたち、夏の旅路の駿河なる、富士のお山に詣でたり。そも〜ふじの稱號を、芙蓉が峯と申すなり。三國一の山にして、もろこし人も詩につくり、これをほめると聞きおよぶ。いかに高きおん山や、下界に暑き夏の日に、冬の衣を重ね著て、きえぬこともしるたへに、ふきつもりたるゆきをふる、つねにお山の寒きがゆるに、木々もそだたす草もなし。山路の足もかるくし

程なく風はやはらぎて、船中四方をながむれば、山も島も見えがたし。それよりやつきがそのうちに、しほと風とにさそはれて、あなたこなたに流れしが、翌年七月中頃に、はじめて島へ着船し、島の様子をながむれば、峨々たる山と島ばかり、これこそ異國の島ならん、なにとぞ日本へかへらんと、ろれいのみかどにぐわんしよあけ、歸國のわかいがあひかなひ、程なく異國の船に乗り、くうせん五年のきく月に、歸國の程こそめでたけれ。船人や水手を尋ね見れば、若松村の者なるが、ふねは白子のしんしよ丸。

源平踊、正月踊、七夕踊、山詣踊、廻船踊、五種の盆踊歌は、遠く中古の頃より明治二十年の頃迄、郡内川合村に流行せし歌にして、踊は八人の壯者羯鼓をかけ、一人若くは二人の小供中央に於て大太鼓を打ち、歌に合せて踊るなり。(一志郡)

忠臣藏踊

○頃は元禄十三年辰の三月上旬より、吉良上野と申するは、

浅野内匠と申するが、たかさいこんがかさなりて、内匠は無念な御切腹。御家老大石内藏の助、無念口惜しや敵うち、一味連判かたまりて、徒黨の人数申すなら、四十七人連判の、中にも寺岡平右衛門、足輕なれども忠義者、一味連判かすに入る。年號同じく十五年、頃は極月十五日、折しも其の夜は雪夜にて、夜打にいたする定めなり。徒黨の人数がそろひしに、堀川彌平と申するは、老人故におくれたり。妻や娘の願ひには、一人の義はすておいて、急いでおうち下されよ。大石どのの仰には、最至極のことなれど、連判一人はづれては仇打はいたさんに、心づかひは無用なり。右の老人たどりつき大石どのの定めには、人数がそろひし其上は、女下郎に目もかけず。天と川とのあひづにて、目出度くかたきを打取らう。表門への打ちかけは、大石どのがさき立ちて、十八貫目のかけやいで、十八貫目をつかふのは、堀部安兵衛と申すなり。うら門よりの先立ちは、大石主税に郷右衛門、十四貫目のかけやいで、火事よくと聲をかけ、兩門一度に打ちやぶり、玄關のか、りへかけついで、玄關の一

間をうちやぶり、一間ノをきりぬいて、上野居間へときりこめば、もうかなはんと上野は、ぬけあなくやりて炭べやへ、かくれていけど天のあみ、四十七人とりまいて、中にも矢間重太郎は、上野首をきりととりて、大石龍へとさし出せば、おてがら見事とよろこんで、かたきの首をひつさけて、表門へかけ出れば、頃は夜あけの六つ時に、かたきの首を槍にさし、四十七人ひつそろて、大石殿がさきだちで、お江戸の町を通りければ、皆々これはおおそれ入る。やしきくも多ければ、まことはこくしのきりびなは、陸奥の守の御屋敷の、御番所前を通る時、いかなるものごととがめらる。その時大石申し分け、おとがめ下さる御もつとも、浅野内匠の家來にて、この度主人のかたきうち、おとほしなされて下されよ。ほどなく芝の泉岳寺、たくみのかみの御墓所へ、かたきの首をそなへおき、まづ一ばんに内藏の助、皆々焼香拜すれば、御満足とおほしめす。

お江戸踊

○お江戸の城を拜見すれば、四方は石垣みかけ石、ひかりかややくやら見事。

○東のやぐらにあがりて見れば、音に聞こえし浅草の金龍山やらみごと。

○西のやぐらにあがりて見れば、音に聞こえし赤坂の山王権現やら見事。

○南のやぐらにあがりて見れば、沖へこぎだすご舟は、綾やにしきの帆あけて、諸國大名の船あそび。

○北のやぐらにあがりて見れば、音に聞こえし神田の森の、大たか小たか巢をかけて、ゑゑゑすゑはやら見事。

太閤踊

○からと日本へ名をあけし、さらば太閤秀吉の、結緒をこ、にしらぶれば、國は屋張の中村に、筑阿彌彌市といふ獵師、妻が日吉の権現へ、立願こめて懐胎し、程なく男子を生みにけり。その名をなづけて日吉丸。そだてあけたる八つするとき、寺へやれども、経讀ます。夏は水あび子守唄。(以上太閤踊)

○七月は七夕、八月は出代り、ヨイヤーヤーヤレコロシヨ。

○踊場のまん中頃で、巾着ひろたが主やないか。ヨイヤーヤーヤレコロシヨ。

○なすびのしぎ焼やけたらもてこい。ヨイヤーヤーヤレコロシヨ。

○ちよべか、ちよべか、もつこでつりだせ。ヨイヤーヤーヤレコロシヨ。(志摩郡)

大念佛の歌

○ナンマイダーブ(七回)

かはーをー、コンダコンダオシコンダー

ハ、いはへの枕へおしこんだ。

ハ、甲府のひだがきなかが、よからう。

ハ、甲府が見えて、なほよからう。

ハ、なごれをしや、おしろのじやうーや。

ハ、ヘイト、ヘイトコナ。

ハ、ヘイト、ヘイトコナ。 (以上大念佛の歌)

大念佛の歌は鐘と太鼓とにてはやす。

○おなつさんなるお家は、ナコーラ、なんたる大工が建てたやら、アノ洩りそな雨な、ヤレヤリー、しとくと。

○しをれた草を、ナコーラかれよとおつしやるよ。あたらし鎌の、ヤレヤリー、はが折れた。

二組に分れて踊るとき、一方が右を歌へば、返しとて他の一方にて歌ふもの次のごとし。

○折れたとだいじか、ナコーラ、こほれたとだいじかよ。諸國にアノかぢやは、ヤレヤリー、ないものか。

○ちよづかの坂は日が照れややける、雨ふれやすべる。それを好道ろくちに、なほせや伊勢地若衆。 (志摩郡)

口説節

○さーればーこれからー、わたしがーくーどーく。ホーリヤヨーオ、ンヨーイヤセー。

わーしーがーおんーどーはー谷ーほーそ川ーのー。ホリヤヨーオ、ンヨーイヤセー。 (以上口説節)

○古市の町を夜明に通つたら、杯音ががらりと。

○古市の真中で、此處は何處やと問うたれば、若衆や金の捨てどころ。 (志摩郡)

さくら節

○われは十七、わか身なれど、旅も都もまだ見ず。おやとかんどは、治つても、その身は、みやこまゐりは、せうずもの。まづ一番に、奈良へまゐりて、奈良の春日の祭を見れば、お馬揃ひに、よろひ道具に、まづは、す、どい祭の。奈良を出てから、堺つきそよ。堺港にかゝるお船は、なんば船とはあれーかの。堺出てから、やがて程なく住吉のお寺に、参りて石の鳥居とはこーれかの。あとでおや子が、なけきなすやら、なんほ今夜の、お夢に見えそよ、いざや、もどろや、ともだち。

○そらを、さいづる時鳥、まこと冥途の鳥なれば、世になき弟をたづねんと、地獄極樂、見廻りて、なぜにかたらしぬ、有様を。ありさま語るまでもなし。人に慈悲せよ、わるぎを持つな。たゞ今生は念佛よ、西も東も知らぬ子

八、中は笛、末は踊り子のあや竹に。

○これより東中池で、十七姫御が菅を刈る。何にせうやすけを刈る。みのにせうやと菅を刈る。簀になるまい笠に縫うて、大阪殿御に、のてきせて、坂井のまちでをどらうよ。今行く道は、山道女郎衆、小芝に小草に露うちかけて、十七姫御が、出てまゐる。山田の稲の葉色のよさよ。葉色がよければ、あぜよりかゝる。京で一ばん柳屋の娘、白足袋はいて、綾をおる手もと、いとしいはないか、皆若いしゆ。

○瑞穂の國の其の國の、瑞穂の國は我が國の、最も喜ぶ我が國は、八千代にさゝれ石、いはほとなりて昔のむすま

で。○やらよいお庭ぢや、見事な御庭。これよなお庭で踊らばよかる。踊るとすれやまた柳櫻へ夜露がういて、踊るとすれや踊られん。こなたのお松は目出度いお松。通るおたかが巢をかけて、十二のかひ卵こを産み育て、六つをばつれておたちやる。六つをば後へおいてたつ。やらうつくしやおたかのひよこ。肩また、はごひ(羽わひ)は、り

に、位牌持たせて 色著せて、野邊のおくりをさす時は、涙こぼさぬ人もなし。すぢなき人にゆはすれば、それせぬ身ぢやとて、あのみちに、またとかへりし人もなし。 (志摩郡)

羯鼓踊歌

○歸命頂禮釋迦如來、多聞第一阿難尊、善惡苦樂の其上を、問ひつ答へつ因果經。現在諸人の有様は、皆これ過去のしわざなり、六根器量のよい人は、忍辱柔和の果報なり。生れて醜き其人は、腹を立てたる報いなり。貧乏なる家は、慳貪人のしわざなり。啞つんほーと生れるは、人をそしつたむくいなり。命も短く子もなきは、殺生をしたるむくいなり。子供男女に榮ゆるは、もの、命を救ふため、南無阿彌陀佛。

○もりやさんの、お屋敷ごろじ。前は石垣高塀がござる。裏は大川舟がつく。もりやさんの、御井戸をござる。どは巻井戸、釣瓶は黄金、ひき上げて見れば、金の水かよ。銀の水かよ。もりやさんのお藪をござる。しちくもござれや、はちくもござる。其内で五本ほしや。元は尺

ん／＼こがね、肩またはこひはむらさきに、花の都につきにける。(度會郡)

御宮入

○これのうらな紫竹だけ、よかる目を見て伐り初めて、綾や錦の掛竿にせう。花のわたりを踊らうよ。これのうらな淡竹だけ、團扇に張りて繪を書いて、我が殿御に遣りて踊らせう。花のわたりを踊らうよ。此方の御庭に踊が参る。踊はどれからまゐる。出雲の御倉が皆参る。御倉に續いて御施料が参る。馬に黄金を着けさせて、早よ往て卸しやれ、倉の鍵取。鍵取が倉の出口に晝寝して、錢を敷きねに米を踏まへて、十五夜の月のごとく、やじよ、いり舞し、やじよ開く踊る若い衆、やじよ開く、やらさせませう。とゞめく品は鎮めて給れ、鎮めて給れ。一節諺うて聽けませう。(飯南郡)

世の中

○今年の稻は何程出来た。穂色の善さよ、見事さよ。七穂よ。裾には近江の湖、肩と裾には西國船が浪に揺られ揺らされ申して、艫舳を並べたところよ。上る小首に下る細物、今こそ形をば書きたてたし。(飯南郡)

牛若丸

○音に聞こえし牛若様は、日本で一のまはり人、七つでは鞍馬へ登り、晝は御寺で學問なさる。夜は御太刀でたちを撃つ。二尺七寸前にかいこみべして、其身のいくをりは、如何なる御てんま鬼人なりそよ、我が前をばえもんとせう。京編笠をみすまゝに、黄金の柱をばくまゝに、太刀に小太刀をもすとかまへ、五條の橋へと御越しある。五條の橋での姿を見れば、鳥か小鳥か空とぶ鳥か。千人斬の見事さよ。(飯南郡)

子をどり歌

○長崎浦へ出で見れば、から／＼舟が三艘來た。さきなる舟には何つんだ。きんらんまきもの、積んできた。めしめたもりやれ、若い衆たち、處繁昌となる程に。中なる

で米が五斗五升。其稻を一鎌刈れば千把刈る、二鎌刈れば二千把刈る、三鎌と刈れば數知れぬ。其稲を一ゆり洵れば一萬石、二洵り洵れば二萬石、三洵りと洵れば數知れず。其米を升にとかけを取り初めて、あなたの御倉に納め置く。其米を宵にかすれば富士の山、酒に造れば泉酒、其酒を十三姫御に酌させて、十七若い衆が御飲みある。看は何と好まれた。れんけつばたに杜若、紅梅梅に菊の花。(飯南郡)

帷子踊

○白帷子を七つもちそよ。一つは殿御に染めて着せう。染めて着せねば、ぎしゆになりそよ。染めて下され播磨の諸處の紺屋殿。染めておますは最と易すけれど、形をば何と書かうやら。左の袂にはぎしゆの櫻が、一よ蕾んで一よ開いて、咲きじや亂れた所よ。右の袂には、秋鹿が妻戀ひかけて、かんよと鳴いたるところよ。下がい襖には、細谷川の鶯の聲をば、聴けども姿を見せぬ所よ。上がい襖には、天竺へ恐れ申した、十五夜の月の有明目そ

舟には何つんだ。きぐすりなんぞをつんできた。召してたもりやれ若い衆たち、處繁昌となる程に。後なる舟には何をつんだ。小間物なんぞをつんで來た。めしてたもりやれ、若い衆たち、處繁昌となる程に。(飯南郡)

御宮様

○御宮様へ参りて見れば、御天王様の、おやぶをごろじ。七雲もござれば八雲もござる。五本と申せば、三本たまる。をどるわかいしゆのさゝら竹にせう。御天王様のお井戸をごろじ。お井戸はまきると、釣瓶はこがね、十七ひめごが水をくむとの、水をくまいでたからをくみやれ。誠たからをくみやるならば、あすは吉日日もよいをどり、倉の地を引き石をつくとの、倉の地を引き石つくなれば、白銀柱を建てやまらそ。白銀柱を建てやるならば、黄金のぬきを通しやまらそ。黄金柱のぬきを通しやるならば、ぜにで、やぐらを上げやまらそ。ぜにでやぐらを上げやるならば、たちでもがりを、ゆひやまらそ。たちでもがりをゆひやるならば、米で小づちを

つきやまのらそー。

(飯南郡)

お寺

○お寺へ参りて、御門のか、りを見物すれば、小門の柱から木で建て、白銀とびらでやりや見事。それさきすぎで、お庭のか、りを見物すれば、おにはの櫻は高くして、春ふる雪を手に取り見れば、雪でなくして、花でそろもの、さうろ物、さくらいろいろと、こそでを二つに染めおいて、花のちるての後のゆるしに、ゆるしに。それさきすぎで、ないじ(内障)のか、りを見物すれば、ないじの柱は金ばしら、さりとは、見事な、ないじかな。それさきすぎで、りかのか、りを見物すれば、からから梅から菊から橋、さりとは見事のりかかな。それさきすぎで、客殿見れば、花のやうなる小花たち、むらさきすゞりて、ゆえんをのべて、ふみをかきつ、流しつ。それさきすぎで、茶の間のか、りを見物すれば、茶筌茶びしやく、黄金でのべて、白銀茶んすに黄金ぶた、さりとは見事の茶の間かな。それさきすぎで、納戸のか、りを見物すれ

ば、綾せんざはや、絹せんざはや、さりとは見事な御寺かな。

(飯南郡)

牛若丸

○牛若様は幼少なれど、七の年から、鞍馬の山へと、おはします。晝は一日學問なさる、夜は鞍馬の、よーしよー谷で、お天狗様とは、はや兵法し、はや兵法を明らかに、五條の橋にと進み出でる。千人ぎりをなされさう。九百九十九人はためされ、一人たらいで、おまちある。そこへ辨慶まかり出て、牛若様とは、よ知らずに、火花を散して切り結ぶ。なくなき辨慶うち負けて、家來になされと頼みする。牛若様はあづまをさいて、奥州へくだる。かねほり吉次も奥州へくだる。牛若様もおくだりや。雨もふらんに草つゆに、風もふかんに、森山の矢矧のしゆくへとおとまりや。

(飯南郡)

人立

○あすは人立御人立、今はかき見の御人立、皆ひらだちの

ちかゝる。

○日本がらんは多けれど、奈良大佛や嵯峨の釋迦、三國一の釋迦なれば、之にましたる釋迦はない。

○春日様、猿澤池の鯉鮒は、鯉ははねるし、鹿は伏す。

○奈良のかたの薬師堂は、名所な所にお立ちある。前は大川、後は山の岩がけ。

(安濃郡)

神田祭歌 (一名御田祭)

- 神田の起原は上古の昔、眞名鶴の落せし綾羅穂の植ゑ初めぞ。
- 落ちし稻穂は畏く祈の此世救ひの恵みの賜なり。
- 植ゑし處は名に負ふ千田のめでた、ありがたの御池の中。
- 千田の御池に實りし稻は、是ぞ此世に美米の始めなる。
- 此を紀念に村里人は、今日の祭をいや壽き、いや祝ふ。
- 實の垂穂の美米こそは、御饌に作りて神前へ奉るなれ。
- 千町の小田に靡く稻は、今日の祈年祭の驗と知らめ。
- 探る手もたゆき山田の早苗、秋の豊けき樂みも望みも著

おふれある。刀を何と好まれた。二尺七寸なみのひら、金のしづかと好まれた。鎗をば何と好まれた。石づき白銀中木箱、末は黄金の二重巻。弓をば何と好まれた。からしの弓に重藤を、七人張と好まれた。うつほを何と好まれた。さるかはうつほに、ほろかけて、むんすをくんだと好まれた。冑は何と好まれた。四方しらたうふきかやし、みな金かぶとと好まれた。具足は何と好まれた。上八だんの紅に、下六だんの紫に、おやのはづした十三だんと好まれた。馬をば何と好まれた。七け七分に明六歳の、金覆輪の鞍しかけ、いかなる天魔が鬼神でも、我等の前ではえもんとしゆ。

(飯南郡)

御神樂

- 日本あるじは、うちやよーだ、國の將軍は殿様の、これにましたるしゆごもなや。
- 京より名だかい國はない。愛宕の山や比叡の山、清水寺も打ちすぎで、五條の橋が名所かな。
- やはた様、いかきの内で吹く風は、おぎよいよければ落

○僅か残れる門田の稻を、残れ刈るまで夕日の影も明りも

○今年や世がよて、垂穂の稻を、家に積みはえ豊かなり、
長閑なり。

○稻をこきとり、賑ふ見れば、有りがたの代や、楽しく面
白や。

○稻穂打つ竿たし、響き、國の百姓いや榮ゆ、く。

(志摩郡)

稻刈歌

○月日もうけよ、行く末の、神に祈りの有るならば、頼
みをかけて御注連、ながくや、よとも祈らまし。

○いざわれも、たちわたり、むかしのあとを、みちのくの、
ちかのうらわを、ながめんや、ちかのうらわをながめん
や。

(志摩郡)

亥の子餅搗歌

ヒヨイヨイヨイヨイヨイ。(商家に)

○上下早かれ。しやはせよかれ。ヨイヨイヨイヨイ。お
船も御繁昌、小舟も御繁昌。七上下、八上下、九上下、
十上下。ヒヨイヨイヨイヨイ。(船に)

若し寄進を拒むときは悪口を叫び行く。例令ば貧せ
く、足はすりこぎ、手はてんほ、頭はやかんになつ
てうせ云々の如し。併し今日にては殆ど止みたり。

(志摩郡)

役拂ひ

陰曆大晦日、年越の夜など「ヤツク拂ひませう役はら
ひ」と呼びつ、市中をあるき廻り、家々の望に應じて
これを唱へ、一厘二厘等の端錢を貰ひ集む。新平民特
有の業なり。

○目出度いな、目出たい事でまうそなら、あなたお宅
を見てあれば、四方は白壁八つ棟造り、屋根は黄金の、
ふきおろし、西の窓には鶴がつく、東の窓には龜がつく、
鶴は千年龜は万年、と一ろ一菩薩は九萬九千年、こなた
の旦那は黒、奥様恵比須、生れ來た子が福の神、あな

三重縣 役拂ひ

陰曆十月亥の日に方り、新婚ありし家に、兒童集りて
石を搗く時の歌なり。

○亥の子もちついて、いはんものは、大うめ小うめ、ひ
けのはへたおやぢ、こ、のよめはんしんまいもちで、い
はうてやれ。

(名賀郡)

山の神勸進歌

霜月七日五つ六つの子供、山の神の勸進とて歌ふ歌。

○山の神の誕生日、おいへも御繁昌、小家も御繁昌、あきな
いしやうばいよい、仕合よかれ。ヨイヨイヨイ。

寄進を受くれば

○このいとこの、うちは、ふいこせ、金銀まひこめ、
鶴も龜も舞ひ込め、仕合よかれ。ヨイヨイヨイ。

○ふいこばいせ、金銀まひこめ。鶴もお龜もまひこめ。
まつだしいしふいこばせ。お家も御繁昌しやはせよかれ。

ヒヨイヨイヨイヨイ。(士族の家に)

○ふいこばいせ。金銀舞ひこめ。鶴もお龜もまひこめ。
まつだしいしふいこばせ。商賣はやれ。しやはせよかれ。

た目出たい福蛭子、これも旦那の御きつさうにて拂ひま
せう。

○目出度いな、目出たい事で申そなら、蛭子大黒布袋
様、錢はよみどり、金はかけどり、大判小判は重ね取り、
お玉杓子の荒削り、高砂や、尾上の松の下よりも、黄金
の焙烙堀り出し、ちんからからと炙りたる、豆の飛ぶ時
にや、鬼の眼にハツシと當り、鬼は恐れて逃げ出す。福
はあなたへ飛入飛入にて拂ひませう。

○目出たいな、目出度い事で申そなら、お當家役ぜん
様(役前)の、様のお庭さきで毘沙門様が、扇子一本ちよ
とひろひ上げ、辨天様が開いて見れば、松竹梅や鶴に龜、
梅は古木の司なり、要は天の岩戸なり、はたな親骨二本
が外宮様に内宮様、中な小骨は八十末社にたとへたり。
扇目出たい、あなた末御繁昌にて拂ひませう。

○目出度いな、天氣と打出す太鼓、あれは角力の
呼太鼓、今日の角力は何處でとる。千田川か稻川か、四
本柱の弓取りは蛙の崎か朝熊山、奥に奥様、みでまへの
かん一ぺん、此處明けてくれで拂ひませう。

二〇三

○目出たいなく、めし盡しでまうそなら、一にや芋飯、二にや握り飯、三にやさ、け飯、四にやしめじめし、五は牛蒡、六つ麥飯、七つ菜の飯、八つやき飯、九つ強飯、十で豆腐屋のきらず飯にて拂ひませう。

○目出たいなく、目出たい事でまうそなら、しんうすゆきの、いちらくなり。しんうすゆきの事なれば、佐々木の四郎左衛門高綱といふ人は、西三十三ヶ國の、平家の城を残らず焼き滅ぼして、其名はかんじんちやうと偽りて、四つ目の紋の白旗を押立て引立て、何萬條二つ丸を小脇にかい込んで、悪魔は鐵砲の筒さきにてほ、らのほん、福はあなたへ、どろんどんにて拂ひませう。

(阿山郡)

地搗歌

○大望なやぐらを組みたて、ヨソヨイ、空は三十三天の、ヨソヨイ下はならくの底までも、ヨソヨイ、ひき渡るやうな、どーつきで、ヨソヨイ、どんどんどんと有りがたい。ヨソヨイノヨイヤナ、さりとは揃た。さらばそのやなひーきやけ、そーれや。エーンエーンヤトヤー。(三重郡)

もつく、犬めが吠えつく、夜の道。

(員辨郡)

花の枝

○エー花の枝、エー花の数々それある中に、ドッコイ／＼／＼セ、梅と櫻はそれ色くらべ、ノーホンサユホンエユハ／＼エー、濱のあはみを九つよせて、ヨイ／＼、これを九貝といふわいな。ヨイヤサノ／＼／＼ヤツトコセ、アリアセー、コリヤセー、寶を、エーカンチロリン、國土に、エーユハ／＼／＼エー、ヤツサノ、よござんす。エーエーエー。

○花の枝エー、これはどなたも御苦勞でござる。若い御衆は………ノホンサユホンエー、天の星をば九つよせて、是を九曜と云ふわいな。ヨイヤサノヤツトコセ、アリアセコリヤセ、寶を、エーカンチロリン、國土に、エートコヤツサノ、よござんす。エーユハ／＼／＼エー。(員辨郡)

○抑々地搗の故實をば、ひそかに思ひ尋ぬるに、最とも、古けき神代の昔はいさ知らず、神武天皇東征の後普天の

三重縣 地搗歌

こんたん節

○一つ一のこんたんは、こいつは又どーぢやいな。サノ／＼ヤツトコセ、人と生れて来たなれば、人の人たる道まもれ。アーサノ／＼ヤツトコセ。(員辨郡)

潮來

潮來は音頭的一種にして、地搗の時に唄はる。

○伊勢で宇治橋さて宮巡り、外宮内宮に淺間山、天の岩戸に相の山、お杉お玉の弾く三味は、縞さん紺さん淺黄さん、淺黄のしほりもなげさんせ。いかほどしまつにしたととも、實古市や明星で、戻りははだかで歸らむせ。

○祇園一カさて大騒ぎ、客は大星由良之助、飲みるる此處ぞ蛸肴の、椽の下には九太夫が、おかるは二階でのべ鏡、疑ひ晴れたる寺岡が、二度びつくりの鑄刀、表は不忠と見せかけて、底にはかたき油断さす。

○春は羽子つく皆手毬つく、祝うて味噌つく餅をつく、食つたら勢がつく、港々に船がつく、船にはろもつく、權

下率土の濱、何れ王地にあらざるや。青山四方を回り、大和の國を國の最中とみそなはし、畝傍の山の異なる、檜原に都せんとの詔り、さる程に地形をならし固めんと、來り集り諸々の、喜び歌の聲々は、高天が原へ打開こえ、下つ磐根に轟きて、是が地形の始めなり。國富み民は豊にて、天つ日嗣のさき榮え、天長く地久しく、世々に傳へてかぎりなし。扱て後の世に至りては、この古例を基として、七五三繩幣帛五尊の柱、或は四天の柱、さて又乾坤きのーみよなんと様々儀式具りて、鎮護國家神社佛閣おん司と云ふも更なり、士農工商その品々の屋作りは、棟木を上を檐を下、ごよせき迄も立て并べ、穴に住居の習はせも、何時しか終に改まり、上下萬民恙なく、五雨十風遠はぬときは、逢阪の關の鎖さぬ千里まで、賑ふ御世こそ樂しけれ。(安濃郡)

羅將門 (桑名節)

○都源頼光御内、綱や保昌貞光などが、右は季武金時どもが、君の御側に寄り集りて、春の雨夜やものさびしさに、

四方の話が山々いで、楮は保昌申されけるが、九條通りの御門に於て、よるの夜中に鬼神が出て、人の通りもこれ無きやうに、鬼神變化の恐る、札を、公の御手より金札じるし、これを立てよと給はりければ、すぐに頂き屋敷へさがり、鎧兜を猪首に着なし、黒き名馬に打ちまたがりて、札を片手に大宮通り、馬に鞭打ちいそがれけるや。

はしらだて

○たてそめの柱、綾を錦でつ、ませて、二本のはしらに前栽を祭りこめ、三本の柱、さかきの明神を祭りこめ、四本の柱しろくや天王を祭りこめ、五本の柱午頭天王を祭りこめ、六本の柱六八幡を祭りこめ、七本の柱七尾の天王を祭りこめ、八本の柱八柱神社を祭りこめ、九本の柱熊野三社を祭りこめ、十本の柱ところの産土神を祭りこめ、十一本の柱觀世音を祭りこめ、十二本の柱藥師如來を祭りこめ、凡そ千本あまりの柱をば、美事にたて候ひける。徳若に御萬歳。

○當家の裏の壺の内を眺むれば、五葉の松がせいくと、一の枝には錢がなり、二の枝には金がなり、三の小枝の其本へ、しばかきよせて巢をくんで、下には龜よ、上から鶴が舞ひ下り、そこで龜と鶴とがあひさほで、鶴こしか龜こしか。

○婚禮の場所どうづきの場所で、ふいちやうにあふが、何をかすとりすると鶴公に聞けば、鶴公が云ふには、松の縁を一年ぶりとす、龜公に聞けば、千年も生きるのに、うちの子供が學校戻りに、亂杭渡り甲ほしに出た其時に、一つ二つほつた其時、たまさかあたつたのを一年ぶりとす。

○鶴の巢籠り十二の卵をうみそろへ、十二を一度に目をあかし、親もろともに、立つときは、黄金の銚子を子にもたせ、飲めよ大黒唄へよ惠比壽、中で酌する布袋毘沙門天、壽老人辨財天福祿人がらく遊び、七福神がまひをどり。
(度會郡)

石搗歌

サノエンノ、エン、さりとはそろた。さらば、そのつなひーぎやけよー。ソーリヤエンヤ、エーンヤ、エーンヤ、トセー。
(河藝郡)

○アーエー、綱のまくはり出来たならー、アーヨイノ、三つ搗いたる其後で、アーエンヤ、エンヤ、エンヤトセー。
○昔西行のほんさんが、ヨイノ、初めて都へのほるとき、ヨイノ、水なし川を渡るとて、ヨイノ、菟蓐脊骨で足ついて、ヨイノ、これノ申し、これになほる藥はないかいな。ア、ヨイノ、それも、めせくございます。ヨイノ、海にある松茸と山にはうとる蛤と、油でやいて火でねつて、それをつけたらなほります。ヨイノ、ヨイヤナノ、ヤノエンヤラエン、サリトハソーヂヤ、サラバ、コノツナ、ヒーキヤゲヨ、エンヤ、エンヤ、エンヤトセー。
(津市)

○エーヤハエー、さて今日は皆さんえ、ヨイノ、幸天氣も宜しくて、ヨイノ、おん手傳ひとは、いかい御苦勞でござります。ヨイノ、どなたの御顔拜すれど、ヨイノ、ごきけん様でおめでたや。ヨイノ、今から晩までは皆さんえ、ヨイノ、魚と水とお頼みぢや。ヨイノ、てうしがそろたら三つにしよ。ヨイノ、ヨイヤナノ、ヤツ

○こちのざしきは、めでたい座敷、白い鼠が三つつれて、またみつつれて六つつれて、小判くはへてまひをする、イヨノガヘウタンヤ、ヤツサモツサ。
○ねこがよめりする、いたちがなごど、はつかねずみが三升だるさけて、よめのざいしよへまごだきに、おもしろや。イヨノガ、ヘウタンヤ、ヤツサイノ。
○西行法師のほんさんが、初めて諸國を巡るとき、勢田の宮へ息まれて、水なし川を渡るとき、こんにやく脊骨で足ついて、豆腐のやつこで喉やいて、是をなほす藥はないかと尋ねたら、山にはえたる蛤と、海にわいたる松茸を、火でねつて水でやいて、それつけてなほらな、こちや知らん。ヨノヨノヤナノヤツサノエンノ、エーさりとはそろたら、さらば此の綱引上げよー。ヤツサイ、ヤツサイノ。

○さがるもので申そなら、ぶだう、へうたん藤の花、見事なのは十八さ、け、娘の結んだうしろ帯。ヨソヨイノヨシヤナー。
(一志郡)

土掘、石運歌

○こんど名古屋で、馬めと犬めがけんかして、そこへちんめがとんできて、馬のまぢんが毒ぢやけな。
○鶴と龜との夫婦の話、私は鶴とはそふはいや。首が長いのできらふのか、足が長いのできらふのか。首が長くてもきらはせん、足が長くてもきらはせぬ。鶴は千年龜は萬年あとの九千年はどーくらす。
(志摩郡)

木遣歌

○ア、ヨイヨイヤナ、コーノヤツサーノ、エンヤイヤ、エンヤラヨイヤ、エーノエーノエーノ。さて西行のほんざーんが、始めて東へ下るとき、ヨイ熱田の宮にて腰をかけ、かほどすしーき此宮を熱田の宮と誰がゆいた。そこでかんぬしーの言ふことしにや、西

端挺へかいこめ、ヨイヤサ、それやあん中あぶない。挺方廻つて、ヨイヤサ、調子が揃たら、ヨイヤサ。
○西行法師と云ふ人は、東へ下る其道で、檜の笠で頭を焼いたとさ。ヨイオンセイ。
(阿山郡)

左の木遣歌は兩宮式年の御遷宮の前に際し、各大字町の人民、特志を以て御神木を奉曳する時、歌ふものなり。但内宮の御木は五十鈴川に廻りて曳き揚げ、外宮のは宮川の木場より曳き揚げ、地車によりて宮中に運び入る、なり。歌の節拍子等は奉曳の場所時宜等によりて同じからず。今は只其大要を擧ぐるのみ。
○ホンエー、三吉乗つたか、ヨイヤヨ。 (曳子受、ヤツトコセー、ヨイヤナ) さりとては乗つたらおりのな。ヨイトセー。(受、ハレハ、ハリヤリヤリヤリヤ、ヨイソコ、ヨイソコセー)。

○ホンエー、三吉乗つたか、ヨイヤヨ。 (受同) さりとては乗つたら下りるな。ヨイトセー。(受同)。

行ーとは、西へ行くと書くのーに、東下りとはこれ如何に。ア、エーノエーノエーノ。

○エーノエーノ西行法師は始めて關東へ下るとき、水なし小川でうなぎの小骨で足ついて、向の茶屋へとかけついて、これにつける薬はないかと聞いたれば、夫に付ける薬も色々品々あります。牛の上齒に駒の角、師走筍、寒茄子、山の上なる蛤や、此薬を夏降る雪を手にとりて、水でゆるめて火でねりて、其薬をつけたなら、さつぱり一度になほるぞよ。ヨイヤイヤ、ヨイヤイヤ、エーノエーノ。

○西行法師が廻國するとき、細谷川を渡りたら、鰻の脊骨で足ついた。それに薬はあるまいか。それに薬は数ござる。しはす筍、寒茄子、海の底なる松茸と、山の峯なる蛤を、夏なる雪を手にとりて、水で温め火でひやし、蟻の涙でねつてつけたら、早速本服する。

○はつうま寺の坊さんは、今日の寺役のこしらへは、けさと湯巻ととりちがへ、湯巻で寺役はなるものか。
(難)ア、リヤヨイヤサ、綱方カマヘテヨイヤイヤヤサ、

○ホンエー、日本軍隊、ヨイヤヨ。 (受同) さりとてはあとはひかぬぞ。ヨイトセー。(受同)

○ホンエー、神の恵で、ヨイヤヨ。 (受同) さりとては人氣がそろつて一時に木がうく。ヨイトセー。(受同) 以上は宮川の木場より曳き揚ぐるとき、又は五十鈴川を曳き上ほすときに歌ふ。

○サーミーブーはー、みやーがーはー、みーなーみーをーきよーめー。(受、エーサー) そーのーのーそーのーでー、きよらーかーにー。サンヨイヤ。 (受、エンヤイヤ、ンヨイヤイヤイヤイヤイヤ)。

○水は宮川皆身を清め、底の底まで清らかに。
○いはひめでたの若松さまは、枝もさかゆる葉も茂る。以上大字數箇町の例。

○ヨイツるのおとにー、かめいーさーむ。エーノエーノ。(受、ソリヤ、エンヤラ、ヤ、エンヤラヤ、ハイソレ、サツサドツコイドツコイ)。

○鶴の羽音に龜勇む。
○清き流の宮川より。

○御木は木會より流れ来る。
○車の縁起に恐あり。
○綱は神代の御注連繩。

以上大字一之町の例。

○ホンエー、東京で兩國日本橋。(受、ホンエーホンヤラナ) 西京で三條五條の橋。大阪で、(受、イヤ橋々數知れず)伊勢で宇治橋ナ川崎三橋。(受、ヨイヨイノ、ヨイイヤナ)曳けー綱の衆。(受、エンヤ)エーンヤハレハサーノエーンヤヨ。(受、ヤレナノ、コレハノサ、ソートモソートモ曳いてくれ)。

○ホンエー、こも名高き二見浦、(受同)打波かけて二つ岩清き(受、イヤ渚に藻汐草)通ふ千鳥のナ友呼ぶ聲よ。

(受同)

以上大字川崎町の例。

○エ、エンヤヨ、いつなえ。(受、エンヨヤーレナ)一、二見立石とかけたらヨイヤサ、エ、立石エーそれは樋口次郎兼光ちやエンエ。(受、心は)それな一肩に朝日ぢやないーかいな。エンヤラーナ。

○御木は東西みなみ車に、載せて曳き込む北御門。

道歌

○木會のそまがた生立つみ木も、豊の流で身を清め、神の都の民草と、共に目出度く御宮いり。
○御木をかしづき車に載せて、よごとほぎごと木遣歌、豊の御宮のみぎりまで、老いも若いも勇み曳く。
○伊勢の宮川御裳裾川へ、御木はつ、みなくのほりつめ、常世のなみで身を清め、今は御宮のみぎりまで。

上せ車手踊歌

○伊勢のみとしろ宮川鮎を、豊の御宮へまたすそへ。あみをわりもち、かごをつけ、さら／＼あみうつ、いしうつ。ドンブリ、コンブリ、ザンブリ、ズンブリ、いさりつ、せせの、せの／＼、せせのせの／＼つきるまで。
○あまのむら君皆うちすがひ、豊の流のつりどのへ。
○豊の御宮へ捧ぐるみさい、漁る様はけに可笑し。(度會郡)

○木曳若衆とかけたらヨイヤサ、それは羅生門の鬼ぢや。エンエ心は綱をつかんで曳くぢやないかいな。エンヤラナ。

○(問)谷の櫻(解)お福の面(心)はながひくい。

以上大字岡本町謎木遣の例。

◎豊受大神宮御造營御用材奉曳の歌

○サー、御木をかしづき、(囃、ハードッコイドッコイ)さかきでまいて、ヨイヤ、(囃、エーコノセ)はえて御宮のみぎりまで、エーヤーエー。(囃、ソーリヤ、エーンヤヨイ、コレハノサー、サ、ノエーコノセ、ヨイヨ一、エーヤ、アノヤ)。

○天の漁人が皆わきつどひ、御木をいたづきひきをさむ。

○御木と車は道もせなべて、よごとほぎごとゆきすがら。

○御木はくる／＼榊でまいて、あまのみさいは綱でまく。

○八千代變らぬ御木曳く民は、たぶかとひろきためしなり。

○内外の宮の御木曳く音は、八島國內に轟けり。

○御木は木會山千代うちこして、清き流れの宮川へ。

木挽歌

○こびきや山中の山小屋に住めど、ソートモ、芋やもくのま、たべん。ドシコメ、アードシコメ、命と細びき長いがよござる。ソートモ、曳けどしやくれどこの木は挽けぬ、ソートモ、どこの野中の松ぢややら。ドシコメ、アードシコメ、木挽と鼠は挽かねば喰はれぬ。ソートモ。(三重郡)

○桑名の殿さん時雨でお茶漬、こいつは又うまから。ヤツトコセー、ヨイヤナ。(安濃郡)

鱧漕節

○しやうじあければみしまがみへる、さくやひまかや、しのしまや、三十五反の帆まき上げて、あれも名古屋の大玉丸。いとまごひしてけさでた舟の、もどりくるときはきのまよひ。
○舟は新造でのりよいけれど、しろと大工であかがさす。
○みやの北ぶき吉田でならい、伊勢の小山はいつもぶく。

- 舟にのるともたかほもつな。風になさけはありはせぬ。
- おいせ下るはきたのよの西よ。こちやいなさはもどり風。
- 鳥羽へ鳥羽へと梶を取るけれど、潮はさけしほサ、コリヤ北のーかーせー、川崎や安いに、津い漕け津いこけ。
- あのみ大王の、あのいやーがー鳥、根からはえたいかーナ、コリヤ浮島ーかー。こんな事がこはくて船乗が出来よか。

志州大王崎の嶮を云ひしもの。(三重縣)

船歌

- 伊豆のー下田を朝山ー、エー、サツサヨイセ、巻けばー、晩にや志州領の鳥羽うらへー。ソーラふだらくや岸打つ波は深熊野の那智山へ雲かけて。
- 船はー帆まかせー、帆は舵ー、エー、サツサヨイー、まかせー、内のしんしよはか、まかせー。
- ソーラ山中通れば鶯が、梅の木小枝に晝ねして、花のちる様な夢をみて、花咲け咲けと鳴くわいなーエ。

(以上下田節) (三重縣)

もかいたりよ。今年のあらみ(魚見番)はのせのせのせよ。何をのそやらあらみぢつさのしわをのせ。(志摩郡)

以下四章大漁祝の席上にてうたはる。

- 一にしゆつせの、ほらの魚、二につこりひめこ鯛、三秋刀魚にさいらや、よせくる鯛、五ついなだや鱈の魚、七つないらぎやよがます、九つこのしろとびの魚。これを肴に御酒あがれ。
- さかなーと好まれて、はさむ肴のおめでたや。ますーかれこち、つえはんじよ、すきなすきやほらの魚、なによりさしみは、かつをぶし。
- 一にとびこむ鯛の魚、二でにつこりゑびす鯛、三でさいらやしま鱈や、五つ鯛や鮭の魚、七つないらぎ、やよがます、九つこなたのお座敷へ、とんと鯨を引きあけて、これを肴に御酒あがれ。めーれたのー。ヨイサー。
- 一に鯛すし、二に煮込すし、三にさいらすし、四にしま鱈のすし、五ついなすし、六つ鯛すし、七つなにかを取り寄せて、八つ山川香魚のすし、九つこーやすし、十で

三重縣 蟹女歌 酒造歌

- ヨイサーほめかへされた。一に出世のかつをのい魚、二にはにつこりゑびす鯛、三にさいらや、しまあぢや、五ついさぎや六つのを、七つないらぎやよーかます、九つこのしろ、十でとびいを。これを肴で御酒あがれ。
- 住吉やー、神社の前なるそれ橋を、登つて向うをながむれば、七福神の舟遊、中にもゑべすといふ人は、金と銀との羽根を出し、黄金の鯛をつり上げる。これを肴にご酒あがれ。

(南牟婁郡)

室子神社船出歌

- (音頭取)ヤーいはひ目出たの若松様よ。(カコ)サー枝もさかえる。(音頭取)葉もしける。ヤンダ目出度の、ヤンレーごよはめれたの、ヤンレーわか枝ーも、エーーしける。

(南牟婁郡)

大漁歌

- ヒンヨンヨイ、小濱の浦へほーらがついて、千度も萬度

豆腐屋のおから餅。

(志摩郡)

蟹女歌

- 潮はさけしほで、手足がやめる。ノンコリヤ、潮はさけしほでだしの風。
- 以下二章は鮑を探らんとする時、磯桶と稱する桶を拉し、泳ぎながら蟹女の歌ふもの。
- せぐる、(一種)めたか(上)へ縄立て置いて、おこす心のうれしさや。
- いくぢや、いくぢやよ、飛鳥越えてどんとついたら二軒茶屋。

(志摩郡)

酒造歌

- どなた様にもよー、チョツコラ、シヨチヤナイイカ、うまのまねしてかねかませうー。
- よろこべ。あけての春は、お手をひきよて伊勢まのり。
- 参れば、外宮さま内宮さま、どちら本社とをがむやらー。
- をがんだら、下向せうとおます、おすぎおたまを見よーとて。

二二三

○こじきでも、くだしやるならば、かねのはしかけう、みやがはへ。

○とよくの錢掛松は、今はかれきでくつかけるー。

○津のつものわかとの、おたちぢやといふや、雨がふるー。

○津のつものなかほどで、咲いた椿のいろのよさー。

○津のつもの町長い。さまと通れば、なごはないー。

○坂は照るく、鈴鹿は曇る、あひの土山雨がふるー。

○ふれやまた龜山どまり、いごぞや坂の下。

○坂の下では大竹やに小竹、とまりたや、大竹やに。

○大竹やでとまりかと思や、とまりどころかひるべんと。

○關のこまんが龜山がよひ、月にせきだが二十五そくー。

○せきだの二十五足なら、買ってやらしやれ、妻ぢやもの。

○奈良の大佛よこにだいて、乳をのました親みたい。

○奈良で名所は猿澤の池、水にかけさす三笠山。

○かけさす三笠の山も、雲がか、ればかけさ、ぬー。

○春日は三社か四社か、うらへまはれば四社ござる。

○春日のおしか、しかのしかのしろい毛はなにとなるー。

すりーだー。

(三重郡)

米漸歌

○くらやいくらやい、何倉や。しもて倉か、かみ倉か。はいはいわたしも倉でございます。ヨイナ。

○せはしい中にも、しししたい、ししやしし。(津市)

○(もと)サーエー、ハツドッコイナ。(中)ハくるわいな。

○(けつ)エサくるわいくーな。 (三人)サイくーくーサー。

元がし、中がし、けつおし三人交互に唄ふ。(三重郡)

元ずり歌

○大和山城エー、ハリハ、ヨイハヨイくーくー、伊賀伊勢

ーかけてー、さーんじふ五萬石はエー、ハリハ、ヨイハ、

一寸和泉様。

(三重縣)

製紙歌

○嫁入するなら、深野へするな。晝は紙漉き、朝紙たたき、

三重縣

米漸歌

元ずり歌

製紙歌

茶摘歌

茶もみ歌

長持歌

初瀬街道筋歌

○まはればはや、大阪の城がみえます、ほのほのとー。

○見えます太閤さんの城よ。まへは淀川舟がつくー。

○淀川舟がつけやござれ。ひろい大坂がはんじよするー。

○大坂の三井のたなに、買ってさすよな、帯はないー。

○さすよな帯はあるけれど、やるよな妻がないー。

○うれしや、よどとるとのさま、やはた八幡あとに見てー。

○八幡さんはなせ川下に、ながれれやせびがないー。

○ついたら住吉浦よ。まき江のほがみえるー。

○まき江はむかしのことよ。今はむかしのほがみえるー。

○くらしいのに白帆がみえる。あれは紀の國みかんぶねー。

○まねけど磯へはよらず、波をへだて、沖へゆくー。

○ながいこと、いつかすにおもた、これでおしあけかおめでたやー。

○すんだらそのばにしもて、しもて飲ますぞなまきけをー。

○お釋迦さんと、阿彌陀さんとかたみすりしなざる。お釋

迦さんのあたまを阿彌陀さんがすりなざる。阿彌陀さん

のあたまを、お釋迦さんがすりなざる。

○いたいくと涙をこほしやる。痛いはずだよ、しやか

夜はくろ木の皮たぐり。

(飯南郡)

茶摘歌

○摘みやれおつみやれ、宇治の里の茶つみ。甘あまりは蕾の花よ、甘の人にホと書いて、茶といふ文字によむわいな。いよすおろして茶をつみやれ。(鈴鹿郡)

茶もみ歌

○志摩のあねらは、何くて肥える、蕎麥のねりけに鹽辛を添ひて、んまいくと、ゆて肥える。コラコイ。(志摩郡)

長持歌

○元日に鶴の鳴きごえ、あれやくるまると、かめいくみこむ、若水を。おまへつりぎを、わしや池のふな、つられながらもおもしろい。(津市)

○年は十七おしやくに出たら、一つ肴を好まれて、歌をうたはうに種がなし。一の谷こえて、二の谷こえて、三谷目のその奥へ、千なり茄子をうゑおいて、空飛ぶ鳥の雁やつる、いそべを傳ふ鯉や鮒、それを肴にあがれ客。

○たねし川べや泥田にすまひ、かんがりなんぞへ拾はれて、ぬかれてたかれて、あいられて舌の車へ乗せられて、甘い味ないあぢ見られ、はらで一夜の宿をかり、あすは高野へぬけ参り。

○たつ／＼盡して申すなら、正月門には松が立つ。二月きたなら釋迦が立つ。三月節句で雛が立つ。四月八日にや花が立つ。五月節句で鯉が立つ。六月祇園でうちは立つ。七月七夕笹が立つ。八月東京大相撲のほり立つ。九月がきたなら菊が立つ。十月十一月秋風ほこり立つ。十二月がきたなら節季来る。節季が来たならかけとりや、門に立つわいな。かけとりや来たなら腹が立つエー。

○西行法師といふ人は、始めて關東へ上るとき、のほるがうそぢや下る時、水なし川を渡るとき、こんにやくせ骨であしついで、豆腐の奴でのどやいて、どこぞこゝらに

○アヨーイサ今のかの人は、松の木こ枝に巢をかけて、十二ん卵をうみ揃へ、十二日に目をあいて、十二ん揃ひてたつ時にや、金銀こぼんのさかづきで、惠比須大黒酌にでる。七福神が舞を舞ふ。そこで、ナ、皆々、ヨ、イソーリヤ、はんじやうする。アソーリヤ、ヤートこそ、ヨ、イヤナ、アンリヤリヤ、コレワイセー、サヨーイヤナ。

○アヨーイサ、朝熊山から中はらではるか南を眺むれば、紀州や熊野や鳥羽浦や、遠江灘を眺むれば、七福神の船遊び。一につこり寶船、二に惠比須大黒のりこんで、べざいてんの帆をあけ、びしやもんでんのかぢをいれ、じゆらうじんも乗りこんで大波小波をうちわけて、ゑびすが濱へとのりこんで、ほていがはらへと船をつけ、命長くのつり竿で、あややしきのつり糸で、金と銀とのつりばりで、大きなくおんめでたひをつりあける。アソーリヤヤートこそ、ヨ、イヤナ、アンリヤリヤコレワイセー、サヨーイヤナ。

(桑名郡)

藥がないかと尋ねたら、尋ねれやない事はござんせん。山口はいたるなまわかめ、畑ですまひする蛤が、海にあらりし松茸と、夏ふる雪を手にとりて、水であぶりて火でねりて、あしたつけたら今日なほる。

○こよひ今晚お酌に出たら、酒の肴に好まれて、うたをうたおに聲たらず。お肴とろにもわけしらす。お銚子の口へと、きくをなし、根もきく、葉もきく、枝もきく、今宵はお客さんのむりも聞く。

○むこへ見えるは攝州のお方、つまをり笠のお揃ひで、つうかけなんぞにおみのせて、お泊りなれば泊らんせ。お休みなれば休まんせ。お茶もちん／＼わいてます。お風呂もどん／＼わいてます。

○鶯を鳥と言つたのは無理か。葵の花も赤くさし、一はの鳥でも二羽とりと、雪といふ字も墨でかく。右は大和道者を慰めん爲に、旅店の下婢の唄ふ歌なり。

(名賀郡)

伊勢音頭

○アヨーイナ、こ、は、だ、い、も、ん、ま、へ、向、う、は、岩、田、橋、三、橋、のはしとはこれかいな。西へ見えるは藤堂様のおやしきか。東にみえるは常燈贊崎か。そのまたわかうにをる舟は、千石舟かよ、れふし舟かよ。おいせまるりの舟かいな。ヤートこそ、ヨ、イヤナ、アラリヤ、コレワイセー、ソリヤ、ヨ、イトセー。(以下準之)

○アヨーイナ、こ、は、月、本、む、か、り、雲、出、ア、ラ、六、軒、茶、屋、の、ぢ、よ、ち、ゆ、う、た、ち、が、こ、ん、に、ち、や、け、つ、こ、な、お、て、ん、き、さん。ごきけんよろしく、おしづかに、いちにち、ふつかとひをくつて、あなたのおいでを、ソーリヤまぢかねる。

○アヨーイナ、こ、は、松、阪、む、か、り、お、ふ、て、さん、け、う、の、は、し、と、は、こ、れ、か、い、な。こ、れ、は、さ、ん、け、う、の、は、し、と、あるわいな。そのまた、橋本私、わたしのてまへでござんする。奥から口まで聲や、障子もはりかへて、あなたのおいでをまぢかねた。

○アヨーイナ、こ、は、始、は、じ、め、て、十、人、ば、か、り、ぬ、け、ま、り、こ、し、も、か、る、く、に、あ、ひ、の、し、ゆ、く、で、と、ま、ろ、か、や。

今宵^{今宵}こよひとまりた、やどやには、のみがくふのかしらみがくふのか、かいばな(土地の名)のしゆくで、あるわいな。つきでたとへば十五夜ぢや。やすむひまはないわいな。よはほのふくとあけの、まちぢや。

○ア、ヨーイナ、こーこはをーばた、むかー宮川ぢや。おとまりなれば、とまらんせ。おやすみなれば、やすまらんせ。おちやもチン／＼わいてゐる、ふるもドン／＼わいてゐる。

○ア、ヨーイナ、おいせさまほど、ごたいしやはないが。何故^{御伊勢様程 御大社}宮川

○ア、ヨーイナ、こーこはやまだぢや、ひろ^{廣小路}こぢでござる。向うへ見えるはほんしやかな。あれは、けつく様の、ごほんしやぢや。けつくさまとは、とよけさまとかくわいな。とよといふ字はほうねんの、ほのじとよむわいな。ことしもほうねん、またらいねんも、ほうねんぢや。これもとよけさまのおんかけぢや。おれいしなされ、さんばいせ。

○ア、ヨーイナ、こーこは、あひのやま、おすぎやおたまんけかよ。くにへもどりの、みやけにせう。(一志郡)

祝歌

酒宴稍閑になりたる頃、左の祝の囃子を合はす。

○ア、シャーンシャン、ア、も一つせ、ア、シャーンシャン、祝うて三度オーシャーンシャンノーシャン。

夫より酒興に入る。中頃姿勢を正して主人に大杯を提ぐ。此時古來の謠曲を謠ふ。若し謠ふ人なき時は、左の略謠を合唱す。

○ざざんざー、濱松の音はざざんざー。

酒宴の最早終らんとするときには石搦歌等を唄ふ。

(阿山郡)

なんやれ節

○御用は調ふた、ナンヤレ、思ふ事かくなうた。すゑーは鶴龜五葉の松。カヘシテ、カヘシテ、ハヤシテ、ここの座敷に、ナンヤレ、めうがとふーきーと、めうが目出度いふき繁昌。三幅一對又かへせ。御臺所と、ナンヤレ、からうすびーやーは、いつもどんどと、なーるーがよー

三重縣 祝歌 なんやれ節 よさ節 よいこの節

のひくしやみは、あちらなさんよ、こちらなさんよ、一文もんやらんせ、なけなんせ。あちらなちよるさん、こちらなちよるさん。一文やらんせ。やてかんせ。あひのやまでは、ソーリヤ、こーこばぢや。

○ア、ヨーイナ、こ、は、うへのまち、ふるいちでござる。なにやのなにへの、てまへでござんする。おくからくちまで、疊や障子もはりかへて、あなたのおいでをまぢかねた。奥には、鶴の間もあるわいな。龜のまもあるわいな。うへから鶴が舞ひさがる。したから龜がまひあがる。つると、ナーアーかめとが、ソーリヤ、まひをする。

○ア、ヨーイナ、こ、は、うぢばし、さんけうの橋とはこれかいな。むかうへ見えるは、ごほんしやか。天にも地にもかかりもない。おほみかみさまと、こんなよいところでおーれすーる。

○ア、ヨーイナ、こ、は、うぢばし、これよりみぎりへさして、一里のほれば、たけ(朝熊山)のこくぞの、ごほんしやぢや。そのまた、はたの萬金丹。これがあさまのほ

右は祝の席に歌ふもの。(志摩郡)

よさ節

○イ、ヨーサー、さまよあれ見よ、朝熊の山を。ヨーふくいちまんの虚空蔵あり。菩薩のまします山なれど、たからは山にみち／＼て、三國一の靈地とや。谷の嵐を心よせて、はなれがたなき此山の、ぢんの煙りか、ヨーコノ三すぢたつ。

多く宴席等にて歌はる。(志摩郡)

よいこの節

○ヨイヤコノイカニ、(囉、アラソラ)このおうちはめでたいおうち、父はれんけの花とさく。母は芍薬、姉つ、じ、妹八重菊兄さんは、五月野にさく百名の花。(シヨンガレ)。○ヨイヤコノイカニ、(アラソラ)遙に沖をながむれば、白きかごめが三つつれて、三つに三つ増しや六つになる。沖のかごめに鯛はと問へばのー(ハザンザンザンザン)

鯛やくるく、あとへくる。(イヨサノスイシヨデキハザンザー、ヨイイアキヂヤニエー)とんと其身を舟として、足を櫓に羽を網淺瀬の名のやうつきで鯛シヨンガレとる。(シヨンガレ)

○時かたね生えるも時節、運くればせつさへまてば、また花がさく。こがねがちるではないかいな。

○おたふくやく、親にかくれて初がねつけて、笹にふる雪や葉をかくす。

○おたふくやく、顔にやにやはぬ男をえらぶ。わしのごは七福神よ。ふくとふくとでおたふくや。

○親に孝行の子を持てば、朝も早うから駒追うて(言葉三吉乗つたか。ハイシードー)。お馬が通るに、先きのけ先きのけ)坂は照るく、鈴鹿は曇る。間の土山雨がふる。佐渡の金山金が降る。其金集めて藏建て、且那百までか、九十九まで、共に白髪のはゆるまで、ヨイコチヤ、ヨイコリヤ。

○ヨイヤ、コノイカニ、アノエー、志州戀しや堅子浦、曉ごとに出る舟は、おくから嵐が吹き出す、岬崎

はあたり田で、たけは八尺穂は五尺、いかなる馬さへ二穂で一駄、八穂で八石有るならば、この家お裏へ藏建て、藏の番頭に誰よかる。一に大黒二にゑびす。

○伊勢は津で持つ、津は伊勢で持つ。尾張名古屋は城で持つ。そこでしやちほこ云ふ事にや、わしほどいんがなものは無い。金でからだはま、ならん。金で此世がま、なるならば、鱗の一つもはづそもの。今は尾張のとのさんは百萬石を棒にふり、もとのとのさん京都に居らば、かうも苦勞はしやすまい。

○いやと云ふのに、もう一番と、あきれ果てたるへほ將某、お前のお手には何と何。飛車、角、桂馬に歩三兵、金銀香車がたーんとたんと。(度會郡)

さんさ節 (一名ヨイコノ節)

○目でたきや、目でたきや、コラ目でたきものは芋のかぶ。ハヨイサヨイサコノサ、さて二月にうゑられて、五月ついに、やーらはれて、ハヨイサヨイサコノサ、子に子がさーいて孫だいて、ハヨイサヨイサ、から

まともにはやる時は、後へ心を引かすもまよ、舵をなほしてやらしやんせ。それから三つ島管のはな、相差の大島はせこえて、いくさはせねど錨崎、あつはなけれど大木崎、顔は見えねど石かみ、種はまかねどかぶらこの、つるは居らねどかめ島や、何とわかい衆うまい日和でないかいな。サレバイノ、千里の灘も一日和、鳥羽もよらずに小濱もすぐに、とんと名古屋の堀川に。シヨンガイ。(志摩郡)

○ヨイ、コノイカニ、アリヤエー、ヨイタマカセ、酒の肴に、ドツコイ、茄子千本植えて、茄子、ヤラソ植ゑ花盛り、アリヤエーヨイタマカセ、之を肴に御酒まるれ。

○十七八なる小娘が目出度い鯛を手にかけて、あの鯛ほしや。もらひたい。

○ひとつ吉野の下市しんいちにつるべすしやの彌左衛門、其家娘におさと云うて、おさとつけたるあのすし、あいはい持つあのすし。

○十七八なる小娘が今年としはじめて田を植ゑて、殊にこの田

たちのーびで、すゑひらく、ハヨイサヨイサコノサ、あーさはこがねのつゆがうーく。ヨイヤナー、おーきにござらう。

○まづ正月の初夢に、白き鼠が三つ通る。又三つつれて六つ通る。小判喰はへて金運ぶ。其金よせて、其木をよせて、藏を建て、藏の中には酒つくる。其藏ちやうさいする人は、孫子さかえて末繁昌。ヨイヤナー。(南牟婁郡)

靈汗地藏和讃

○かゝる僻地に生れ来て、漁り業の悲しさや。こゝにひとつの證印ありて、世にも稀なる地藏尊、折々汗を召し給ふ。善事悪事を告げ給ふ。善事の汗は白しと聞く。悪事の汗は黒しとかや。此持佛の有がたや。由来を茲に傳ふべき。偕其普壽永の頃、此浦里の東なる、沖の波間に光りありて、夜なく不思議の思をなす。ある夜計らず三度まで、濱口氏の石持の、網に乗らせて上り給ふ。最も尊き地藏尊。又其後天正の頃、初音の姫の身代りに、代り給うて恐ろしき、刃の難を救ひ給ふ。此姫君も歸依あ

りて、遂には定に入り給ふ。今に残りて其塚の、よき名こそ有がたき。又寛政の頃の時、左りの御目のまなじりに、涙の玉を垂れ給ふ。奇異の靈現示し給ふ。加之里人の、利益幾行數知れず。かゝる尊き御佛に、縁あることのうれしさよ。たとへ御釋迦の世に生れても、此御恩の有りがたき、萬の人に知らせたく、かくも由來の物語り、尙ほ諸人の信心を、おこす心の撓みなく、萬代かけて願ひける。
(志摩郡)

大師和讃

○四國八島の法の水、汲めども盡きぬ藥なり。空海の心の外に咲く花は、彌陀より外に知る人はなし。高野の山の岩かけに、大師は今におはします大師の御かけうつし來て、天の威光で輝りかやく。
(志摩郡)

地方特有歌

○サーヨーホイナ、伊勢の津のく、ヨー、津の部田の町、ヨ
ーホイセーソーラセ、つつつといけば鶴の宮、とつと

いけば塔世橋、一ばい酒は飲めども足はよろく、萬町、最早來たか北の町、道者を泊めるのは東町、金つく町は中の番、大きなものでは、ヨーホイ、御一統衆大門ぢや。アリヤ〜コリヤ〜。

○伊勢の津のく、岩田橋、橋の欄干にちよと腰をかけ、西をはるかにながむれば、藤堂出雲のかみやしろ、松に切石きりごまい、音にきこえし隅やぐら、北をはるかにながむれば、鈴鹿山やら鷄足山、東をはるかにながむれば、千石船や獵師船、南をはるかにながむれば、外宮さんやら内宮さん、あひの山ではお杉やお玉。お杉やお玉の引くしやみは、しまさんこんさんなかのりさん、一文やらんせ、やてかんせ、も〜こ、ばかりや、こ、ばかり。(河藝郡)

愛知縣

厄拂ひ

○ヤーラめでたやな。めでたき事で拂ふなら、飯つくしで拂ひませう。一で芋めし、二で握りめし、三でさ、けめし、四で汁かけめし、五でごもくめし、六つ麥めし、七つ菜めし、八つやきめし、九つ米のめし、十とろ、めし。どんと拂つてさらい。

○ヤーラめでたやな、たのしやな。めでたき事で拂ふなら、こなた、御庭を眺むれば、三階松が飾り立て、いちの枝には金かねがなり、二の枝には錢がなり、三の枝には盃がなり、上には鶴がまひ、下には龜があひをする。こなた且那、御吉慶と拂つてさらい。

○ヤーラめでたやな、樂しやな。さもめでたき事で拂ふなら、節分とは今宵の事よ。大和はうろく大和豆、ちんやからりといつたる豆を、鬼の眼へばつしとあたり、これやかなはんと、にけ行く所、今晚の厄拂ひがひつつかま

へて、東の海とおもへども、西の海へさらい。

○ヤーラめでたやな。さも目出たき事で拂ふなら、且那御庭を眺むれば、おーよし、こよし、世界よし。世界もよけれや、我等もよいと、打ち拂つてさらい。

○ヤーラめでたやな。さもめでたい事で拂ふなら、鳥は處で出世して、やまがら、こがら、四十雀、しじゆーとかいたる神さんが、あしだか、くま鷹、數多のたかを引きつれて、孔雀の戦争へのりこんで、つるつばくろと戦へば、どちらもしよーびんつかぬ故、これより東京ほーじろさんへと願ひ出し、がんよりかものしたなれば、一にはとりほと、ぎすと打拂つて、西の海へさらい。

○ヤーラめでたやな。さもめでたい事で拂ふなら、一にいわしや、二に鱈、三にさよりや、四つよろづ、五ついつもの細か物、六つ昔の大鯨、七つ鯨やかね叩き、八つやき物かばやきや、九つ小鯛や、しまだひや、十で、とんと、とび魚と打拂つて、西の海へさらい。

○ヤーラめでたやな、樂しやな。さもめでたい事で拂ふなら、いさばやの表い、盲がとほりか、り、亭主〜、うるめ

はくくと打拂つて、西の海へさらり。

○ヤラめでたやな、樂しやな。さも目出たい事で拂ふなら、豆腐屋の表へ、大層もない子供が来たよ。いーえ、からかひに來ましたと打拂つて、西の海へさらり。

○ヤラめでたやな、樂しやな。さもめでたい事で拂ふなら、且那茶碗や、おく皿や、夫婦の中は、豆ぢよくよ。うんでどつくり、みよーなら行燈、摺鉢と打拂つて、東の海とはおもへども、西の海へさらり。

○ヤラめでたや、たのしやの。なんほーや、めでたい事で拂ふなら、一に大根、二に人參、三にさ、けや十六や、四つよめなや白瓜や、五ついつもの芋もあり、六つむこんのはぢかきや、七つなづなや七草や、八つ柳や柳たけ、九つ胡椒やこしよの木や、十で、とんととんがらし。おーからや、びつくりとして、西の海へ打拂つて、たてながいにさらり。

○ヤラめでたや、たのしやの。なんほーや、めでたい事で拂ふなら、かんくづくしで拂ひませう。大寒、小寒、酒のかん、子供にらくがんやれや泣かん。橋の欄干に屋

根ふかん。みかんきいかん、すこやかん。青物市へ青物出せば、一や二や三やに賣り拂つて、西の海へさらり。

○ヤラめでたや、樂しやの。なんほーや、めでたい事で拂ふなら、この且那様の、壺の内に鶴が巢をかけたし、つるは千年かめは萬年、ほらがひは、山に千年、海に千年、里に千年合して三千年、ふーふくくとふき拂つて、西の海へさらり。

○ヤラめでたや、たのしやの。なんほーや、めでたい事で拂ふなら、この且那様の庭に、にはとりが二匹をつて、こけこーとないて、西の海へさらり。(西春日井郡)

田植歌

○清水でらの、ご門の松に、めれたい鶴が、巢をかける。

○この田を、うゑたら、吉野へおいで。吉野は名所花盛り。

(西春日井郡)

草取歌

○いやで浮いたか。ひよこたん流れてどこいつく。ヤラレノ。(碧海郡)

盆踊歌

○ほんよ、盆ならさんよ、今日は盆の御十六日よ、明日から御山のしをれ草く。しをれた草をきつさと刈れば、草かりがまの柄が折れたく。折れてもだちかんく、世間にかぢやはないものか。世間にかぢやは六軒御座る。六軒かぢやに皆うたせう。

○もー廻はらんせ。廻はつたかどに大須の塔よ。一段上り、二段上り、三段上りて東を見れば、よい子くが三人通る。一でよい子は絲屋の娘、二でよい子はにのやの娘、三でよい子は晒やの娘、晒屋の娘ははでしやぢやないか。大幅帯を腰打ちまいて、ちんちりめんの褌をかけて、海やとはば水くみにく、一杯くんでもまだかへらんよ、二杯くんでもまだかへらんよ、三杯くんでもまだかへらんよ。鹽にうたれてようこんものか。御伊勢參りの御供づれ、本町筋をちよろくゆけば、天のおしろが扇で招く、もどりによるが何下さるや。赤手拭にいろはとかいて、いろはをきやしてほたんとかいて、

牡丹芍薬ほけの花く。ほんよ、ほんよ、ほんならさんよ、今年の盆は盆らしなは、新きび取れず、新むぎとれず、はだか團子に粉をつけて。

○盆ならさんよ、盆ならさんよ、ほんが來たに帶買つておくれ。赤いがえーか、白いがえーか。赤いもいやよ、白いもいやよ。當世はやりの、ぬひのおびー、ぬひのおびー。縫ひの帯は、はつとござる。ちりめんよかる、ちりめんよかる。お腰のまはりがちりちりと。

○向うの山になにやら光る。つーきか、星か、ほたるの蟲か。月でもないが、星でもないが、だいなご様のお江戸へお立ち、その早お船のろがひかる、ろがひかる。○かひさまご門で、うづらがふける。なとゆてふける、なとゆてふける。あーすは、てんてん天氣がよかる。お江戸のほそみちなほよかる、なほよかる。

○わーしのか、さま、きつことおしやる。ほーんの三日にださぬとおしやる。ぢごくの蓋さへあくに、だーいとおくれよ、か、さまや、く。

○まーまがらんせう、まーまがらんせう。まがつたかどに、

大須が見へる。大須のはたが四五尺ほしや。きーつてそめて、ほたんをそめて、手習ひ子供のあせふきにー、あせふきに。手習ひ子供のあせふきやいらぬ。をーどりこどりのあせふきにー、あせふきに。

○ここの子供はおとなしい子供。朝はよおきて朝がみいつて、おしよくにもたれてお手習ひ、おてならひ。

○もーまがらんせう、もーまがらんせう。まがつたかどて、えー物拾つた。ぎーん烟管に銀たばこれよ。一つぶくあがり、二ーふくあがり、三ぶくめーには、柄がをれたー、柄がをれたー。をれたらだしか、まがつたらだしか。こころにかぢやはないものかー、ないものかー。こころにかぢやは六軒ござる。六軒かぢやに、みなうたせうー、みなうたせう。

○ここの子供はちやくい子供。石ぶつたり、砂ぶつたり、あひまにわらぢをぶつたり。

しよんがい踊歌

○ヒンヤーレ。盆が来たとして蓮の葉が賣れる。ヤーレ。私

の道楽いつ賣れる。シヨンガイ。ヨイソレ、鐘がなる、明けれやお寺さんの鐘がなる。シヨンガイ。

○ヒンヤーレ。一つときようだに買ひとけなされ。ヤーレ先のお客の前もある。ヨイソレ、鐘がなる、明けれやお寺さんの鐘がなる。シヨンガイ。(西春日井郡)

笹踊歌

○三河なる今子の橋をいさやと詠しとうちわたり、おもふ人わたられよ。

○衆生利益のためにとて、此處へ天くだらせ、君をまもり給ふよ、君を守り給ふよ。

○青玉と申するは、たふとい國の神に、さーけにもさーよ、太子文珠をおむとて、やーくとふりてんえあがまれよ。

○おの、御ふいを差上ら、のるくとかんのになるらん。やんよく神をやんよふよ。

○熊野なる入江の奥の柳の葉よ。参りの人のいはひなるらん。やんよう神をやんよふよ。

○天王の御ほぞんは。何ほとけにまします。さーにもさーよ。

○薬師のなに神あらはれ給ふ。神々さーけにもさーよ。

○天王に参りたれば、福の神をたーもつた。さーけにもさーよ。

○さるに此處に申するは、めでたからうならうよ。たのしからうすらうよ。

○青柳のよ、絲をくり、くりためて、はたをふるもよ、ふよもよをに。

○鶯が櫻の枝よりすをかけそ。ゆられて花のちるのとしさよ。やんよう神をやんよふよ。

○いざさらば、とんの原名所の花をなんがめる。さーけにもさーよ。

○奈良の都の八重櫻、やーく、たつたむし、此處は志賀の都名所よ、く。

○時鳥深山渡りをする時は、卯月さ渡し、郭公里へ下れば、さへづるなるらん。やんよう神をやんよふよ。

○秋の野の老よ鹿戀にこそやすれよ。秋こそ蟲がさらりくくと。やんよう神をやんよふよ。

○駿河なる富士の高ねは名所かな。富士の高ねはすなかれに、くながれもやらぬ浮崎が原。やんよう神をやんよふよ。

○橋本の千本松は西東の名所よ。おきが白浪、見おろせば鹽見坂名所よ、く。

○姫島を差出で見れば笠島よ。おきこぐ舟に袖ぬらす。ぬれてさらすらう、く。

○天王と申するは、日本一のあーら神だー。あらいはーしもとのしほみさかー。

○名所なり、かーらけだんごか、みーつあるー。さーえーもー、やーかがしやー、そーらはんかー、いんにやまんだーそーらはんー。となりのばーばー、しやーらくさい。ふふらふん。

○七草なづさ、唐土の鳥が、日本の土地へ、渡らぬ前に、ほとほとほと。(渥美郡)

笹踊は吉田神社の例祭に行はる。

(渥美郡)

米搗歌

○こんく米つけや、お米がくだける。だんな様ごきけん

わるいはよー。

○ほん／＼米つけや、お米がくだける。うちの旦那さまの、お顔のわるさはよ。

(西春日井郡)

白挽歌

○千りき、だいても、萬りきだいても、あなたに、かつやうな、りきないよー。

○ういたへうーたん、かるそでながれる。わたしもあのみになりたいたよー。

(西春日井郡)

粉引歌

○今夜の此粉は、お細い米の粉で、湯でかいてかためて、焼いて、ふいて、さまいて、おいとし、とこの夜食だよ。

(西加茂郡)

地搗歌

○(出)エーコーノサンサー。(請)

(出)サンサさ、ふねーにおかめ女郎をのせてー。(請)エー

ヨイ／＼、(出)又とーござらぬひきぶりだ。(請)ヨイヨイ。(出)そのいきさまさすひいてくれ。(請)ヨイ／＼。

(出)ヨイヨイヨイヨイヤネー(請同上)。(出)ヤーツサノエン／＼。(請同上)。(出)エン／＼こゑがよくそろたにヨー。(請)エーンヤ、エーンヤ、エーンヤトナ。

○堪忍の袋を常にくびにかけ、破れたら縫へ／＼。

○こゝろこゝろ心の駒に、たづなゆるすな。

○人多き人の中にも人はなし。信の人に人となれ／＼。

○さつても、さつても、さても西行のほんさんが、はじめ

て、あづまへくだられて、あつたの宮へとたちよられ、これほど涼しき御宮を、なぜにあつたと、つけられた。そこでかんぬし走りて、これこれまうしほんさんへ、さいと云ふ字は、西とよむ。ぎやうと云ふ字は、ゆくとよむ。そこで西行も困られて網代の笠をば、ちよとかぶり、

ひちく杖を手にとつて、遙に沖を眺むれば、出船入り船ほかけ船、かけてはしるは、桑名船、よいや、ねがよいやね。エンヤラヤノヤ、ハリハノセ、エンヤラヤハ

リハサノ、ハリハサノエー。

コーノサンサー。

(出)むらのわかいしゆにかーちよとーらせう。シヨングイナ。

(請)エーン、エーン、エーコーノサンサー。

○(出)ヤレカーがのかがのちやうーの、笠やーがなうてー、かーさにことかくこーのー夏は。

(請)ヤレカーさがーない、ズントかさがない、かーさにことかくこのなつは。

(出)ヤレふーたつふかくさ少將さまはー、をーのの小町へかーよーひがさ。

(請)ヤレカーよーひがさ、ズント、かよひがさ、をーのの小町へかーよーひがさ。

○(出)京の加茂川の小鳥のこかすをござんじか。(請)なんぢやいなー。(出)かーもーが三三が九つ。白さぎ三羽に、をしどり五つに、サうがーなーな一つ。(請同上)。

○(出)ひいたりよー／＼。(請)ヨイ／＼。(出)ひいたりよ、わかいしゆよ。(請)ヨイ／＼。(出)わかいしゆ方のひきぶりは、(請)ヨイ／＼。(出)から天竺にも我朝にも、(請)

○ゆんべゆめよ見た、不思議な夢を。ヤレ何よえ、斯波の女蕃の火見櫓の中のまんなかから、すつてんこりりん、ちやんこりんとおちたやうなる夢を、ヤレ何よえ、斯波の女蕃の火見の櫓の中の真中から、すつてんこりりん、ちやんこりんと落ちたやうなるゆめを。エーンヤ／＼エーンヤトナ。

○おらが前の細道をおほさが三人通らんす。なんぢやいな。何の事ぢやとおもたら、ほーそもかるいが、はしかもかるいが、たんだいなりのほーいんさまちやとサ。ナーニーゴート。

(碧海郡)

○あのエ京都を花の都とよう云うたの。四方の高根に、サイ／＼花咲く時は、ノーホンインデゴザンス、九万九千の家々に花が、ちりかゝるわいの十。ソラハ、トコセーノー、イヤナ。高い愛宕を花の山とは、よう云うたの。さよぢや／＼、峯も麓も、サイノー、谷底までも、ノーホンインデゴザンス、緋櫻小櫻八重櫻いろに交へるわいの。

○花の都ぢやにしきに、いろとようゆたの。さよぢや

く。外は青葉に、サイく、くらま、ヤサー川の、ノ
ーホンインデゴザンス、おそ咲く花の名所とて、殊に、
にぎはふわいの。さすが都の藤の森とはよう言うたの
。さよぢやく、花がひらけば、サイノー、紫色で、
ノーホンインデゴザンス、赤いと白いと咲きわけて、そ
れはみごとぢや、ノー。さんさ櫻が咲き亂れて、姉さん
心がうきうき。さんさ、ささ舟で、ヨイイヤナ。(額田郡)

木遣歌

○エー、つなはーなんぶの、オーヨ、せんすぢーうちかな。
ヨエー。まけばーほどなく、ヨエー、たいほくちー
てんじやうする。ヨエー、ごしうぎーめでたくー。
ヨー。
○エー三河の名山、ヨイヤヨイ、ヤサーヤレコリヤ
エー、猿投は三社だ。ヨイヤヨイ、ヤサーヤレコ
リヤエー。
○ソーローターリ、ヨイヨイ、野に住む駒のみだれが
み、だれとりあけてゆひてはなーいかと、朝ひきつな。

ヤー、エーンヤラソーレハ、ハリーハサーノーエー、ハ
ーリハサーノーエー。
○(出シ)一には天照皇、ヤハレ、(請)ヤツトコセーヨイ
ヤナー。

(出シ)一には天照皇太神宮様だよ。ヨイトコネー。(請)
ソーリヤー、アリハノー、アリアーランヨイトコネー。
(出シ)二には丹羽田だ。ヤハレ、(請)ヤツトコセーヨ
ーイヤナー。
(出シ)二には丹羽田の井戸神様だよ。ヨイトコネー。
(請)ソーリヤー、アリハノー、アリアーランヨイトコ
ネー。
(出シ)三にはさぬきだ。ヤハレ。(請同上)。
(出シ)三にはさぬきの金比羅様だよ。ヨイトコネー。
(請同上)。
(出シ)四には信濃だ。ヤハレ。(請同上)。
(出シ)四には信濃の善光寺様だよ。ヨイトコネー。(請
同上)。
(出シ)五には出雲だ。ヤハレ。(請同上)。

かめにナ、くみくるヨ初水をエー。(碧海郡)

機織歌

○前の枋の木に百舌が巢をかけて、何と囀る立寄り聞け
ば、キンニヨキツコリ、イサマタリンと鳴く。クル
リとまつちや、リンと鳴く。イサマタヨシヨシ。(碧海郡)
○私の年は三十四、けふからはたの織初め。
○私は十九だが今日はたの織終ひ。
○わしらのばーさん六十九だがヨ、今日から機の織初め。
○雨が降りだす、焚物ぬれる、かはい子はなく、日が暮れる。
○あさぎぞめでもたびかさなれば、紺になります上紺に。
○わしや織やの織子だけれども、糸がきれるで泣き暮らす。
(渥美郡)

米浙歌

○ア酒屋ー裏師のー米かーすおとーはー、酒にーなれく、
エーなーれとかーすーよー。
○お祭やよいもの、よいくく。いやといはずに、お

長持歌

○珍らしや元日に鶴のなき聲、ヤレくアヤサ、車井戸よ。
愛知縣 長持歌 機織歌 米浙歌

(出シ)五には出雲の大社だよ。ヨイトコネー。(請同上)。
(出シ)六には六角堂。ヤハレ。(請同上)。
(出シ)六には六角堂観音様だよ。ヨイトコネー。(請同
上)。
(出シ)七には成田だ。ヤハレ。(請同上)。
(出シ)七には成田の不動様だよ。ヨイトコネー。(請同
上)。
(出シ)八には八幡だ。ヤハレ。(請同上)。
(出シ)八には八幡の八幡様だよ。ヨイトコネー。(請同
上)。
(出シ)九には熊野だ。ヤハレ。(請同上)。
(出シ)九には熊野の権現様だよ。ヨイトコネー。(請同
上)。
(出シ)十には豊川。ヤハレ。(請同上)。
(出シ)十には豊川稻荷様だよ。ヨイトコネー。(請同上)。
(碧海郡)

たらず。

○古太鼓でもた、かんせ。た、けや、喜ぶ、山の神。

○エーエーエー、こなたのくぐり戸は、くぐりにくい、くぐり戸で、目うち、はなうち、いたて島田がこはれ
ますわい。(添)くるは、ヤーレくくるは。ヤーレナー、
サイくくく。

○上では鶴がまふ、下では龜がまふ、流しでは米がまふ。
旦那様、御吉慶だ。

○阿漕が平治は、母様孝行で、禁断場所に網をうつ。

○正月御めでたい。門には門松、裏には、うらじろ、長いきするに、車えびとは。
(西春日井郡)

○イエー、お殿様の御殿では、上では鶴が舞ふ、下では龜がまふ。こなた様のかーばた酒屋、浦師はてんてこまひ
ーたくる。ハヤーレクルヤーレナ。

○イエー、正月はお目出したい。門には門松、裏にはうら
白、豆木に、かた炭、橙や、ゆづり葉。クルハヤーレ、ク
ルハヤーレナ。
(海東郡)

りぶし。

○なくなよ、なけくな杜鵑。ないたとて、籠より外へは出
られません。

○隣のけんかとかけて何ととく。葡萄の木と解きませうか。
どちらになるやら分りやせぬ。
(西春日井郡)

○前の小畑に喧嘩がござる。茄子と南瓜のけんかでござる。
日頃南瓜はわになやつで、長い手を出し茄子にまき
つく。そこで茄子さが黒くなつて腹立つ。けんか仲立は
冬瓜殿よ。南瓜よく聞け。棚ありながら、人の屋敷へ手
を出すヤンレ。

○さんじよさん小鍋に小豆を三升煮かけて、小豆は煮こ
ほれる、杓子はわつからなし。庭ぢやで、らほこ、上ぢ
やで、らほこ、あの子はなぜ泣く。おどけて泣くか。や
がておつかさんが三條の町から、飴やおこしや、ぴーび
やがらく買うてお出る。泣かずに、くらせヤンレ。
(碧海郡)

松前節

○名古屋小路のヤーエ、(受け)ヤットコセーヨイヤナ、
名古屋廣小路の柳の下に、土がひとり、どなたであらう。
小野道風蛙(買は)と立つてをる。(受け)ヨイトナー。

○ヤーエー酒の盗み呑み、ヤーエー、(受け)ヤットコセ、ヨ
ーイヤナ、あ、酒の盗み呑み千本櫻。靜にたゞ飲む(忠
信)。(受け)ヨイトナー。
(海東郡)

なぞかけ節

○一かけー、二かけ、さんかけてー、おしかけて、ハコリ
ヤ、おしかけよばれば、わしはゆやー。コチャー、おし
かけよばれば、わしーはーゆーやー。

○なつの川さらへとーかけて何ととく。あけませうか。
ハコリヤ、繁昌のあきんどと解きませうか。コチャー、
もかるばかりぢやないーかいーな。

○ねいさん袂で蟬が鳴く。何というて、白歯で身持ちはお
いとしや。
○おいとしぶしや梅干や、綿ぶしや、ならすの日干でひと

静岡縣

麥搗歌

○麥よ搗くは、つーらいな。あじよろーてーに、まーめが、
こーこのつ、ここのーつの、まーめーを、みーれば、
おーやのだいしよが、こへしい。
おーやのだいしよが、こへしい。

○じふーちと、二十ひーちと、つーいさをついで、釣
りにいく、そーのつーりざーをは、いーとはしやみせん、
さんのいと。
(田方郡)

鹿島踊歌

○千早振神々なれば、みよくをどりめぜたし。誠やら熱海
の浦には、みよく船がついたとせ、ともへには伊勢と春
日の中は鹿島の御社。

○十七が澤へおりて黄金びしやくで水を汲む。水汲めば袖
がぬれ候。たすきよかけ候。さいな十七。
○天竺は近いな、ぢよろ。た、らふむのが、音に聞こえる。

其た、らを何とふみ候。た、ら、らと八つにふむ。

○かしまではちごをどり候。ごまんだうではごまをたく。天竺の雲の合から、十三小ひめが米をまく。其米を何とまき候。日本ついきと米をまく。

○鎌倉の御所の御宮で十五小女郎が酌をとる。酒よりも肴よりも十五小女郎が目について、目につかば、つれて御座れよ。お江戸品川のはてまでも。(田方郡)

靛摺歌

○おーやまいぬーに、ほいられーてー、さかーもーとの、
名 宿 處 宿 名 宿

○お寺の前の八重橋、かんかんと、御門を光りかがやく。
○お江戸ではやるは、しゆすのおび、いまこ、ではやるは、
いけたに十の字がすり、紺の前掛。

○めぜたきこ、の、お座敷に、唐金の、銚子に、黄金の杯。
○月夜に咲いた梨の花、なればよし。ならなきや、梨のむだ花。(田方郡)

木遣歌

○との、御殿にー白羽の鷹がー、ヨイトコサーヨー、御知
ぎやう 行ますかよー、巢をーつくるー。アーヨイトコサーヨー
(磐田郡)

機織歌

○わしが死んだら白木のはこで、いけておくれよ道のくろ。
人がとほればなむあみだぶつ、親が通れば血の涙。
○からすをば、さぎと見るのもむりはない。一羽のとりで
もにはとりと、あふひの花でも赤くさく。雪といふ字も
墨で書く。

○藍のではなのこいとこよりも、どぞ死ぬなら天龍川。
(濱名郡)

白挽歌

○男のよいのが美濃の國、色白で、女子のよいのが遠州濱松。

○小鹿田圃の堤のどーてへ、鶴が三匹おりたさうな。おら
もいきたい、鶴見物に。姉はやるけど、妹はやらぬ。そ
れちやおかさんごむりぢやないか。あねがいきたいも、
妹がいきたいも同じ事。ナートサヨー。

○わしのおとさん焼餅すーきで、七つ焼かして、六つまで
たべて、一つ残して袂へ入れて、馬に乗るとですとんと
おとし、拾ふは恥かし、捨てるは惜し、馬やこんじよ
くなれ、焼餅やとんびあがれ。ナートサヨー。(安倍郡)

餅搗歌

○父がか、へて、ドッコイシヨ、うつした白の右左、兄
と弟がいさましい杵ふりあけて、ベツタンコ、母がとり
上げ、ヤツドッコイシヨ、のせおく板の右左。姉と妹
がむつまじく、粉ふりかけて。ベツタンコ。(磐田郡)

山梨縣

苗取歌

○ヨー、今日の、苗も終へるに、アーヨーナ、稻子は、ど
ーこにとーまるー。アーヨーナ。
○とりよい苗だよ、いつ蒔いた。雨風あはいで、春蒔いた。
○けさーなーいの、つゆーでは、そーじよー、濡いたよー
なー。

○苗とりー上手の、苗取るはー、あー本い手をー、いーれ
て。
○しこくまーきの、なーいをなー、おーしーめーぐーりと
らうよー。

○なーへーじーりのかーたしいはー、たろーじのかーほが
みらーれーなー。
(南巨摩郡)

田植歌

○なまけちや、くれちよ、早少女衆。この下に三斗五升ま

きの田がある。

(西山梨郡)

○オーヤレナーヤレノ、ヤレナー、早少女しゆー。田を植ゑてしまへば、左うちはで。

○オーヤレナー、ヤレノ、ヤレナー。餅搗かねーやつは、うそつく年のくーれ。

○オーヤレナ、今日の代はよいしろだ。

○オーヤレナ、お馬でかいたかこの様に。

○なまけちやくれちよ早少女衆、この下に二斗五升播きの田がある。

○はや田を植ゑて農休み、つれだちて行きたい、伊豆の湯一へでも。

○オーヤレナー、植ゑて青ませ、穂にまで咲かせ、食はで行くのが女の縁。

○オーヤレノ、こひする薄や、どこにある。富士山の裾野にたんだーひーともーとー、富士山のすそのにたんだーひーともーとー。

○五月がくれば思ひ出す。お隣と水掛論でうたれた。

○けふのーたのーえしろうま、こまー千匹おろいた。

よいしろかいた。をんなが^女かいたか、このやうに。

○よー田を、うゑると知れたなら、たいまつもちて、こーすもの。

○みろみろー、たろーじ。まだ田は、一反歩。一反斗りやすいよ。走りばしり、植ゑうよ。

○おわかれまうすよ田の神、みやうねんこそ参らうよ。

○今朝も牡丹餅よ、やつたぢやないか。なんの遺恨で、深植ゑなさる。晩にやわたしが酒を買ふ。

○何の遺恨で、深植ゑなさる。今日も牡丹餅もらつたぢやないか。思ひ直して浅植ゑなされ。晩にやわたしが酒を買ふ。

○はやう五月がくればよい。三ど笠かぶつて畦にたーちたーい。

(南巨摩郡)

○五月のうちに江戸へ立つ。武助さん、とて(底)百姓にやなれまい。

○千くらべても、先の殿、先の殿にます様の殿はこいせぬ。

○我子になさけ掛けるよりも、舅さん嫁子になさけをかけなさい。

○植ゑ田の中へ植ゑ込まれ、親達見るか笠のあひから。

○植田の中へぬれくと、植田はほさつ田の神よ。

○昔の歌は理をせめぬ。今の歌は皆人々のことばかり。

○はや田を植ゑて、農休み大塚沼へ花見に。

○植田の中へねさくと、馬鹿野郎。植田はほさつ田の神よ。

○太郎次のとの、お田植にや、東が白む。横雲が、引くんよー、横雲が。(朝)

○かきねをならすきりふす、今宵は戻れあすの夜に。(夕)
○太郎次の、とのほだれがそだ。七とこぬひめのはめりがさ、まーせんよーはそりがさ。(晝) (西八代郡)

此處 殿
○こーこは、とーのの、みおろしー、よくうゑて、たーもーれよー。

○おてんたう様の、ひーかりが、みづにもひーかり、かもーやき。

○なまけちやくれちよ早少女衆。この下に三斗五升まきの田がある。

(北巨摩郡)

○早田を植ゑて農休み、行きたいよ、大塚村の蓮の花に。

(中巨摩郡)

○けふの田は七つにやあがる。ヤノ。やつをうつ、薬師の鐘が、ヤノ、ほんとなる。

○日は暮れる鳥は森に、ヤノ、まひとまる。吾等も共に、ヤノ、まひをまる。

○天竺のやつむねづくり、ヤノ、何がふきぐさ。菜の葉と檜の枝が、ヤノ、ふきぐさ。

○初春に賣つみこむ千石船に、江戸のみやけは、ゑべす大黒中にある。

○早少女や田の中、やき餅や火の中。

○太郎次さま。よい日のー日ー取り、ヤレ、早稲とでろ(泥)中、手がほながー。アーヨイヨイ。

○吉田ではおふじの七五三を、ヤノ、七重きる。七重も、八重も、ヤノ、九重も。

○朝露に髪よのひさけて、ヤノ、苗とれば、苗葉の露で、ヤノ、そでしほる。
(南都留郡)

草取歌

○田の草取りが、いやだから、田のない國へ行のーきたい。
○ひどい姑にわしやとりつかれ、岩を袴にきりぬけて。岩をはかまにきりぬくよりも、水へ繪をかけ、これ姑。
○田の草取るも苦にやならぬ。秋作が當れば銀のかんざし。
○二番ご返は稻の爲、あけ取は又來年の田の爲。
○田の草取れば鎗かつぐ。殿様の鎗はか鎗ぢやごいせぬ。
○ほたりと落ちる庭の梅。落されてお庭のちさと色づけ。
○娘をやらば成嶋へ。成嶋は田場で稻がよくでる。
○あなたが來たら目がさめた。わしの目にや、あなたは諏訪の目樂。
(西山梨郡)

○ヤレ／＼ヨ。田の草取るも、ヤレヨ、おたのーしーみ。あーきさくが、あたれば、銀の、ヤレヨ、響。ドッコイ／＼。

根をほれ。

(北巨摩郡)

草刈歌

○草刈るならば、藪の根を刈らねば、小草たまらぬ。
(西八代郡)
○朝草刈れば殿やせる。朝草を刈る様の小野郎おきたい。
(北巨摩郡)
○あれ見ろ江戸へ雲がとぶ。雲ぢやない。心が江戸へーとびさうらふ。
○アナー。朝草刈れば殿やせる。ハ。鎌切れろ。刈らずにたーまれ。寄せーくーさ。
○アナー。十五夜さーまの出所は。ハ。しませ、三階松のーかーけから。
○アナー。山でのつらさー、いちごばら、ハ、おそろしや。里でのつらさー嫁御。
○アナー。馬いそけー船頭こけ。ハ。此の川は、ほけきよの流れ、すーみ川。
(南都留郡)

○ヤレ／＼ヨ。田の草とーるも、ヤレヨ、あだぢやな。お貢をあけねば、國が、ヤレヨ、さかーえぬ。ドッコイ／＼。

○ヤレ／＼ヨ。田の草とーるは、ヤレヨ、誰がたーめ、親や子を、すごさにやーならぬ、ヤレヨ、身の一ため。ドッコイ／＼。

○ヤレ／＼ヨ。みうちぢやとても、ヤレヨ、譲りやせぬ。水かけにや青田が枯れて、ヤレヨ、割れやすー。ドッコイ／＼。
(東八代郡)

○田のくーさ草とーるは暑あつけれど、あーきさくが秋あたれば、南部ちりめん縮緬。
(中巨摩郡)

やれやれな一節

○田の草とりたのまれて、行くもいや。行かぬも義理のわるさよ。

○田の草とるはいやなれど、秋作が實のれば銀の響。

○田の草とらばねつくとれ。丸すけや、いごや、びりもの

麥打歌

○ぢさま出て見やばんばつれ、とさまでて見やかつかつれ。
(南都留郡)

○岩殿山で三味をひく。引くは殿、かたるは殿のお妾めかけ。
アーヨンヤサー。
(北都留郡)

○岩殿山が荒れて出て、弓と矢と、小旗の竿が流れる。ア
ーヨンヤサー。
(北都留郡)

麥搗歌

○大麥ついてよ、麥ついて、お手にまみよ、九つ。九つのまみよ見れば、おーや親の在處、こーひ戀しよ。(南巨摩郡)

○奥山の樺の白で、あむぎを七日つけば、お手にまめが九つ。九つのまめを見れば、親の在處がこひしや。(南都留郡)

盆踊歌

○お寺の前の玉椿、とりたくも、高くておー手がとどかぬ、ヤレ、おー手がとどかぬ。

○小池もはらんだ、小川もはらんだ。相もと河原ぢや、瀬もはらんだー、瀬もはらんだー。
(東八代郡)

○をどれやるはねるも今夜ばかり、をどりたくも跳ねたくも、此の子をだいては踊られぬ。何時か雨降り河が出て、此の子を流してひざをどり。

○踊りよをどるも今晩ばかり、明けて十五夜をどるばかり。お寺の茄子がなつたとなり。一本に百八なつたとなり。なるにやなつたが、和尙にやくさくて食はれぬ。

○踊りに来たか、見にきたか。踊りに来たたらさーをどれ。

○わしとお前をどらんじよ。誰もかてまいかたるまい。

○踊りに来たか、見に来たか。踊りに来てをどらぬもの、卑怯もの。
(西八代郡)

○いやだよ、こんな田舎には。一日も早出て行かず、都へ。

○ほかしやさんのびんの毛は、奥山の木花の咲いたやうだ。

○殿様はお江戸で御書き役、あつらへてやりたい鹿の巻筆。

○泥水で育てられても、身は水仙よ。清く咲きます蓮の花。

一つこみ。

此の歌天保嘉永の頃行はれしもの、由、今も老婦人間に唄はる。(この地白挽きは夜間婦女子相集りてなす定めなり。)
(南都留郡)

粉挽歌

○お石臼挽に頼まれて、ひくもいや。ひかぬも義理のわるさよ。

○豆田もいやだ、戸田もいや、縁あらば荊澤の宿か青柳。

○一番挽きが今終へた。お若い衆頼むよ、二番挽きまーで。

○甲州ぢや小麥を三度挽く。お江戸では七度挽いて麩を取る。
(西山梨郡)

○お石臼挽に頼まれて、ひくはいや。ひかぬも義理のわるさよ。
(東八代郡)

○お石臼挽に頼まれて、ひくはいや。ひかぬも義理のわるさよ。

○大盡だとて高ぶるな。今に見ろ大盡跡は菜畑。
○馬八を馬鹿とおしやれども、馬八の歌きくやつは猶馬鹿。
○三十三になれど妻はない。妻ほしや、繩帯しめた妻でも。
(北巨摩郡)

白挽歌

○お前とわしは、梨のはな。なるはなし、ならぬは、梨のむだばな。
○わしらがぢやー、白にやー、かかしやおーかかしや、いらない。あーいやだら、いやとー。
○挽いておくれよ。一臺なれど。ひとの白だと思はずに。
○白屋へ来たで、ひけぢやない。わしよじーつと思はば、おー挽きくーだされー。
(南巨摩郡)

○門に橘、ノースン、格子に牡丹、うちの様子をきくの花。チヨイドーダイ。

○春の日に花見につれだつ二人の中を、キタサー、憎くくじやまする花の雨。ハードッコイ。

○天上山のつむじかーぜ、朝みーれば、大久保ぢゆうがま

○甲州ぢや小麥を三度挽く。お江戸では七度挽いて麩を取る。
(西八代郡)

○目出たい事が重りて、嫁は取る。娘はよそへ嫁入り。
○もちよ搗かん内ぢや、もちよ搗く年の暮れ。もちよ搗く内ぢや、もちよつかん。
(西八代郡)

餅搗歌

○目出たい事が重りて、嫁は取る。娘はよそへ嫁入り。
○もちよ搗かん内ぢや、もちよ搗く年の暮れ。もちよ搗く内ぢや、もちよつかん。
(西八代郡)

地搗歌

○藤田稲荷 田圃中 青柳権
○とうだのいーなりさんはたーんほなーか、あをやぎのごんけんさーまはしーくなか。
○千大根、吊り下げられた、軒の下。解いておくれよ、あらなはを。のちは心を入れ替へて、明日からこーことなるわいな。
○まんざ、名物、知らなきやあかす。千歳山には、琴平さ
ん、ちよいと富士見の西行坂。
(南巨摩郡)

○御家の始は龍柱。皆さんお聲を揃へて、たのみます。ア

一ヨイヤーヨイトナー。サヨナで三つ四つ頼みます。
二番おこしては牛柱、御家にまします、御堅め。皆さん
お聲を揃へて、アヨイヨイヨイトナー、サン
ヨナ。三番おこしては牛柱。アヨイヨイトナ、サ
ンヨナ。四番にいつては、四方をかためる御家にまし
ます。アヨイヨイ、アヨイトナ。

○惠比壽、大黒、ちやくふくねすみ、ハヨイヨイ、
祝ひこんだる此の地搗き。サリトハヨック、サンヨエ
ー、ハヨイサノサノサンヨエー、アサンヨナ
。

○久保の所左衛門殿に猫の皮着せてよな、ヨイサノサ
ー、鼠をとれとはそれや無理だよな。ヨック、サンヨ
エサンヨダ。

(南都留郡)

木遣歌

○出せよ、木を出せよ。娘も若衆も皆出せよ。學校の材
木引き出せよ。

○どーらんは腰に付く。大木は聲につく。アヨイサ、あ

かご一分、つる二米、つちが三百。ペンヨ。

○ヤレヤレヨ。ほかしやさんのびんの毛は、奥山の
木の花の咲いたごとくよ。ペンヨ。

(東山梨郡)

○ヤレヨ、ヤレヨ、ヤレヨ、ヤレヨ、ヤレヨ、ヤレヨ、

ー。ほかしやの槌から金を打ち出す。ヤレヨ。

○ヤレヨ、ヤレヨ、ヤレヨ、ヤレヨ、ヤレヨ、ヤレヨ、

ー。時ならぬ白髪に苦勞がみえやす。ヤレヨ。

○ヤレヨ、ヤレヨ、ヤレヨ、ヤレヨ、ヤレヨ、ヤレヨ、

ー。雪をだす綿にも温さこもれる。ヤレヨ。

(東八代郡)

○オーヤレヤレナー、ヤレヤレナー。ほかしやさんの鬢の
毛は霜月の木花の咲いたごとく。

○オーヤレヤレナー、ヤレヤレナー。ほかしや身上知れた
もの。弓一分、籠二米、弦二米、槌がさーんびやく。

○オーヤレヤレナー、ヤレヤレナー。馬子さん、うまにす
ずがない。葎崎へ形見に、鈴を取らされた。

山梨縣 機織歌 楮打歌 紙漉歌

とづなはかんばんか。もとづなが専一だ。ヨイサ。て
こがたがかんじだ。アヨイサ。

○ほたもちは粉につく。アヨイサ。も一つ皆様は御苦勞
だ。其の意氣でやつたなら、ちやう場へと御到着。

○今日は大慶だ。元づなにおたのみだ。手をつけてやつた
なら、さぞ御到着。アヨイサ。

(西八代郡)

綿打歌

○ほかしやしんしよ知れたもの。弓一分、籠二米、つちが
三百。

○ほかしやさんは、めたほかす、よりこよりこよりやなま
けて、綿がつくなる。

○ほかしやさんの妻はいや。朝おきて、よりこをよるのつ
らさよ。

(甲府市)

○ヤレヤレヨ。雨降る晩にやじつこまる。下駄からかさ
のしまつに。ペンヨ。

○ヤレヤレヨ。ほかしやさんのしんしやう知れたもの。

○ヤレヤレヤレナ、ほかしや身上、知れたもの。ゆみいち
ぶ、かごにしゆ、つちがさーんびやく。ヤレヤレナー。
○ヤレヤレヤレナ、やねやさんやに貴い立つ時や、
かーたみよ、おいてけ。ヤレヤレナー。(南巨摩郡)

機織歌

○谷村。縺子織。博多織。小沼すが織、つむぎは松山、田の
倉もえぎ朝日にてらす茶むぢ絹、烏澤日むぢの色よさ。
眞木の霜ふり卵色、大畑大吉萬がうし。(北都留郡)

楮打歌

○私や行きたいよ、おか、さん。葎崎の穴観音の開帳へ。
○今晚これで、千秋樂。あすのばんこりすに、おーいで、
くーだされ。
○楮草うちに、たのまれて、行くもいや。行かぬも、ぎ
りのわるさや。

(西八代郡)

紙漉歌

○紙すきよいやで、内を出て、くされ縁、又行く先きも紙すき。
○いやだらいやと、しよてに言へ。しすの帯、あはせて置いていやとは。
(西八代郡)

福島縣

神樂歌 (阿沼郡塔寺八幡宮)

元日

○ヤーラ面白や。打ち鳴らす笙の響の初音を褒め、聞し召せや玉の御戸の内。
○ヤーラ面白や。よき事を始めし今日は風吹かで、花の匂ひぞめでたかるらむ。
○ヤーラ面白や。御いのりに千世の御神樂まるらする、褒め聞し召せや玉の御戸の内。

七日

○ヤーラ面白や。春來ればまづ花米を打ち蒔き、こ花の匂ひぞめでたかるものを。

二月初午日

○ヤーラ面白や。大しやうのかたに掛けぬる夕だすき、かけぬる人は千世を経たまふ。

八月朔日

○榊葉や、立ち舞ふ袖の追風に、靡かぬ神はあらじとぞ思ふ。

月次朔望

○ヤーラ面白や。八幡をば宮とぞ拜む。前は海、後は岩尾、中は御在所。

臨時御遷宮

○ヤーラ面白や。神の道は千みち百みち道七つ、中なる道ぞ神の通路。

毎年八月朔日御神木に注連を張り柳を立てたる時

○柳はやし立て申し、ゆふしでつけてまねくには、何

れの神もおはすらん。
○柳はやし立て申し、袖の追風に、靡かぬ神はあらじものを。
(北會津郡)

早少女歌

舊正月十四日太鼓三味線にてはやし、毎戸を巡りて舞ひ歌ふ。

○舞ひこんだよな、まひこんだ。千秋樂でまひ込んだ。御手かけ遙とながむれば、かやに勝栗のしこんだ。年徳御たなを眺むれば、松とたけを祝おれた。右の竹が千秋樂、左のたけが萬歳らく。七五三のしめ繩をさらりと張りて、一福は内。床の間遙と眺むれば、かけもの三ぶくかけられた。一のま天照皇太神宮、二のまが春日の大明神、三のま八幡大菩薩。御座敷遙と眺むれば、綾のへりが五百疊、錦のへりが五百疊、高麗へりが五百疊、合せて千と五百疊、けぬき合せにまかれた。御茶の間遙かを見てやれば、金銀茶^釜まかを置かれた。め釜が七つに雄釜が七つ。御臺所遙かを見てやれば、太郎と次郎は釜のばん。御麻

遙に見てやれば、千疋こまをたてられた。千疋駒の毛色ばなし、一に黒馬、二に栗毛、三にさわらけ、よつ白。御庭の坪を見てやれば、一にたなのしく雲の色、四から崎

さき一五葉の松、六つ昔の高砂の、鶴と龜とが振遊ぶ。それ高砂の爺とうば黄金を集むるこまさらひ、寶をよきくら玉箒、御田の神の御さざけに、御子を三人持たれた。一番目のもし御子はな、官員方になされた。官員方にとりてはな、筆とすみとるのがよいとな。二番目のもし御子はな、町人方となされた。町人方にとりてはな、算盤とるのがよいとな。三番目のもし御子はな、御百姓方になされた。百姓方にとりてはな、蹴と鎌とるのがよいとな。

○今日は日もよし種おろし、おろす種子は何となに、ぶんこにかろしたに白わせ。

○雀もしらなはやうか頃は四月の長閑さよ。

○播いたる種子も育ける、けふは日もよし植ゑぞめだ。

○苗とり上手に苗とらせ、根本にそろりと手を入れて、ざんぶんぶとすぎあけ。

れた。ハ、三番目のもし御子はまた町人方となされた。土方にとりては、まゝ矢弓をとるのよいとな。町人方にとりては、まゝ矢弓をとるのよいとな。百姓方にとりては、また、蹴鎌とるのがよいとな。 (大沼郡)

正月鳥追

○鳥のあたま、八つに、割つて、こたらさ、つめこんで、

さんどの島まで、ホヤホヤ。

○雀のあたま、八つに、割つて、こたらさ、つめこんで、

さんどの島まで、ホヤホヤ。 (耶麻郡)

萬歳

○そもく鶴は千年龜は萬劫の祝ひを經る。鶴龜松竹よりまづ今日此御家を祝ひ奏し奉る。千代御萬歳アラ樂しや。あらたまの年とる始めのあしたには、水もわかゆる木の芽もさす榮えて通るは頻りの祝ひのものは、ほめやよろこび候へける。けふは館のこまんざい、昔の京は難波

○うゑてしやれば、黒羽つくしんだれ葉をふす。よいいと。○それが御家の御ちなどり、御暇願ひやれ早めてとうく。○千疋こまを引いた、千刈田おもて一よきに。(南會津郡)

○舞ひこんだよな、ふりこんだ。七福神を先きに立て、あまたの早少女舞ひこんだ。おん家を繁昌と舞ひ込んだ。おん田の神のお授けで。おん子を三人もたれたり。一番めのもしおん子は、また、おん土方となされたり。おん土方にとりては、また弓矢をとるのがよいとな。二番めのもしおん子は、また町人方となされたり。町人方にとりては、またそろばんとるのがよいとな。三番目のもしおん子は、また百姓方となされたり。百姓方に取りては、また蹴鎌とるのがよいとな。こゝらでお暇申しやれ、早少女だち。これがおんへのお早苗振。 (北會津郡)

○サーヨナ、舞ひこんだく、さうとめしゆうが舞ひこんだ。ハ、一番目のもし御子は、またさむらひ方となされた。ハ、二番目のもし御子はまた百姓方となさ

の京中頃が奈良の京、いまなる京の世の中は、あんのんたいへいたいらの京、比ゑいの山に三千坊坂本が六かしよ、門々が九つ、辻の数を算ふれば、八百八十八もの辻、町数を計ふれば、一千三百二の町なり。如斯に目出度き寶の君の御屋敷、たいなる處候はず。昔又聖徳太子妙法に車にめしては龍車牛車六龍車とて、もんじんと主をば、これ金剛力士の式を改め候はず。庭には信心相應の所には、そらより七福ふりくんだり、地より草木成長するさそんゆいの東には、とびなる川が流る。その水上を尋れば、浮木にのるひはきよひやくもんと、雲に浪は遡る龍紋の浪高くして八方菊水流る、淺き瀬には橋を架け、深き淵には船を出す。橋なるあもどのちよいふくは七つになりてはつほんだり。八つになりては開いだり。水を上げれば流の末は久しかるべきためしには、池の中の島々に、うゑたる木の名はなにとに、きんきよーほーや玉椿、いが草蒲に河原草蒲なる南天にしの一草こーべーちどりにあやめぐさしほーしまんすきんぎんすかるがらだにとーびがうつ孔雀鳳凰が舞ひ來て富

貴長者と囀る寶の君の御宅をば、御家内安全壽長久、
百萬年の御萬歳、祝うたり。誠にめでたう候へける。

(北會津郡)

彼岸獅子踊歌

○筑波ねのみねよりおつるみな川の川、戀ぞつもりて淵となりぬる。

○大寺の香の煙は細くとも、天にのほりてむら雲となる。

○春風に玉のみすだれふきあけて、花のやうなる女郎百人。

○参りきてうちのお庭を眺むれば、黄金小草が足にからまる。
(北會津郡)

三疋獅子歌

此の歌は流行的のものに非らず。我地方に於て、村社の祭典の際三疋の獅子、此歌を歌ひながら、舞をなすものにして、稀に見聞する所なり。

○まはれくや水車、おそく廻ればまはりかねるく。

○七つから八つまでつれたるめん獅子をば、これのおにはでかくしとられたく。

○まゐりきて、これの屋形を見申せば、みなみさがりて、

やかた八つむねく。

○朝草にききやう、かるかやかりこめて、これのうまやは、

はなでかやくく。

○まゐりきて、これのみ坂を見申せば、白銀黄金かけてまゐらすく。

○見申せば、ひだのたくみのたてたやら、くさび一つで、しめおかるなりく。

○まゐりきて、これの御宮を見申せば、大同二年にたておかるなりく。

○まゐりきて、これのじゆけんを見申せば、ほけきやう、八の巻、あそはさるなりく。

○奥州の東安達のかいだうを、よに日に錢をまうけ申するく。

○しつくと、しつをたはらに、あさのいと、いまくなくくとまたせ申したく。

○われくは京で生れて、伊勢そだち、こしにさしたは伊勢のおはらひく。

○なんほ女獅子がかくれても、つひに一度はめぐりあふべし。

○京の獅子と田舎の獅子が集りて、これのおにはで、かたをならべるく。

○くからは、いそぎもどれと、ふみがくる。おいとま申して、いざかへれく。

○さ、らの中すりめざめがする、そこでさ、らを、すりとめろく。

○まゐりきて、これの御庭を見申せば、たはらつんだよ、さても見事なく。

○まゐりきて、これのご門を見申せば、こけらぶきにて、めでたかるもんく。

○まゐりきて、これの和尚を見申せば、法華經八のまきあそばさるなりく。

○まゐりきて、これの御堂を見申せば、四方四面のをどりなりけりく。

○まゐりきて、これの御門を見申せば、ものにもものもふ、たいもせんなりく。

五大尊

東方に 降三世 夜双明王

西方に 軍荼利 夜双明王

南方に 大威徳 夜双明王

北方に 金剛 夜双明王

中央に 大日大聖不動明王

伊勢神明天照皇太神宮
熊野三社大権現
ナカノインオンシンサンゴメ (三ヤン)。

○われくは、いづれの獅子とおもはる、あくまをはらふ、御獅子なりけりく。
(安達郡)

郷神樂 (高田伊佐須美神社)
靈光

○あなあはれ、くしひのひかり、うつしきて、うつしきて、

むつのしほひにふふめくみわたれり。

福島縣 田植歌

阿奈清冷

本

○あなさやけ五十鈴の音のエー、

末

あなさやけ五十鈴の音に、エー磐戸比良具流く。

錦綺帳

○にしきのとばり、黄金の御戸押し開き、八重の雲を、エー分けて照さむや、てらさむ。

阿知女作法

○あぢめオ、、、おけ、あぢめ。オ、、、。

十寸鏡

○おほ神のみかけをうつす、ますかゝみ、中に曇は、エーすゑじ、とゞめじ。

安名手伸

○あなたのし、この御神樂の音。あなたのし、この神かぐらの、エー音は千代經と。
(北會津郡)

田植歌

○鎌倉様の大日堂で猿か大餅引くさゝた。おや引くさうだ
くく。
○も一と引くにや、小苗細小に手を籠めて、よく植ゑて響められうく。
○此坪植ゑたり何處へ行かう。極樂浄土の里へ行かうく。
○苗きり、日きり、坪きりなく日はつるくくと山の蔭く。
○夜水引くのは予が役よく。晒手拭で大鉢巻やれく。
○里は上方の大道はたく。ヤー、なんほ太郎次が代をらても。
(南會津郡)

第一段

○大神のめーさうとて、つなぎおいたる御座船。エホー。

第二段

○御正田のはやしは、高天のはらのよいところ。エホ

○そよといれや、そよといれや、竹の長枝のそよといれ。
イホー。

第十二段

○欠けて傳はらず。
以上十二段の歌は高田伊佐須美神社の御田植に歌ふ。
(北會津郡)

○こちの田植の田主様は、おほがねもちと聞こえたとき、
奥や奥州、南部や津輕、そとが濱まできこえたとき。

○山の中にしうとしもてば、あぢなものを来て来たとき。
かのししにまんがをおさせ、おさるこのはなどりを来て
きたとき。
(雙葉郡)

○きこえたや、けふのたうゑの田んぬしさまは、大金もち
と、きこきこいたや。

○けさのさむさに大川こえて、苗をとり、きこきたもサ
ヤ。

○なへのなかのうぐひすとりは、なにがなんと、ヤーさや

第三段

○おほかみのみとしろは、葦毛の駒をはやひく。ウホー。

第四段

○さやけきや、さやけきや、竹の音のさーやけき。イホー。

第五段

○おほかみのお母坪におろす豊千垂穂。
(とよちかたなほ)

第六段

○広い田や、安い田や、植うる所のたのしき。イホー。

第七段

○白葦毛の白駒を、高天原につないだ。アホー。

第八段

○しなひたや、しなひたや、秋垂穂は八束穂に。オー。

第九段

○おほかみのめさうとて、葦毛の駒をつないだ。アオホー。

第十段

○ひくい田アや、高い田アや、うゝる寶の樂しき。イホー。

第十一段

福島縣 田植歌

づるや。

○けふの田うゑのたんぬしさまは、おせどにくらが、ヤーやつあるや。

○八つのおくらに米つんだなら、いかなる、かみさまも、よーよろこぶや。

○あさはかの、いちみなくちに生えたる松はナーヤレ、なまつや。五葉の松に一の枝に、子持つた鳥、やれ巢をかけ、ヤー、巢の中をのぞいて見れば、中にや、ヤレ九つ、ヤー一つをばてんじよに上げて、八つで長者と、ヤレひろめたや。

○鎌倉にのほる道に、女に似たる石があるー。男よりて手をかけ見ればなよれかゝるー。きーヤレきこえたー。

○けふの田植の、たんの主さまは、おほがねもちーとき大金持し、きーこーえーたー。奥おーくは、あうしう、南部や、津軽つーがーるー、そーとがはま、まーでも、きーこーえーたー。

○苗代水に、ことを缺いて、せーきや、せーきを、七せき

きー、ヤレきこえたぞ、けふの田うゑの云々。

○せどの山で、のんのりめくが、おほかみなるか。ひるのなかの、おかーだち雨、おくめ、女郎をぬらすべー。からかさ、もちを、おやりなさー。鳴瀬川のはー、はてまでも、ヤーレ、きこいだぞ、せどの山でのんのりめくは云々。

○ヤレ晝飯もりに事をかいて、今日から女をた、すべー。晝飯持ちの渡る橋は、いたん橋を架けそろへ。板んばしではかんからめかす。金の反り橋をかー、ヤレ架けそろへ、晝の飯もりに。

○ヤレ晝飯盛りにく、出て来たか。おつけの實に何々。ヤレすまのわかめに、かつを添へて、皿は鯛に、かながしら。ヤレわけそろへー。

○かまくらの、ごしよが、前に咲くーぞ、せんほがさくら、せんほで、のをー、たづならば、ごしよが、名所となりかはる。ヤレきこえたー。

○お日を見れば、日はゑんこくで、どーこにはかをつくべ、西にはか、東ははか、風にまかせて、つー、つくるべ、

上げて、じやかごで止めて来た。

○けさの寒さに、だい河こえて、をんなは、なにしに来た。きーたもさー、うーらに千鳥のと巴とのついた、でばこをとりきた。

○あさめしもはやなりかゝる。おーつけのみは、なにやなに、白豌豆さんとまめに、にしんを入れて、わかめの菜さいに、豆に、あさつき。みそでくふ。

○けさの寒さに大河を越えて、苗をとりーきたもサー、イーヤレ来たもサ、けさのさむさに、だいがをこえて苗をとりー。

○苗の中の鶯どりはなによくとサー、さやづる。おーくら、おますに、とかきをそへて、俵をつめとのさわぎだ、ヤレーさわぎだー。苗の中の鶯云々。

○山の中にしーとを、もてば、あぢなものをサー見てきたー。かーのし、に、まんがをそへて、さるの、はなどりをしー。ヤレみてきたかー。山の中に云々。

○今日の田うゑの田ん主さまは、おーがねもちだとサー、ヤレきこえたぞ。奥は奥州南部や津輕そとがはままでも

お日を、みれば云々。

○かまくらの、ねぎのむすめ、日本一の、しやーれ女、ふる雨を、油につけて、十五夜お月と、かーかややく。ヤレーきこえた鎌倉云々。

○見て来たや、かのし、にまんがを添へて、猿のはなどりで、大かせぎ。

○ヤレきーこいたぞ、今日の田植、南部つかれのそとが濱までもー。ヤレきこいたぞ、けふのたうゑは南部や津輕のそとが濱までもー。ヤレ。

○苗の中の鶯鳥はなんと、さやづる、ヤーレ、苗の中のうぐひすとりはなんと、さやづるぞー。ヤレ。(信夫郡)

○聞えたや、今日の田植の田んぬしさまは、大金持と、きーきこいたや。

○今朝の寒さに大川越えて、苗を取りに、きーきたもサヤ。

○苗の中の鶯鳥は、何がなんと、ヤーさやづるや。

○七つ下りに、家出で見れば、前田の早稻がそめくやー。
七穂では八升もとれる、八穂では九升もとれる。

○聞えたーや。せきくりに土俵を積んで、水を引くとさー。
オセーく。

(安達郡)

○今日の田植のたんのし様は、大金もーちとききこえた
や。おーくは奥州、南部や津軽、外が濱までも、きー。オ
セーく。

○苗の中の鶯鳥はなーにを、なーにと、さーさやづるや。
お藏米にとがきを添へて、たーはら積めとさー。オセ
く。

(安積郡)

ほめ詞

客に馳走を運ぶとき興を添ふるため唄ふ。

◎蕎麥を運ぶときにほむるもの。

○そばいくと、とめおきまして、ほめる様こそしらねど
も、さつとあさぎにほませう。先づそばと申するは、
一二三四五六月土用に山畑構内に住居をいたし、七八九

月土用に相成りますれば、鎌切公に刈りとられ、ばんの
うへにて打ちおとされ、臼杵のさんにて石臼五郎左衛門
に責めおとされ、きぬ羽二重の目を忍び、けんどん屋に
と逃げ込んで、やわら剣術けいこをいたし、すてんく
と打ちのばされ、越後にては金貞、會津では重春重房の
打ちたる庖刀を以て、しよきくときりはなされ、火ぜ
め湯せめと相成つて、すでに命もあやうき處、竹皮あけ
ざる公に助けられ、まつた一番の老公にはたれがつう、
二番の老公に幕の内ねぶか、三番の老公には胡桃の五郎、
四番の老公には納豆糸ひけ公にからめとられ、すぐに御
前と相なりますれば、一膳盛はたつた八厘なれど、そば
は勢州一の谷敦盛公のおみごたんうち、御座敷うらは先
陣帆掛船、あんばいは義經公、盛は熊谷がちゃんねんにて
ちがひもり、色も白きは玉織姫、ねだんのはけしき高ど
うで、さつとかけたる花かつを、けふお出の御客様、う
どんやそばとおつしやれど、そばとは一つひまなきこの
奴、二つふたをばそつと取り、三つ美事に盛り重ね、四
つよその御客様、五ついつでもかはりなく、六つむしや

千だんのほばしらに、あやとにしきのほをあけて、此や
家かたにくるとみいた。オカくアー。(伊達郡)

をばこ節

○をばこ、いくつにならしやんす。この年くらせば、チ
ヨイト、十七だー。コチャヤレく。(雙葉、耶麻、伊達各郡)

○をばこなぜこねや。雪しろ水が出て舟とまつた。(耶麻郡)

○をばこなんほになる。何處で年とつた。然かも半田の
金山で。(伊達郡)

○をばこ居たかよと、ながしの小窓からちよと見たら、
をばこ居もせで、隣のちーさんばーさん、チヨイト、
お茶ごただ。コチャヤレく。(大沼郡)

拳歌

叔母様

○傳吾兵衛をばさーま、二階から落ちて、どこか痛めねー
か。あばら骨痛めた。なにがよかろーと、御醫者さん
に聞いたれば、奥の深山の、山椒の木くすり、一服取つ
て来て、飲ませて見たればい、はーらのごんぞーどーも
皆々とりれたさい。(伊達郡)

奥淨瑠璃

○おとくら様のかしのきを、もらひおろして舟とはぎ、百

福島縣 拳歌 奥淨瑠璃 なばこ節

岩手縣

田植踊歌

陰曆正月の遊戯にて、太鼓を打ち、笛を吹き、烏帽子を冠り、法被を着て、舞ひつゝ、歌ふ。

○鎌倉の御所の坪、五尺千本の竹の子、千本の千本てみたな、ならば御所は、名所と、サイ申す。

○鎌倉の御所は、庭に九十九疋の鶏は、九十九いとさやづり、御所に名所とさかえます。

(岩手郡)

○ヤードトヤレ、お正月はお歳男を祝ひ立てた若松。

○ヤードトヤレ、若松の一の枝に、殿の鷹が巢をかけ。

○ヤードトヤレ、巢の中を出て、見れば、子供黄金は九つ。

一つ取つてお上にあけて、八で長者と呼ばれた。(東磐井郡)

男踊の附け

もさうく。

(西磐井郡)

女踊のつけ

○目出度たやなく、目出たいとは鶴と龜、甲は兜の形にて、味噌様のご接待に摺り初めました。彼のやん十郎引連れしました。上の五月女三百人、下の五月女三百人、合せて五六百人の五月女ども、一時植ゑると思つたれば、大殿様のお田をも難なく片晝間に植ゑ仕舞うて呉れたことぢや程に、これようおん若様のお化粧分とあつて、これも五六百刈りもあるさうだ。

○さておん若様では我等が田を植ゑんとて、出で、見物なさらんと、さてその日のお装束、いつに勝れし華やかなる。肌には何をか召しやらん。十二ひとへのひき装束、かみろくすん、しもをば化粧袴で結びとやめ、大松小松千本小松の其下より、駒はいらくくと引出し、出雲轡をわんすとはませ、錦の手綱をよりかけて、金覆輪の鞍置かせ、おん若様ではおん身輕々、どつこいゆらりと召すま、に、これもさうく、仙屋田植ともつけられ候へや。

岩手縣 田打歌 田植歌

○おつとおん上様ご免なさりませ。あきの方から目出たく田植は、しこう仕りましてござる。オーまこと見れば渺々としたお田、前田三千刈、後田三千刈、本町刈りも三千刈、合せて一萬刈のお田だはや。

○やれさ太郎ごや、次郎ごや駒二疋二疋のことで、なることではない。隣りの彌三郎が葦毛の駒を先きとして、大黒小黒大夫黒、連錢葦毛にかもかし毛、鶉毛、雲雀虎月毛、柑子栗毛に額白の、四つ足白などというて、駒の五十も六十も、追つとりおさい、追ひ込んで、かさの水口より、しどのこつこうをさまで、ねりくねつぱりと搔いて呉れたことぢやほどに。

○オーまこと見れば代もでた。苗もでた。苗にとりてはどれくよ。仙臺白稻上々稻。植ゑればしよほく立つ様な、苗どもだ。

○サーく、坂の下の佐左衛門がかがなりとも、初妊なりとも、苦しうとも、生畔なりとも腰をかけ、煙草の一二服も打呑んで、大苗小苗手零苗のなき様に、よしまた取つてすつほりしやんと植ゑて呉れまいではないか。これ

○オヤドトヤラ、今日の田植は、田主殿はやからたて、米をつく。

○オヤドトヤラ、白が八から、杵が十六、女のかずは三十や三人。

○オヤドトヤラ、三十人や三人の四人の中で、どれはこなさの目につく。

○オヤドトヤラ、白銀の筭さして唐輪に結うたの目につく。

(西磐井郡)

田打歌

○よいやらよいで。アサーハーノヤ。

○よいやらにはふしがなないで。アサーハーノヤ。(九戸郡)

田植歌

○どこよりもおもしろいぞや。とよまさきの御やしき。

○苗はないとてかんつけて、ヤイ、田中で腰をそらした。ヤイ。

○ヤンヤチャーハレ、姉子は豆だな。ヤイ豆も豆だし、八

月半のうで豆。

し、金持長者と呼ばれた。

(稗貫郡)

○千福山の中の澤で縞の財布見付けた。おつとり上げて中を見たれば、黄金の玉が九つ。一つをば御上様に参らせ

○植ゑれば田にもなるが、植ゑなければやたゞのかき代。

○小手にこまかに舂場に植ゑて、秋はかべ(束)を刈るやうに。

て、八つの長者と呼ばれた。

○五月ばかりも気がきくならば、千刈萬刈一ひき。

○古川の七つ森がさても見よい森かな。きりかゝり、霞かゝり、さても見よい森かな。

(氣仙郡)

○穀とるに、わこ様の小脇差が目につく。

○朝はかみみの口見れば、粃が千石よりくる。殿の田から二千千石よりくる。

○こーなつはりにーめーがくれて、なんだつところはー、ホーイ、わすれた。

(岩手郡)

○一本植ゑれば千本になる、かゑどの早稲は、たね五舂。

かゑどなどはかゑたぐうづ黄金倉は九つ、九つの倉の主や四十や四五と見えたりな。

○一本植ゑれば千本になる。千本植ゑれば萬本になる。黄金庫が九つ。九つの小庫、十六七とめされた。

○千福山の中のながねで、縞の財布を見つけた。おとりあけて中を見れば、黄金玉は九つ。一つをばお上へあけて、八つで長者とよばれた。よぶもよんだし、よばれた

○あつ山見越しのどろの木さん、いつ花咲いて實かなるか。

○沖に見えるは丸屋が舟よ。丸にやの字の帆が見える。

ヤー、八重花ー咲いて、實かなるーや。

○二本松やー三本ー櫻、四本やなぎー、五本目に、ヤーかまくら枝のさがりふーぢ。

○若様に、ヤーまつろーとーあらばいつまでーもー、石にこけ、ヤー枯木にー花がさーくまでーもー。

○おきのたんほでひろかさ見える、あれはさだめし我つまよ。

○これからをがむぞ、ののたけさまを。つまに御縁のあるやうに、つまにごえんがあつたなら、石の鳥居をたてあける。そのや鳥居のほりものに、牡丹に唐獅子ほりあける。

○お田の神様はかござれ、大手小手のないやうに。(膽澤郡)

○いつほんうーゑーれーばーせんーほんになーる。あきーはーよびうまーしー、たーのかーみーにー。

○せんだいのみやけの原の萩の花、咲きそろひ、錦にまさる萩の花。

(江刺郡)

○あれ見ろや、向山で七つひめがはたま。はた草に何がよからう。前のほしばのとよぎく。はた竹に何がよからう、後のくねのの竹。これまでは、おほえ居れば、あやのかけ處忘れた。手をとりにて教へられたけれど、わが身はぐどんでつかひない。竹をすはとぬいで、殿御に三うちを打たれたり。打たれたは面目ないで、相模川に身を沈め、身は沈み、髪はうきてさがみ川の浮き草よ。

○さんづき下りのひぐれもと、寺の前を通ればこそ、寺に神樂があればこそ、太鼓つゞみの音がする。寺にかぐらがなけれども、神や佛の舞ひ遊び。(九戸郡)

○おらが弟の千松こー、今年初めて田を作る。柄は七尺穂は五尺、何たな駒でもつけられぬ。

○朝よはかーのーみんの口、ヤーハイ、もーみは、もーみは千こーく、よーり来る。

○植ゑればく田になる。一本ゑれば千本になる。秋はかべをかるやうに。
(上閉伊郡)

草取歌

○日出度い花は大根花。花さい俵となるぞめでたいよ。
(氣仙郡)

○お田の神様はかごされ、晩のあがりは早いやうに。

○これから拜むぞ、のの嶽を。よい米とれるよに、拜みます。

○思つたとて、語るはならぬ籠の鳥。かごの鳥や、飼ひ止められて怨めしや。

○柳津は、ヤ入口狭く末廣く、扇なり、扇なり。ヤ要で止めた如くだや。

○水汲みを、ヤ沖くる波に捕られ。桶返せ、戻せ、ヤ沖のとたつ。ヤーレシヨীগヤー。

○そがこくと呼ぶ時やよかつた。そがこ嫁にやつて、手をかいた。ヤーレシヨীগヤー。

○そがこくといて下さるな。私やそがのまご嫁だ。ヤーレシヨীগヤー。

○推せや、推せや、推せば此の田草を、推せばくろきすに近くなる。ヤーレシヨীগヤー。
(九戸郡)

草刈歌

○朝草に、桔梗と黄金刈り交ぜた。旦那様馬屋が黄金で輝くや。

○わしが夫幼少なれども三駄刈。刈らずともたまれや、嶺のおひがたよ。

○君様に待ちろとあらば何時までも、岩に苔、枯木に花の咲くまでも。
(膽澤郡)

白波よ。

○十七を、ヤーやりたくないよ。したやきさ。鹽風にもまれて、色が黒くなる。

○今夜の麥は御祝へ麥よ、白のそこから黄金わく。

○今日てる天氣にててらさーれて、何處に居たかなー、あじらーれる。あんじまいとはおーおもひども、ひるは佛、夜は夢。

○沖のーたんほのーがらーがらー、よしをかられて子を戀しがる。よしもーよし、ヤーこよしの中にやどをとる。

○これからーをがむぞ、のーの嶽を、善きつま御縁のあーる様に。善きつま御縁が、あーあるならば、石の鳥居をたて上げる。
(西磐井郡)

○夫持たず、年々孕むみどり稻。人知れず通ふは天の稻妻よ。

○呼べばくる、呼ばねば来ない、關の水。呼ばずとも、ござれや關の細い水。
(膽澤郡)

麥打唄

○向うの山の二本松、おれに似て、朝夕の風にも。

○日を見れば七つ下り、麥を見ればいがむきを七日つゞけて、腕に豆が丸つ。

○うつれば變る世の中よ。

○ばらくと千羽の小鳥立ち揃ふ。

○打ち波は岩にひびく、藥師堂からやく。

○十七とはりを願ふ。相模川の鯉鮒も、殿は釣魚に、袖を波にてたる。

○かみがたは、ヤーレ、何時も五月。ヤーレ、かみかりしやうぶは、ヤーレ、流れる。エー。

○鎌倉の小鍛冶の娘は、ヤーレ、日本一の、アてどしや、エーてどしやだ。

○瀨が鳴る、瀨が鳴る、二又(地名)小川の、ヤーレ瀨が鳴る。ホホヤー。

○ばいさきそろへて、ヤレ頼むぞ。

○小風にそよと息をばのーんで、ヤレたのむぞ。

○おかだち雨が、ヤーレみさわら。ホホヤイ。

○うしろのくねで鳩が鳴く。何と鳴く。長者になれとさやぶるよ。

○十七さしさかづきに花が咲く。花もはな／＼黄金花。

○鰻の瀬昇り、サノヨイ／＼、今頃三杯ヤレ頼むぞ。

○上方はいつも五月、蓬草蒲が流れて来る。ばいさきそろ。
(氣仙郡)

○麥打は、ヤーらくだと見せてらくでない。何仕事、ヤ
ー仕事にらくがあーらばこそ。

○一の關、ヤー臺から見れば、なーがい町。ながけれど、
ヤー一夜のやどをとりかねた。

○山の目が、ヤー柳の葉よりせまい町。せまいけれど、
ヤー一夜のやどをば山の目よ。

○戀しくば、ヤーたづねてござれ山の目さ。山の目のな
ーらんばの、杉を見あてに、ヤー二本杉、ヤー三本五葉
の松、松の葉は、ヤーいろこそかはるおち葉松。

○呼び来る、ヤーよばねば来ない、堀のみづ。呼ばずとも、
ヤーござれうらの細みちを。

○五反畑のなこやうりり、つーるをはなれてこーろ
／＼と。

○麥つく／＼と七日つく。七日めに、ヤー絲より細く身が
やつれ。ヨイサツサツ。

○隣の麥など、アーつけたそーだ。おら麥は、ヤーいまそ
ろ／＼と糠がたつ。ヤー。

○麥のつけるもお手あせからよ。嫁は姑のなーらしがら
い。

○搗くてば搗くよだ、まねぐよだ。杵の上げ下げ上の空。
○搗けた麥、ヤー何時までつかせなぐさみに、あすなさの、
ヤー夜明の雞の啼く迄も。

○お前達、ナー遊山に唄ふと思ひませう。なに遊山に、ヤ
ーこはさのまゝの忘れぐさ。

○麥つく姿を繪に、畫に枕屏風の上ばりに。(西磐井郡)

○心ではとび立つ程に思へども、情なや羽ない鳥に生れ來
た。

○心では思はぬ事はなけれども、思ったとて語るはならぬ

○雨がふる、ヤー船場に笠をわすれた。ヤー笠も笠、ヤ
ー八つ緒をたてたすけの笠。

○此處ばかり照るかな。日がてるよ。あれみろちやなー、
南部のはても日がてるよ。

○あついと思ひば、とだてがない。なにさな、なにと思ひ
ば、あつくない。

○後のくねで、鳩がなく。なにとなくや。長者になれとさ
やぶる。

○西根山やお駒形が嶽の岩つ、じ、若さをくらしおれか名
や。

○氣仙坂、七坂八坂九坂、十坂目はかんなをかけたごとく。
それはうそよ。人足かけて平らけた。

○松島のーな瑞岩寺程の寺はない。前は海、ヤー後は繁
る小松山。

○氣仙沼の萬五郎殿の葦毛駒乞はれたと、ヤー一萬五兩を
七きれに。

○山目の、ヤー八吉がおかた小鍋やき、粟に米に小豆を入
れて七なべ。

籠の鳥

(贈澤郡)

○十七はけさたつ船に、手をかけた。船はやる。ヤせんど
はやらぬ。とめてやる。

○なんぶさまや弓矢にまけて、牛に乗る。牛も牛や、鼻か
け牛にお乗りやる。

○松島の、するがん寺ほどの寺もない。まいは海、うしろ
は茂つた小松山。

○松の葉が色こそかはる落ちばこそ、落ちだとしておまへの
世話にやなりやせまい。
(江刺郡)

麥搗歌

○氣仙坂、ヤーヨイ、七坂八坂九坂、十坂めにかんなを
かけて平める。それがうそ。ヤーヨイ、ごふしんかけて
平めろ。ヤーヨイ。

○南部どの、ヤーヨイ、弓矢にまけて牛に乗る。牛もう
し、鼻かけ牛におのりやろ。ヤーヨイ。

○氣仙沼に名のない鳥が一番、夜明けには船出せ／＼とさ

やづる。

○氣仙沼では淺鯛あさびらをかきて、かきためて、實をばたべ、か
らをばあとのかたみとす。

○目出度い花は、ナーそばの花。ヨイ／＼、花咲いて、三
角となるは御目出たい。ヨイ／＼。

○山中ものと笑ひども、山にこそ、色ある花が二度も咲く。

○お江戸ーからし、ヤイー、御舟がくーだる。孫もーつー
めでたいやし、さーんーめでたいがかなるやうにー。

○十七がさすさかづきに花がさく。花も花、黄金の花が八
重に咲く。
(氣仙郡)

○麥搗は樂だと見せて樂でない。何仕事、仕事に樂があら
ばこそ。

○こらほどに搗いても搗けぬ麥や無理だ。つかすともはだ
かになれやお麥どの。

○おらどこで、ヤ来るかな、來ないがな。泊るがな。ねて
ご座れ。朝日のかんかとさすまでも。
(膽澤郡)

おそれて中やかやく。ザンコンザン。

○平砂に備後表をおしひろけ、我等にすわれと御免しま
す、／＼。

○旦那様前に立つたる白ほでは、立つた柱は白銀に、黄金
たる木を引きそへて、しんのやみにも月とかやく、
／＼。

○穀米は、といでしらけて、湯でそめて、冷す水には、う
らの高清水、／＼。

○ならのなら漬香の物、それには梅の八割、／＼。
○何とたべたよ、此の御酒。あづま下りの加賀の菊酒。

○此世は都下りの花の世、おそれながらも手に取りて、國
へのみやけに、いざやまします、／＼。

○向ひ小山の桔梗小花、つほんで開いた。ほんと開いた、
／＼。

○海の真中に濱千鳥、波にゆられて、ちんと立揃ふ、／＼。
○鹿とつれ、ば頭を振り、兎とつれ、ば、三はねはね候ふ、
／＼。

○桔梗かるかや刈りませて、盆の御棚をかざれば、花でか

麥押歌

○今出が山の郭公、夜あければ、ヤ、ナー、金ほれ／＼とさ
いづる。

○ゆんべうまれた龜の子は、今朝は切生の池に住む。

○昔からかはらぬものは松と杉、色々にかはるは女の上心。

○つばくらは酒屋の屋根に巢をかけて、夜あければ、酒こ
せ、うれとさへづる。
(氣仙郡)

盆踊歌

鹿子舞

○まゐり来てこれの御庭を見申せば、四方四角で樹形の庭。
ザンコンザン。

○まゐり来てこれのやかたを見申せば、八棟造りに柿貴。
こけら便りに生ひた松。

○その松に鶴と龜とが巢をかけて、鶴は千年龜は萬年。

○奥山にひの木さはらの門立て、眞の闇にも月とかやく。
ザンコンザン。

○まゐり来てこれの燈籠見申せば、長さ二十尋竿の尺、天
がやく、／＼。
(氣仙郡)

○花は咲きそろ、ナー黄金の花はー。今は盛りにさきみよ
ーをー、ほんにみごとな黄金花。

○雪はこんこん、霞はこん／＼、足のつめたいのをー、草
履買つてたもれ。あつにお衣裳を買つて給へ。

○野山がくれのその山奥の、岩に咲いでるがんげのつ、じ、
なんほ色よく咲きみだれても、人かよはねばそのま、散
れる。
(上閉伊郡)

稻刈歌

○よい酒色の男かな、何時見てもしんじそろりと男かな。
(氣仙郡)

刈敷歌

○小友山みあけて見ればおたつかね、みおろせば庄屋のま
いのごろ舟、はしりたいよ、江戸關東のみなとまで。

○やーよいよいかと聞くは馬鹿が聞く。聞くと馬鹿、聞
かせるものも共に馬鹿。
(氣仙郡)

収摺歌

- ヨイヨイヤードヨイヤワサー、足元大事の。ヤードヨイヤワサー、ヂヨイヤワサー。
- 御前と添へば雪駄はく。離るれば、角ある石もはだしで。
- 苦勞と思ふな世界は車、又と豊年まはり來る。(氣仙郡)
- するしひきや、らくだとみせて、らくでない。なに仕事にや、仕事にらくが、あらばこそ。サツくくく。
- おんまへたつや、ヤエ、いさんでうと、思へども、なにさや、ヤエ、こはさが、ま、に、わすれぐさ。
- 南部様、ヤードヨイ、弓矢に負けて牛に乗る。牛も牛、ヤードヨイ、鼻かけ牛にお乗りやる。(西磐井郡)
- 氣仙坂七坂八坂この坂、十坂目にかんなをかけた如くたや。(膽澤郡)
- 吉岡の、ヤード七つが森の七やくし、おでんから、ヤード、鹽釜見れば目の下に。(江刺郡)

白搗歌

- あねこじよーらう呼ばれて來たな、たゞも來ない。秋はたおりに來ましたよ。ヨエトコラサーヤーエ。
- きたがゑーがけり箱、手箱、かねつけ箱まできたは、これやふしぎ。ヨエトコラサーヤーエ。(岩手郡)
- あねこ聞けや、うしろのくねで、鳩こあなく。なくでないや。長者さんになれとさやづるのだ。
- 氣仙坂、七坂、八坂、九坂、十坂めにかんなをかけてまよめたな。(稗貫郡)
- 今日つく米はお祝米だ。今さらさんと糠がたつ。
- となりであ、ながら立て、も、おつきやる。私や八がらも立て、つく。
- おらきぎやーお庭の内にも響かない。それでもつけらるお米がこなとなる。
- 十七はさはにおりての水かゝみ、さてもやつれたわしや

すがた。だれもさうだがともたちも。(九戸郡)

物搗歌

- 氷上(山名)の西の御殿の百合の花、おなじさけども西向きに。
- 竹になりたい御山の竹に、御山繁昌の旗竹に。
- 松島の瑞岩寺ほどの寺もない。前がうみ、うしろは茂る小松山。
- 長部か嫁になるよりか、山の目のするはか馬屋の馬となる。
- 御暇申すぞ、うしと杵、御縁ならぬ、明朝もまゐります。隣の白がつけて取る。おら家(自分)の白が、今そろく糠が立つ。(氣仙郡)
- つ、くくと七日ついた。ヨイコレサンヤと七日ついて、お手に豆は九つーやー。ヨイコレサンヤと、それつけたか。

きすね搗

- 白はたでおほこがなく、ヨイコレサンヤと、おほこなくのや、ほたんの花でべろくと。
- 十七八のおろしきぎや、ヨイコレサンヤと、山までひくよー。それつけたか。
- としよればお神きがー、にはにもひゃかない、ヨイコレサンヤと。(岩手郡)

粉挽歌

- 梅もさく、櫻も咲いて實がなるならば、どろ木のは何時花さいて實がなる。
- おどけあい、ほんになる粃米となる。丸い卵は鳥となる。
- 千たて、萬かる稻もをしくない。すがら山お姫の命こよしいよ。サ、ヨイヤイヤ。
- 思ひもよらぬ今朝の雪、たが踏みそめた下駄のめと。
- 小友には大沼小沼三沼ある。なりたいたが、中の沼の主になりたい。(氣仙郡)

餅搗歌

○よいさーぐわーだらゑーねばたーくつたーかめのこ。
 イエー、一には、こんごーだいらき、マー。
 イエー、二には、おーのぐりき、マー。
 イエー、三には、さんかいはつこーち、マー。
 イエー、四には、四天王りき、マー。
 イエー、五には、五しよのこーりき、マー。
 イエー、六には、六らくじよーどー、マー。
 イエー、七には、七ほーやくらい、マー。
 イエー、八には、八びやーじよーめつ、マー。
 イエー、九には、くぎよーのおーほー、マー。
 イエー、十には、十ちのふどー、マー。(岩手郡)

○氣仙坂や七坂八坂九坂、十坂めにはかんなを掛けた如く。
 ○音に聞くや黄海のしゆくの七日市、前は川や、うしろは茂る小松森。
 ○搗けたーもーつやーいつまでーつかーせなーぐーさーむーやー。ヨイくあすのーあーさのーやー、夜明けやー鐘のー鳴るまでーやー。ヨイヨイく。(江刺郡)

○氣仙坂七坂八坂九坂、十坂目に、ヤヨ、鉦を掛けて、たいらめた。それはうそ、ご普請かけてたいらめた。
 ○嫁御あ来た。ヤヨ、小豆鍋かける、鹽いれろー。
 ○山の目の、やきらが、おかた、小鍋やき、粟に米、小豆をいれてな、こ鍋。(江刺郡)

地搗歌

○ソラエー、一にや木の戸の、ヤーハントー、一にや木の戸の大日さまだよー。エトナー、ヨエヨエハーリヤ、ハーリヤリヤドツコエ、ヨエトゴ、ヨエトゴ、ナ。
 ソラエー、二には、にがたの、ヤーハントー、二にはにがたの白山さまだよー。(拍子)
 ソラエー、三には、讃岐の、ヤーハントー、三には讃岐の金毘羅さまだよー。(拍子)
 ソラエー、四には信濃の、ヤーハントー、四には信濃の善光寺さまだよー。(拍子)
 ソラエー、五には御でんの、ヤーハントー、五には御

○此の頃は、ヤー夢にも見えさ、来るもこす。夢にさい見ない妻はなぜ來べき。
 ○餅つきはらくだと見せて樂でない。何仕事や、仕事に樂があるものか。
 ○棚の瀬にや名の無き鳥は一つがひ、夜は明けば舟こせくと、さやづるべ。ふねこせば、錢出せくとさやづる。
 ○花よめごや、手拭何とこのんだや。麻の葉にや、根ざ、をつけて好んだや。
 ○山の目のナ彌吉が御方、小鍋やき、粟に小豆に米入れて七鍋。(西磐井郡)

○戀しくば尋ねてござれ山の目さ、やまのめの、ヤヨ、たんなのすぎをみあてによー、二本ーは杉、三ほーん櫻、四ほーん柳ー、ごほん目の、ヤヨ、かまくらえびと、さがり藤。
 ○餅つきは、らくだと見せて、樂でない、なに仕事、しごとにくは、あらばこそ。

殿の荒神さまだよー。(拍子)
 ソラエー、六にや六社の、ヤーハントー、六にや六社の六地藏さまだよー。(拍子)
 ソラエー、七つには南部の、ヤーハントー、七つにや南部の早池峯さまだよー。(拍子)
 ソラエー、八つにや八幡の、ヤーハントー、八つにや八幡の八幡さまだよー。(拍子)
 ソラエー、九つあ小牛田の、ヤーハントー、九つあこったの山の神様だよー。(拍子)
 ソラエー、十には處の、ヤーハントー、十にはところのおほつなさまだよー。(拍子) (稗貫郡)

○此處は大事のとこめ込め續け、黄金柱の立つ所。
 ○ここは大事のどこしめかけこつげ、長者柱の立つ所。
 ○今度此度大きな事あぶんできた。奈良の大佛様為さらた。
 ○これの御亭様お名をば何んと、倉は九つ倉之助。(膽澤郡)

木遣歌

○ヨンヨイヨイヨイトナ、今日は吉日我君御出きにや、ヨイトナ、ソーレナ、ヤヤ、ヨイヤイトナ、サイヤヤ、紫手綱でヨイトナ、サイ、(膽澤郡)

茶摘歌

○お茶摘み、茶摘み、なんほつんだ茶つみ。千葉つんだ茶つみ。千葉のお茶も一葉のよりよ。駿河の富士も芥の積り、たのますうます、一杯つめ茶つみ。(膽澤郡)

長持歌

○音にきくや黄海の驛の七日町、前は川や後は茂る小松山。○松の葉は、ヤ色こそ變る。落葉こそおちたとて、ヤお前の世話となるでない。○雨がふる、ヤ船場さ笠を忘れたよ。笠も笠、ヤお江戸ではやる菅の笠。

○氣仙坂、ヤ七坂八坂九坂、十坂目に、ヤかんなをかけた如くだよ。それがうそ、ヤお人足かけてたいらめた。

○登米船、ヤ柳津浦に着く時は、帯を解く、ヤ髭を延べて

○此殿の乾の隅に瓶七つ、中なる瓶はさくら波立つ立つ。○イヤ、中なる杉は稻荷杉かな、稻荷杉かな。ヨホーエ。右稻荷神社にて踊るとき歌ふ。(岩手郡)

獅子踊

○これのお庭を見申せば、四方四角で榊形や。太鼓の白帶きり、とめて、さ、らを揃ひきり、とめふる。まつる、と申せども、諸事にまぎれていまぞまゐりた。○これのおやから見申せば、四方せかへで小かやぶき。千疊座敷に燭をたて、かすの位牌を立て並べ、位牌ほん字と拜まる。

○昔よりさんせきをお禮と申せども、一禮申して遊べ友達。○まはれ、水車。遅くまはれ、しきにとまるな。○朝草に桔梗や尾花刈りまぜて、これのお馬屋花で輝く。○吾が妻が奥のふかやに居たとはいきて、便りをやりた文のさしそへ。

○さしがさの心棒のろくろとばかり、おしづおされ、駒のおりひざ。(江刺郡)

○氣仙沼で、ヤあさをかいてかき溜めた。身をば食ひ、ヤからをばあとの形見に。ヤ。

○目出度い花だよ大根の花。花咲いて、ヤ俵となるはおめでたや。

○南部様、ヤ弓矢に負けて牛にのる。牛も牛、ヤ鼻かけ牛におのりやる。

○西根岳、ヤお駒の岩の山つ、じ、人目なく、ヤ花咲く、咲いて暮し居る。

○酒屋の屋根では鳩がなく。夜あければ、ヤ酒こせくとさやぶるよ。

○つけた、餅。ヤいつまで搗いてなくさむ。ヤあしなさの、ヤ夜明けの鳥のなくまでも。

○目出度い若松様よ、遂に鶴龜五葉の松。(東磐井郡)

神樂歌

○いなりやま、杉のむらたちかき分けて、かき分けて。ハエヨイサーサ。

舞

○三國一の富士の山、登りてみれば八の峯、下りてみれば八の谷。

○位牌御佛拜むれば、光り輝く有りがたや。南無阿彌陀佛。

○香の烟は細けれど、極樂淨土に匂ひさす。なむあみだぶつ。(江刺郡)

回向

○光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨、此心歸命、南無阿彌陀佛。

○天竺のごんの川原のみ影石、申し下して供養となす。彌陀願以此功德、淨土誓一切導發菩提心、往生安樂國、南無阿彌陀。

彌陀願以下は各歌の終りに附するものなり。

○地はかほご、霞はかけご、天は蓋、申す念佛納め置く。

○天竺の達摩が池の蓮の葉に、洗米を包んで手向ける。

○御佛は蓮花の莖を杖につき、開きし蓮花をお手に持ち、

極樂淨土へすぐくと。

○朝起きて西を遙にながむれば、法華經や、唐木の帆柱に、綾と錦の帆をあけて、數の御佛うちのりて、極樂淨土へすぐくと。

○後生のよき人立つときは、降る雨ふらんで、風たたんで、四方十方皆花降りて、極樂淨土へすぐくと。

○阿字十方、三世佛彌字一切諸菩薩陀字、八萬諸聖教皆是安樂國、南無阿彌陀佛。
(江刺郡)

鐵砲踊

○此の里のいかなる山だち忍び來て、幼き鹿の心さわがし。

○山だちは鹿よくとねらひども、鹿がさとして打つにうたれず。

○三席お禮と申せども、一禮申して歸ります。
(江刺郡)

神國

○神國のうめの神は、なにをさけまたらす。古き米をはかるとて、黄金のますさけた。櫛のけたはつきるとも、

古い米はつきまい。
(岩手郡)

御祝歌

○ごいはひはしければ、おちほの松は筆とめぬ。

○かさなるも、かさねた。にけんのしよたいをかさねた。

○ゆるゆるとおひかいやる、とさからふねのつくまで。
土佐

○目でたざしきにお客をもけた。お客と思へども皆忍びず。

○酒の肴に鯛すゞき、お一つとつてはさみ申す。
(岩手郡)

○お祝しければ、お庭の松がそよめく。

○縁あらば深くあれ、七瀬の川もあさ^浅かれ。

○夏まき小豆と女の子は、立所がよければ實なる。

○歌まひやつきるとも、少女のこすはたえもせぬ。奥のおへやに子が七つ。
(九戸郡)

昔さんさ踊

○十を七や、はさのしはれに水くめや。桶をはきめに花がさく。

○十を七や、けさの朝草何處でかれや。烏帽子長根の影の澤で、葛の者はへ七まるき、駒につけてもたをくと、いかな御亭主もほめる。

○十を七や、たけだけたけのみこしのかは、櫻板に引きわり、橋にかけても花がさく。

○たけだけたけのみこしのたまり水、すま^ずこ、らにさ、の色。
(岩手郡)

嬉しき舞

○お正月のことなれば、三ばう立ての祝酒、三杯飲んだ心持や、なにより以て嬉しきや。嬉しき舞とはやさうぞ。其次の嬉しきは、婆さん^{おばさん}達の嬉しきで、孫彦やしやごね、ろやころころや、ころころやの白犬は、一疋はねれや皆はねると、だました心持なにより以て嬉しきや。嬉しき舞といよいよ。
(上閉伊郡)

なかおくに節

○松島の五台の橋に腰をかけ、沖を遙かにながむれば、白きかもめはみつつれての、三つつれて足をば艦舵に、身を船に、上げたる首をば橋に、ふたつの羽をば帆にかけて、ゆりつゆられつ舟よらん。
(氣仙郡)

○内のやからは目出度いやから。四方のすみから黄金わく。白い鼠はこがねをはこぶ。
(岩手郡)

しよが子節

○天保よ天保よ、あふき尺の人にて、此國はせまいとて、

岩手縣 嬉しき舞 天保舞 なかおくに節 しよが子節

○しよがこしよがことよばる時やよかに、しよがこよー

めにけて、てこはーでだ。ナー。
○しよがこくと名を呼んでたもーれな。私やしよがやの孫嫁だな。ヤエしよがや。エー。
(岩手郡)

豆子蒔

○豆子蒔きたいにも、ヨーイヤサー、豆地こは持たぬ。人のかれ地ぢや穀とれの。 (岩手郡)

奴歌

○急ぎ来て戀しき人の墓標、見るより早く濡る、袖かな。
○濡る、とも、祖様の袖は世にあるが、我が袖こそは露と消えつ。
○此の橋を如何なる人のかけたやら、後生浮べの玉のかけはし。

○朝日さす、夕日輝く大寺に、釋迦と達摩は、瑠璃の御座に西向になれ。ヤレカアイサンマチャイ。

○思ふとて、思ふとて、色にも出さな。叶ふ様思はぬふりして、末を留めさい。シンキナ、ヤレカアイ、サンマチャイ。

○當世流行の石貝らぎの大鐙をするりと抜いてご免なれ。

○お宿は何處山の天。イヤスイヤスイヤスノス辨慶ダンベーカーヤイ。

○砂鉢めがつぶりめけども、底心こ、ろは只佛たさ。兎角しやつら娑婆に縁すい、砂鉢に氣が付いた。さー、見事なシヤツラチャエナ。

○浅くさの焔魔王に酒手三文はたられた。六道錢とてためて置きたる刺ま、さん出した。サーサオシソナシヤツラチャエナ。

○我等も若い時には栗の毬さへ食ん呑んだ。今は年寄天と髭とに倒された。イヤススノス辨慶ダンベーカーヤイ。

○茲許へ持つて來なされ猫の皮の笠、油單三筋の絲をば強き引き張り、舂の皮だんべ。辨慶ダンベ。

○朽れ樹の節に斧添へてこぢや持つてこい。打裂くほんとうぶして若い衆へ交るべ。サフチシヤツラスワヘノホー。

○四角五角は流行ればこそはやる。さまして一角杯遠世間

○重くとも、軽く登れや、不動坂。登りて拜め彌陀の淨土。シンキナ、ヤレカアイサンマチャイ。

○蟋蟀、きりぎりす、木の葉の下で啼きもせて、夜明の寝亂れ髪、身に増すや、君と我が中ふつすと切れや。カアイサンマチャイ。

○先様は後生菩提の道として、是れまで遙々有りがたや。

○御臺御臺と黄金を積み重ね、これも先祖の御爲とて、我等に下さる拜み戴け。シンキ、ヤアレ、カアイサンマチャイ。

○參り来てこれの御座敷見申せば、南下りの後生の庭。

○此の酒を何とたべたや。我が連よ和泉古酒、加賀の菊酒。

○鳥ならばさまのあたりに巢をかけて、何時もき、たや、ヤイサマ、お聲其聲。ノホホホンホホサン、ソリヤサーノ。

○何時もサ、飲んで繁れ松山。いはしやんせ、唐も日本も、大和も酒の上なる浮世ぢやと、遠世間から言葉から。スイサフサオシヤハラスワイノチャヤイ。

○桐の眞魚板に打つな。さしかけた地打の熊手でぐわらりと引つかけた。イヤスツスノス辨慶ダンベーカーヤイ。

○茲許へ負うて來なさい、宇治の里の姥を。しちひき粉にしてこて喰ん呑んだ。イヤススノス辨慶ダンベーカーヤイ。

○思ひかくれば荒磐だにも、ふんこほつた。まして板戸七八枚は何だ。辨慶ダンベーカーヤイ。

○思ひ直して本の鼻様呼びやれや。本に子もあり、葉もあり、幼馴染ちやと、遠世間からいはさらす。イヤサオシヤツラスワイ。

○うつな浮世になげにさやう知りなされるな。我等も若いをりは溜らん。オカスイヤツタモサイヤーツクノアイヤス辨慶ダンベーカーヤイ。

○我等も若い時粉糠奴子もふつてみた。今は年寄、年寄天と倒された。イヤスツスノス辨慶ダンベ。

○地瘤の天べんから、星の親父がつか抜けた。火事の卵子

をぐわらりとふんこほつた。でんじめ目玉の轡はづせ。
○天竺の、天竺の流砂川原の一つの石に下りて、供養なるもの。シンキナヤレ。

○参り来て、これのご門を見申せば、飛驒の内匠は建てたやら、扱も見事なご門かな。
(江刺郡)

伊勢坂節

○伊勢坂七坂八坂こ、のさーかー、十坂めにかんなをかけた上からせる。かんなもかんなりかなかけて上からせろー。

○足柄山の山奥で、蘆毛の駒の音がする。山師達さなりをつけていま戻る。
(岩手郡)

ゆりく節

○ゆりゆりと祝へ。おひかへあがれ歌ひませう。お着には三島の池の鯉鮒。

○これ程に祝ひ目出度いこともござるまい。白銀銚子に黄金の盃。

○十七は祝ひさし、盃に花が咲く。咲いたるや、黄金の花は七重咲く。
○此れ程に祝ひよろこぶこともござるまい。酒肴くとの菓子でもて出し。
○此の館は祝ひ屋作をめさる、妻を取る、あすが日にまご子を抱いて、よろこぶと。
(上閉伊郡)

ぜんざん節

○南から色よき鳥が一つがひ、錢をばくはへて金はこぶ。○つばくらが、けせん八ほうに巢をかけて、夜明ければ錢おせふけとさやづる。さやづる、さやづる聲のめでたさよ。
(九戸郡)

そんでこやー

○ひるねしてな、コレヤ、まだぎ来るのを夢に見て、ナツコラ、そんでこやー。
○そんでこがな、コレヤ、どこでうまれた聲がよい。ナツコラ、そんでこやー。

わくくと、てうなの音はからく。

(上閉伊郡)

やいらすり

○ヤーラ、来た、とんで来た。とーほーよーしもとんのかな、馬こもつもとんのかな、ぜねこもつもとんのかな。そばの皮もふがく、豆の皮もふがく、馬こも牛こもとんでこい。ぜねもかねもとんで来。百に米は一石、十文に酒は十ひさけ。
(上閉伊郡)

回向歌

新佛の家などに招かるれば通例之をうたふとぞ。
○まゐり来てこれの御だんを見申せば、千本そとばを立て、おかる、く。
○こひしき人の祝ひかな。見るより先になみだなるもの。
○死出の山如何なる長者のふみそめた。二度とかへらぬ死出の山道、く。
○七月は物のあはれの月なれば、野にも里にもあかし立つ

○奥のみ山せみの巢で、ナツコラ、そんでこやー。
○十七がな、コレヤ、おやにかくしてかねつけて、ナツコラ、そんでこやー。
○そんで子がな、コレヤ、雪の下から急けども。ナツコラ、そんでこやー。
○急けどもな。コレヤ、山をてらすがつ、じ花。ナツコラ、そんでこやー。
○まんさうがな、コレヤ、雪の下からいそくと。ナツコラ、そんでこやー。
(上閉伊郡)

仙北山

○せんほく山の中の澤から、縞の財布を見つけた、く。
おつとりあけて中を見たれや、黄金の玉は九つ、く、
一つをばお上へあけて、八つの長者よと呼ばれた、く。
呼ぶも呼んだし、よばれたし、旭の長者よとよばれた、く。
長者殿は京から下つて、瀬田のそり橋掛けやる、く。
せたのそり橋ふめやなる、く。大工柄だか、木がらか。てうなとかんなのかけ柄、く。かんなの音はず

青森縣 田搔歌 田植歌 盆踊歌

ものく。(氣仙郡)

地藏舞歌

○なにかかにか出さうだ、なにかかにか出さうだ。何舞と
かに舞と、地藏舞とはやさうな。地藏舞を見さえな、地
藏舞を見さえな。地藏々々よ地藏は尊だから、何して鼠
にかぢられべ。鼠こそ地藏よ。鼠こそ地藏なら、何して
猫に喰はれべ。猫こそ地藏よ。猫こそ地藏なら、何して
犬に負けべ。狼こそ地藏よ。狼こそ地藏なら、何して野
火にまかれべ。野火こそ地藏よ。野火こそ地藏なら、何
して水に消されべ。水こそ地藏よ。水こそ地藏なら、何
して人に飲まれべ。人こそ地藏よ。人こそ地藏なら、何
して地藏を拜むべ。地藏こそ地藏よ。地藏舞を見さえな、
地藏舞を見さえな。
(上閉伊郡)

青森縣

田搔歌

○あべ(め)であ、このま(馬)あ、なしろぢ(苗)かくに、の
けば柳のわかもえ、喰はせる。
(中津輕郡)

田植歌

○おひり持の、お女郎は、何の衣裳でまるられた。あいぞ
めの傘で、まるられる。からかさをつけて、もて(持)だ
せ、この殿御。
○アヤー、腰痛い、肩やめる。どこでこの腰休めう。あみ
だ佛を取りのけて、その下で休めう。
(三戸郡)

盆踊歌

○猿賀池の雑魚みなく(め)眇だ。みなも眇でないや、二三び
き眇だ。
(中津輕郡)

○心狭いな柳の葉だな。
○男だてより金より心。
(南津輕郡)

(南津輕郡)

稻刈歌

○ばいのこしや、ほはいく、まがだ。まがらねで、か
んだ。
(東津輕郡)

(三戸郡)

山歌

○アエデヤヤー、極樂は遠くないもの近いもの、この座
敷は極樂だ。
○アエデヤヤー、高杉の御倉奉行衆の前見れば、楯と斗掛
と算盤と、米はよい米上米で、俵二重俵あみかけて、眞
中五(ご)こ縦繩とし、倉の中へまき揃へ。
○ヤイデヤ、十五七や、澤をのほるに、笛ふけば、峯の小
松もみななびく。

○アエデヤ、十五七、十五になるから、山のほり、肩にま
さかり腰に鉈、澤をのほりにして小澤(こ)さ、薪揃へて、
これを見せたいや、わが親に。

○アエデヤ、目屋の澤目よ、中さはいれば、雑木の中(か)宣の中。
(東津輕郡)

青森縣 稻刈歌 山歌

○湯舟小屋敷とんとした澤こ。
○兎や好ぎだば、苦木もかぢる。
○高い山でも、のほればくだる。
○死んで祟るか、蛇(じ)になてのむか。
(北津輕郡)

○なにやとやら、なにやとなされの、なにやとやら。(上北郡)

○廿日鼠や五升樽ひきあけた。屋根さひきあけて、かゝみ
ぬいた。富士の山ね腰かけたごとく。

○國は中國其名もたかき、ヤトセー、國は中國その名
も高き。ヤトセー。

右は鱒ヶ澤甚句と稱し西北兩津輕郡地方に行はる、盆

○アイデヤヤー、高杉の、たてにおひたる梨の木は、枝はあまさぎ、葉が石田、花はひろさき、ひろくさく。實はぎぜんのごようにたつ。

雨鷺、石田、弘前共に地名なり。(中津輕郡)

○今年はじめて、山子にのほれば、山毛櫨と桂はみな女子、年々山子をよびよせる。

○ひとり子供に、山子をさせて、肩にまさかり、腰になた、前のどらんには、つほとかね。

○東小澤さ木をきりに、腹もすきたし、日もくれた。これを見せたい、わしや親父。(三戸郡)

よされ節

○さても上手な鷺鳥よ。どこで生れで聲が立つ。眞の深山の奥の山、笹の露のんで聲が立つ。ヨサレソーラヨンヤ。

○この屋敷に井戸掘りござる。井戸をほるのに水がわく、水のわく勢で黄金わく。その御亭主のよろこびだ。

ち栗毛に、こまがすぎ、前にまぐつ、手にたづな。そりそりりと、乗り出せあ七里長濱うたつ通る。ヨサレヨイヤ。

○帯をかる(買)には、幅よく丈長く、まはして、まる(止)どごあ牡丹の花、結んで下がるどごあ藤の花。ヨサレヨイヤ。(三戸郡)

○これは旦那のおまやから、三歳栗毛の聲の音はする。どごで生れで聲はよい。奥の深山の瀧の澤で生れで、瀧で打だれて聲がよい。聲は漸々と浪打聲、鷺小鳥は聲がよい。ヨサレヨイヤ。(各郡)

○二十日鼠は五升樽かついて、富士の山へ行つてひるねした。山猫来たかと夢に見だ。命限りに、向ういそぐ。ヨサレソーラヨンヤ。(中津輕郡)

○ヨサレヤ、こまけたの下駄の緒こあきれた。サーンヨー。

○ヨサレヤ、牛さ乗て山坂下りだ。サーンヨー。

○ヨサレヤ、お馬の手綱で日を暮らす。サーンヨー。

○ヨサレヤ、押して来い。其の手は食はぬ。サーンヨー。

○ヨサレヤ、牝馬さ乗て、今こ、通る。サーンヨー。(北津輕郡)

(北津輕郡)

○白き鷺あ宿もなし。梅の小枝を宿として、花の蕾を枕とし、落ちる木の葉を夜具として、朝に立つ時やないてたつ。ヨサレヨイヤ。

○さても珍らし、千石船は、舵はからかね、帆は小判、ぬりの柱に銀の綱、そこで船頭しゆはお釋迦さん。あとの漁士方はみな觀音。ヨサレヨイヤ。

○さても珍らし、伯樂のゆかた。肩に鹿毛駒膝栗毛。こん

山形縣

正月踊歌

是は昔より流行りて、今尚ほ豊年の翌年、陰曆正月十五日に、若き男等村内の各戸を祝ひ廻りて、舞ひ踊る時に歌ふものにて、其の舞踊にたい踊、大黒舞、雑魚すき舞の三つあり。今其のたい踊及び大黒舞の歌を左にか、ぐ。其の中意味の解し難き所と、歌詞の備らざるを覺ゆる所あれども、聞けるがま、に記しぬ。「
の中なるは舞人の歌ふ所なり。

四海波 たい踊

○「しがいなみしづかにて、くにをさむるおんいはひ、まづもつて、めでたうございます」は春初めは、まづもつて、「アエそこだぞ、アエおもせい」うーんそーで

山形縣 田植踊歌

かけで、眞鍮まねこやのはり、うづ、とけつころ、ぶつ飲い
やして、くれまえか、さうとめ。 (北村山郡)

それはや

○朝やはが、いちの水口みなぐちに蒔いたるもみは、あを青いは、あ
をいはのうらに、白銀の花が咲きそろふ。

(掛聲) お臺所、見てやれば、けいもみの、たはら、千も二
千もあるさうだ。みなく、なるまえものの、こはん
ぶんも、挽いでくれまいかや、早少女。 (北村山郡)

ただひけ

○たいひけく、ひかねば、な一ならぬ、し摺白たての立木が
折れるまで。

(掛聲) いま挽ぐは挽くと思たれば、ふじのやま、ねつ
こがへし、ころひぎ、ひぎつらがして、おがれまえ。
隣となりのはなたれさんこでもたのんで、ひいでくれまえか
や、早少女。 (北村山郡)

折れ松葉

○をれまづばな、よーじんぎ、はいを、おぎるどーおさん
こ、おさんこえ、おはんずれなやれな、このはいどもしよ
一、ながく、おさんこ、おさんこえー。

(掛聲) さつぎ五月時どぎなれば、じやうく、じやうは上ぐに
もつかれまえ。けーく、けーは下ぐなりとも、おの
れぎ名の木のおもたいで、どーすり、ばーすりと、つ
いでくれまいかや、早少女。 (北村山郡)

金山

○かねやま、あのかねなら、ごりよーえ、エー、まだごり
よーえ、よごまち、めぐやに、くれで、らぐさせうえ。
(掛聲) いんきよまへ、とーじゆまへ、がらつと、すま
つた。ほんまづがり、せんさんびやぐがり、どうぶ
しで、うゑでくれまいかや、早少女。 (北村山郡)

どよう節

○どよ此處こはしかも、かえだ街道うのはただに、てつほ揃をそる

へで、植ゑてたもれ。どよう、さん三ひやぐがり刈で、さん
ぜん千かつたのを、おもてに積んだら、見よがんべ。どよ
う、たんま玉のみ御ごし、をどりもすぞ、らいね年まるるぞ、
田たのかみ神。 (北村山郡)

晝どり

○それはや、今日のヤー、日は、ひるにや、まんまはるか
な。何をや養ん、にもすんべ。
それはや

○まづとたけと、たがいや、どんごころの、くきにた、ぬ
たけのご。 (北村山郡)

七つさがり

○今日のヤー、日はななづヤー、さんさがりでな、いだば
し、かけやれ。
それはや

新宅祝ひ

○いだばしは、がぐだらめぐに、かねそりの反はし橋かけやれ。
(北村山郡)

○こちのおんいへは、見もせば、黄金の柱で、すくみたで
たる、此このおん家。
それはや

二十五の年祝ひ

○にし西の、どんどと、ひひがしの、どんどと、どんどと
な一、あひのくねの、からんめ。
それはや

○西東の、おえだに、じふるぐさがり、ひひがしのナ一、
おえだにここのつ。
それはや

山形縣 惡魔はらひ 田植歌

○すめて、からめで、あはせて、みもせば、ちやうどにござるかな。にじふござ。

(北村山郡)

寺どり

それはや

○あれにござるは、お寺や、おほご、こわぎざしがめにつかば。

附記 今より凡百五十年前、本村大字泉郷の山入に、佐野と云ふもの一家を構へ、冬季になれば仕事なきを以て、岩に這ひたる木の根を取り、此の歌を謠ひ、貰ひ廻りしに始まれりと云ふ。

(北山村郡)

(口上) お免なされや。これの、おだんな様。あきの方から目出度いお田植が参た。

○(歌) 座敷では、エーおしやうがつ月の、としのはじめにナ、おじやしき見もせば、にぎわかや。コレデモマダヅイヤナ、そんでは、エーゑすだいいごくおだのかみどな、しつふく神がナ、舞ひこんだ。あがりはかをしつかりと、

○田植しまひのさなぶりと稱する時に唄ふが本體なれど、凡ての酒宴に踊と共に用ふ。

○ウンソーデハ、エーエーお正月の年の始のお座敷、身も千萬よ賑かな。

○ウンソーデハ、今日はひるにまはれども、小晝もちがおそい。

○ウンソーデハ、ここは街道のはたに、ヤ手つほそへて植ゑてくれ。

(北村山郡)

○餘り植ゑたれば、腰がやめさうらふ。御いとま申す、御亭主さま。

○堅田や餘り植ゑたれば、腰は痛み、皆々揃つて御暇申すぞ、御田の神。

○ハイ春の初めに初田植、それやまだいぞ、はえおもせ。

○ウンソーデハ、ハイ御正月の朝の寝起きに東を見れば、黄金まじりの霧がおす。

○けふの田植の田主どの、目出たきおん田にうゑなさる。腰をのさすにはたらきやれ。

山形縣 田植歌

二八六
○西の方から七福神が舟に寶を積みこんで、此家をさしてつきにけり。いろは倉とて、四十八残らず寶をつみこんで、御祝ひに酒の肴は何やらん。大鯛小鯛金頭御引き物には鯉なるぞ。身上は鯉のたき上り、上る身上はとめどない。ますく繁昌といはひます。

(北村山郡)

○いざや絲竹調を追うてく、波を鼓に拍子を揃へ、豊なる世の樂しさよ。

(最上郡)

惡魔はらひ

○牡丹より、いつそかはいは鼻のした。すぐすはやすき世渡りの角兵衛獅子。獅子はお家の惡魔をはらひ、めをと中よく子孫を榮え、金銀米錢くらにみち、みつるやうにと舞ひ納む。

(最上郡)

田植歌

○おーしやうがつ月はし、おーめでたーいーぞーなー、ごーのーはーひー。

○あーさーいー、はーかーのー、みーなーやくーちーにー、もーみせこくー、よーりよーたー。

○さーんーびやーくがーりーで、さーぜんかーりーてー、うらーにや、つーんーでー、みーたらばーなー、みーよーかーらう。

(最上郡)

○一本植ゑれば、千本になる街道端のはや早稲。はや早稲を、植ゑるときは、鎌を千挺揃へた。千挺ばかりは、ものでもないが、二千千挺揃へた。

(雜)「うゑろーく、どんどと、うゑろー、うゑろなけーれば、でーられの。」又「さがれくくくく。」トモ。

○宵田を植ゑてもどる時、袖に螢をつつんだ。(以下雜)

○えんぶりすりの大そんべゑ、隣の部屋まですりこんだ。

○雨はどんどと降れども霧れる、わたしやこころがいつはれる。

(西置賜郡)

○思ふ人と苗引くならば、一萬刈りも一ひきに。(東置賜郡)

○「さみだれに心もやすむ歌頭。詞」噂ちや今年上作年、「今年上作八重穂がござる。早稲も細葉も振袖、豊後(以上稲)家内繁昌と植ゑをさめ。(飽海郡)

草取歌

○田も陸も御覽じな。よめの手を取り、豆の草、サツサー、嫌はぬ、おしな、やたらになふる、サツサー、ささいこの濁り酒、渡場の舟だのんし。あちややれ、こちややれ、御客見かけて、こせ、こせとおか〜。(最上郡)

麥打歌

○兄子もさー、白地の手拭やめなされ。やみに千鳥は現れる。(最上郡)

麥搗歌

○奥のみ山の萩のごよー、トエ〜、せめてはなせば、

さぞたよ〜と。チヨエ〜。(最上郡)

盆踊歌

○酒田權兵衛のかーが鍋のつるまで飲んだとさえー。それがたんだいどーて、木割臺までのんだとさえー。

○盆が来た〜踊る衣裳持だねー。かがさ買つてけいちや、團七絞り。

○盆の十六日二度あるならば、裏の枯木實花が咲く。

○踊り踊らば板の間で踊れー。板の響きで鐘も大鼓もえらねさー。(北村山郡)

○柔かに見せてもそこは石狩の、これも上手な賣り言葉〜。これにますけはあらばこそ、夏から待ちた秋鱈の、夏から待ちた秋鱈の、甘いさかりのかもめらす、こらへかねたる、ことかえな。

○それもの語、片手に杖をついて、のの字の身ぶりではまぶ、あくといふ字を追つ拂ひ、忽ち泉がわきいで、其

名は延命酒と申す、屠蘇のきけんで千鳥足。テンツン〜榮えたるの物語。(最上郡)

左記の歌(近江八景より秋あ)は舊藩の頃に流行せしものにて、毎年盂蘭盆の時、踊に合せて唄はれたり。藩主の御覽あるにより、各町の若者連數十日前より競うて研究錬磨し、其技の巧拙を争ひたりと云ふ。(一)にて包みたるは舞子の謠ふものなり。

近江八景

○おもしろや、(みぎはをさして)花ちるくれの三井の鐘。御覽候へ、四方の景。はるか(またあれなる唐崎の)松は年ふる夜の雨、晴れてさやけき石山の(さざなみよするやばせの歸帆)月はこひちのかこち草、(堅田の雁のふみも見ず、積る思は比良の雪)深き思は(さては)春のもやう。

雷文七

山形縣 盆踊歌

○かりがね組の(つばさならべて)よしあしを(てしとき今の夕立)わけて難波の名も高き雲井につれて雁の(極意とあらば身がまるる。次は雷文七あとよりませ)ふみのたよりを待ち聲ならで(誰にもせよ御傳受とは、は、は)こ、ろこめたる枕のあやに、(天にもまとかあの雷や)いろかならべし梅櫻。(どつこえ)これも男のだてくらべ。

御代の恩澤

○武藏野の(ふしもあざやか)薄も鎗とかはる世の、榮え久しき日本橋、(はい賣り子でござんす)魚のにしきのかす〜は、山なき國の山なして(いきのよいのにちよえとしやれなんす)わたしのやうなるどだぶぐをかはんすおまへの氣がすめぬ。外に魚はないぢやない。(つえをわすれて早う〜)ゆたかな秋ぞたのしけれ。

關の戸

○關の戸ささぬみ代もゆたかに、行きくれてかゝる山路の

露わけて、杖を力にたどりつき、しばしたゝすみやすらへ(もしごあんなえ(女の聲にて案内とは)櫻木もくだけてみれば花もなし。花にもまさる佛や、(その深草のなりそめは、雪の寒さを厭ひなく)も、夜かよへとはそれやまた無理よ。なさけ知らずのにくらしや(さて心得ぬ櫻の有さま)かはる姿や墨染の、自在を得たるせい靈の、身はいろくのなりかたち、ひらりひらり、ひらひらひら、小松櫻や名ぞ高き。

なすび賣

○するがにも、はぢぬ清水(地名、茄)の初茄子、ゆめにうらなきふれ聲の、夢にうらなきふれごゑの、(なすあ〜)朝寝がらすの、かを〜とふじの高値に賣りしまひ、のんでもどりの小唄かけ。

豊年

○豊年な〜よろこび、みなの腹までみがいりて、よめにむすめのもちつきて、(ふけたぞ〜)ほねを二うすをらね

大きなおならをぶ〜ちらす。千兩箱やつこらさとかついて、しまはじやなるまい。おいとこそ〜だよ黄金の花さくことかいな。

秋あぢ賣

○(毎日しよびの小唄かけ)やはらかに(おやがつさん、あきあぢや来ましてごんす。)みせてもそこは石狩の、(これやことしの一番でごんすけ、いろのよいとごみさ、んであふといとご一本おかさんせ)これにますけはあらばこそ。夏から待ちたあきあぢの(がらめてあけます)夏から待ちてあきあぢの、うまいさかりのかもめらし(くん)こうらいかんねたことかいな。(最上郡)

中だち節

○(みつぎもやすき御代の恩澤)むさしの、薄も鑑とかはる代の榮え久しき日本橋(アエ〜)うろこでごんす)うをのにしきのかす〜にやまなき國の山なしに(聲のよいの)にちよえとしやれなんす)わたしのやうなるどたふく

ばならぬ。(ヨイ〜)これもかせぎのまうけもの(はやりで一つ踊りませう)今年ことしや〜よなほりひつじどし、田作岡作、チヨエトコレヤ、みいりよし。さ、ドツカナトカナで、チヨエトコノシヨ、ことしや〜よいとし穂に穂がさえて、ますであまりて、チヨエトコレヤ、みではかる。さ、ドツカエナトカナで、チヨエトコノシヨ、(とんとかへして男の子)あつばれをのこがでるわいな。

白酒賣

○すりばちをふせたやうなるふじ山に、みそひともじのできぬまに、(西行さんかはんせぬか)さつても珍らし〜)雪の白酒賣りに出る、びつくりするがのふじの山。

昔のぢいば

○むかし〜のそのむかし、ぢさまとばさまは、ゐたけとよ。おにはをはくとて豆ひとつ、拾うてよろこぶともしら、からりんころりんといりて、うまみのうすばたに、

に、かはんすおまへの氣がしれぬ。ほかにさかなはないぢやない。ゆたかなみよのめでたけれ。

○(ま、もてこたも今はたつくり)朝露につらぬきとめぬ玉川の、里にめでたきよいの嫁御、とんとみどりの柳蔭(うべ山風を嵐といふらん。ゆらかへりませう。こちらの人。布を搗くならてつだうてやらう。そんならてつだうてくださんすか。ふたり一所にさ〜搗かう。)つきだてのぬのなんぞつく。(つくつくしなもののめ)めうがうれしのもるかせぎ、やほなからすのめをとづれ、ねぐらにかへるゆふがすみ。(最上郡)

どーさ節

○(ほうねんのさくまつり)ほうねんのよろこびの皆の腹までみがいりて、嫁と娘の餅つきよ(ふけたぞ〜)骨を二白をらねばならぬ。(ヨイ〜)これもかせぎのもうけもの。(はやり節一つやりませう)今年、世直り穂に穂がさいて、ますであまりて、ちよえとコラ、みではかる。ササドツカナ、ドカナデチヨエトキメシヨ、あつばれこ

山形縣 盆踊歌

のこがでるわえな。
中だち節、どーさ節は維新前に流行りたるものにて、
今も老人等祝宴のをりに歌舞す。 (最上郡)

獅子踊歌

此歌は舊藩の頃孟蘭盆の時、獅子踊といひて、踊子七人(男子)、獅子の面に幕をつけたるを被り、腹に太鼓をつけて、踊る時にうたはる。傳へいふ、最上義光全盛の頃、豊年の際萩野村の奥小倉山にて、猪七疋出で、踊りたることありと。後戸澤公の時に至り、豊年の際、同處にて又猪出で、踊りたるを、村人見てこれに習ひ、踊り始めたものなりといふ。
舊藩の頃孟蘭盆の時、各町村より右獅子踊を出して藩主の覽に供せしが、萩野村のは本場なりとて七人して踊るも、他よりのは六人して踊るを例とせり。
○泉の池に黄金橋、おそれてみなが渡れしかども〜。
○まきの小枝にさはれども、さいた唐松庭のみごとよ、

○鸚鵡、くじやく、鶴のあまた舞ひあそぶ。五穀成就し、
かも遊ぶよ、池のみぎは。
○まゐりきて、あなたのやかたをながむれば、八むね作り、
はふは九つ〜。
○あひの風やらそよと吹く。今こそめじしあふぞうれしや〜。
○花になげぐさありがたや。まくふりあけて、宿のみやけに〜。
○日和よし。めでたきお庭にをどりきて、宿とて歸る、名残をしさよ〜。
○秋風にみすすだれふりあけて、萬の寶秋風をな〜。
○小倉山みねのもみぢをふみわけて、谷の牝獅子あそぶうれしや〜。
○まりとめじしは思へども及ばぬ中よ。ばらとほこれろ〜。
○花になげぐさ、ありがたや、まくふりあけて、みるやなげぐさ〜。
○花になげぐさ、なげぐさを袖につゝみて、なげぐさみる

〜。
○これほどの繁多のお庭をふりすて、宿とて歸る名残をしさよ〜。
○毬の小枝にさはれども、生いた唐松、庭のみごとよ〜。
○日和よし目出度きお庭に舞ひ遊ぶ、五穀成就鹿が遊ぶよ〜。
○秋風をみすだれふり上げて、萬の寶めづる秋風〜。
○小倉山峯の紅葉ふみ分けて、今こそめじしあふぞ嬉しき〜。

○嬉しさよそんでに包むなけ草を、いただきながら宿の土産に〜。
○日和よしめでたき庭にしかが遊ぶ。夜を庭の見事よ〜。
○ありがたや天の岩戸を出で給ふや。恐れながらもをどれ鹿共〜。
○結び合せた縁のつなを、思はん中よ解けてほこれよ、離れ易さよ〜。
○ありがたや給るかたになけ草を、いたゞきながら宿のみやけに〜。

山形縣 盆踊歌

○をどりまゐり、お國の御殿拜むれば、九重土の十重の白壁。
○をどりまゐり、お國のご殿拜むれば、よろづの寶お國十二郡。
○つる〜と上れし燈籠の面白や。恐れながら宙にかゝや〜。
○朝日さし夕日輝く大寺の、お釋迦のおん前寺後の極樂。
○参りきて、あなたのお寺拜むれば、しつりきたはし、りんの音する。
○お寺様前の榎に何がなる。南無阿彌陀佛の佛の字がなる。
○神明つくし立寄り見れば面白し。中の御堂で遊ぶかみ〜。
○つら〜といさごの庭をふみ散らし、まるるも我等〜。
○お寺さまおうへにめさる、けさころも、袖の光でおさは輝く。
○名主殿に如何なる月もまゐり來て、七百四方の名主めさる〜。
○秋風はめいしのすだれ吹きあけて、よろづの寶見せよ秋

風。

(最上郡)

○参り来て、これのうまやを見よもせば、桔梗刈萱かりま
ぜて、これのうまやは花で輝く。ウ、エ。

○参り来て、これの御門を見よもせば、白銀小綱を、足で
蹴たかと。ウ、エ。

○参り来て、これのやかたを見よもせば、兜巾す掛、ほ
らの貝、なけしにかけて置かつしやる。ウ、エ。(西置賜郡)

○廻れや、水車、おそく廻れや、せげばとどまる、く。

○かしましや鹿島林の轡虫、鳴を静めて、鈴の音を聞け、
く。

○松島の松にからまる葛、縁がなければ、はらりほごれ
る、く。

○十七八は小池のはたのまり草、一つ枕のとびやまとみ
る、く。

○沖のどん中に、ひよんだびよしぎ、われ等もみまん、ひ
よんだびよしぎ、く。

く。

○四國西國廻り来て、これの御庭に、投種を見る、く。

○つばくらは、常世の國から飛んで来る。羽さきそろへて、
かへしもどすや、く。

○四國しかんかよりの花、今こそはつそ、せげば名が立つ、
く。

(飽海郡)

豊年盆踊

○コヒカケ「うかべし舟にまちつまたれつ、青柳の」コヒ
カケ「今のはたしかに」風になびくや川岸のあなたこな
たにこぎわたし、あだな女のみなれざを、コヒカケ「こし
やくな女めどこから出た」「な、なんと」さして行くへは
白波の、とび立ち鳥の足もともに、こ、かしことみなれ
ざを、やみにたちまつむらさめの、コヒカケ「さういふ
こなたは」晴れてねぐらにいざよひの、月は雲間にてら
すらん。

○今朝の出がけに、ちよと一口えんぎ酒、そろくまはる
八百やちやう。又かどつけのをんな大夫。コヒカケ「モシ

○前やかご山、櫻山、花もちらくあそぶ獅子共、く。

○鳴神は雲のたわみにおとされて、心やらく、夕立召さ
る、く。

○向う小山の小百合の花、つほんで開いて、葉をば廣げて、
く。

○都からはまで連れたる牝獅子をば、何と尋ねて、尋ね逢
はばや、く。

○これの御庭に一群薄はなけれども、これの御庭に隠し置
かれた、く。

○隠し置かれた牝獅子をば、何とたづねる。尋ね逢はばや、
く。

○うれしやな風は霞を吹きあけて、今こそ牝獅子、逢ふぞ
うれしや、く。

○白銀を劔に作りて刃をつけて、牝獅子牝獅子の、あひを
切るもの、く。

○白鷺は我が子思へば立ちかねる。水を濁さず立てや白鷺、
く。

○濱に濱松、濱邊の千鳥、波にうたれて、ばんと立ち候、

およりなんせ「わしのなすみ」酒と肴で六百だせやきま
まよ。明のからすのつぐるまで、ほんにたかまのはらが
かいひえ、之もかぐらのかみをさめ。

○みのかさやコヒカケ「そなたはふみでござんす」なれし姿
やたをやかに、も、と櫻の色くらべ、聲をまちつにみめ
ぐりや、あふはうれしのもりならで、二た夜を契りあづ
まばし。

(最上郡)

紅葉狩

○コヒカケ「岩の紅葉に心うつりて、やすをりの酒にうか
る、こけむしろ、露のなさけの手枕を、ふかきちぎり
の色みぐさ。コヒカケ「てもじやうらふのおひとりは」か
らくれなるの色に誘はれ、うきなはたつたかはゆらし。
君にあふ夜はのるての紅葉。コヒカケ「さては」梢の秋の
からにしき、みだれ心の花かつら、姿はたぐひあらしふ
く、夜の間の露や染むらん。

(最上郡)

通常の盆踊謠

○あらや出た出た烏賊釣舟よ。烏賊も釣らずに寝る目も寝ねで。

○盆も過ぎたし、尾花も出たし、早く天神堂(村)の葦刈りたえ。(飽海郡)

古風の盆踊謠

○詞「高い役目は御免な蒙り、繁榮を鶴が岡へと羽をのせば、浮木の龜ヶ崎までも、「大夫御目見え、「えいと大入りや。「達摩大師の座禪車。「松も葉重ね。「これをなぞらへ八艘飛び。「竹渡。「東西この義も首尾よく浪の打ちわけ。皆様左右ヂヤ。「鵠の橋のたもとぞエー。「オットそこらでひかへ浪。「麻布晒す白妙の、「富士から三保の浦の浪。「花の手品の小波や、昔ながらの祝歌。

○「さても今晚申上げます、御好みの三國史、孔明が智に伸達が進みまする所。「過ぎし昔の故事に、「旗の數々に「ザツト靡かせ、「仕方話にやはらくや、嘘の手管の智恵比べ、智恵比べ「他「調の音の速かは、ハテー、「男のいなしやるのも謀計。「こゝ暫く息を入れまして、老萊子の昔噺に、御

政略に出でたるが如し。此謠其當時の作なりや否やは今攷ふべからず。(飽海郡)

稻刈歌

○「稻刈の早稲だ、結びをおく手づつ、年々變らぬ振袖女房、やたらに刈られる鎌刈の、「詞」船は槽でおし、筏は棹で押し、今の稻刈腰でおす。「民の籠も賑ひな、賑ひな。(飽海郡)

稻こぎ歌

○うらの小山の小笹竹、稻こぎだけに育つたよ。こいて米して、おんものなりに納めたてまつる。(最上郡)

稲摺歌

○すりうすや、ハドツコエ、すり白ひく手はいさましや。
○出羽の新庄の、「掛聲サー」さかさ川、淀の川瀬の水車、いつもどんどと、「掛聲サー」まるがよい。小石疊で波ま

山形縣 稻刈歌 稻こぎ歌 稲摺歌 米搗歌 餅搗歌

笑草に一寸一口。「戀には關の戸さしさへ、君が千歳の祝歌、おこる姿の長羽織。ヨイヨサ、サノエー。(飽海郡)

山車曳歌

○(甲)掛聲「ドートコドートコ、(乙)「ホエー、(甲)謠「さても目出度き世の壽よ、(乙)「ヨンヨエ、(甲)「鶴と龜との祝も永く、(乙)「ヨンヨエー、ヨンヤナー、ハリヤリヤ、コリヤリヤ、ヤツトセー、(甲)「君が御代こそ萬代の池、(乙)「ヨンヨエー、ヨンヤナー、(甲)「春は櫻の龍門が池、(乙)「ヨンヨエー、ヨンヤナー、ハリヤリヤ、コリヤリヤ、ハリーヤツトセー。

備考 此山車曳謠は酒田町鎮守縣社日枝神社の祭典に際し、山車を曳く者の謠ふ所にして、古より之を謠ひ續き謠ひ傳へて、今日に至れり。酒田祭典には年々二基を作り、之を曳き廻はすを例とす。其高さ共に五丈六丈、意匠製造殆んど半歳に彌れり。蓋し此祭典の型は豪農本間家の先代本間四郎三郎光丘の創制にかかり、多くの船舶を入港せしめ、以て全町の繁賑を期したる

くら。(掛聲コエ〜)

(最上郡)

米搗歌

○(ヨイチャコレササツサ)よしの白根はかはるとも、このや酒屋酒屋は、サツサ、かはるまえがかとん。

(一)中にあるは掛聲。

○此のやなー、サー、屋形はやー、サー、芽出たいなー。

○四つのなー、サー、隅からやー、サー、金が湧くー。

○出羽のなー、サー、新庄のやー、サー、さかさ川、金とな

ー、サー、し木はやー、サー、流れるる。

此地の川水北より南に向きて流る、故、さかさ川と稱せしならん。

○出羽のなー、サー、羽黒のやー、サー、突く鐘はー、突

いてなー、サー、放せばやー、サー、七日鳴るー。

○淀のなー、サー、川瀬のやー、サー、水車、いつもなー、

サー、どんく〜とやー、サー、なるわいなー。(最上郡)

餅搗歌

西置賜地方習俗に餅振舞といふあり。餅は何れの地方

にても歳末節句等に搗くが常なり。而かも地方習俗は一家の祝事あれば先づ餅をつく。(出産祝は赤飯なり)其他蠶餅と稱して、上籩又は收繭の都度々々、刈上餅とて秋收穫後、田植餅とて植仕舞に、節句年末は元より饗應事等必ず之を例とす。餅は生餅にて、納豆餅、小豆餅、雜煮餅、胡桃餅、青豆餅(大豆を水に浸し漉で上げて磨る之れをジندانといふ)となし、數種並びつくる。餅を搗くには立杵(笄形)と臺付臼(△形)を用ふ。數人の男女各立杵を執りて、臼の邊りに集り添ひ、嬉々として笑ひつつ一種の唄を唱ひ、拍子に連れて、交々杵をおろす。蓋し調子に誘はれたるときにのみ自然に發するものにして、必ず唱ふといふにはあらず。

○をばこ居たかやと流しの小窓から覗いて見た。をばこ心持池の端の蓮の上の溜り水。

○をばこ、なんほに、ならしやんす。この年送れば、十と七だ。十七河原の、雪ちる水が出て、渡りとまつた。(又をばこ流れた。)

孫子榮えて、ヨ一末繁昌。ドヨヤサ〜。

○つきをさめ、つきをさめ、うちはの如くにまんまろく、扇の如くにするひろく、かどめは一つで末繁昌。

○乗せかけた、乗せかけた、次なる石場サのせがけた。ドヤサ〜。かいつて中つかば、ヨ一、なんほかよかんべい。ドヤサ〜。(北村山郡)

○此の家御亭主は、目出たいな、アラ萬年榮えて目出たいな。

○舞ひこんだや〜、七福神が舞ひこんだ、萬のたからを持ち込んだ。

○のせかけたや〜、大黒柱にのせかけた。黄金の花は八重にさく。

○のほろぞや〜この家の身上はのほろぞ。これから末はなんほかよいかしら。

○あしわのど一は、どんつきで一、ひーだのた一くみは、と一梁で一おん立ちなされる一。こ一の一おんいへ一、

○をばこ、くるかやと田圃の小みちに、出て見たが、をばこ、きもせず、螢の虫こななどが、飛んで来る。其方
囉「アチャヤレ、コチャヤレ」は、輾轉して「ホチャモヤレ、コチャモヤレ」、又は「アツチャモヤレ、コツチャモヤレ」などもす。
備考 歌はをばこ節と呼び、古くより行はれ來り、餅搗唄として専ら謠ふものにはあらず。(西置賜郡)

○隣で餅つく、ないなよばない。コイチャ〜、こないからよばない、ことはかけない〜。(東置賜郡)

地搗歌

○しよもだ、しよもんだ、まはりづき、しよもんだ。ヨイヤサ〜、かいつで中つかば、ヨ一、なんほかよかんべい。ドヤサ〜。

○ふく神だ、ふく神だ。この家の旦那様福神だ。錢もちかねもち、室もち。ハドヤサドヤサ。

○福神だ、ふく神だ。この家の旦那様ふく神だ。命も永くやう一。

ヤレ一のーぢーおーな一がーく一、すーゑ一はーんじやう一。

○こ一と一しのと一しーは一、め一で一た一え一と一しで、ヤレ、こ一が一ね一のーは一な一は一、ハ一ハ一い一に一、さ一く一。

○こ一のーや一のーや一か一た一、め一で一た一い一や一か一た一、ヤレ、え一じり一も一や一ね一も一、ハ一み一なこ一が一ね一。

○舞ひ込んだ〜、ゑ一べ一す大黒舞ひ込んだ。俵をふんまいて、福まねぐ。ヨ一イハサツサ〜。

○目出度いな〜、このややかたは目出度いな、四つなる隅から、金が沸く。ヨ一イハサツサ〜。

○よいとこだ〜、こ一が角の善いとこだ。黄金の柱の、ソラ立つところ。ヨ一イハサツサ〜。

○取り付けや〜、村の若衆は取り付けや。

○目出たいなく、此の屋敷は目出たいなく。金銀のべて柱立て、鐵をのべて梁とかけ、白銀のべてさすとたて、錢をならべていすれかけ、こがねで屋根をふきのほ

○來ていちやく、こどもら、かみをゆうてくれよにな、三み日月がなりにゆうてくれる。ドヤサくくく。(最上郡)

○先づくく待つちやれ、根ね綱づなの衆。此こ石いしなんどつく時は、めつたむしやうにつえたとて、めろりくと、はいるまえ。是れは大事な、石いしちやぞえ、大大黒くろ柱はしらの持ち石で、且且那なが身でも突いたなら、づんぶりづほんと這い入るだらう、おれにつづいて、皆みな御ご座ざれ。

○(音頭)ヨイトコーナー(二同)ヨイトコーナー、ヨイサ、サツサ、くくくく。(音頭)根ね綱づながた聲こゑをかけて頼たのむぜい。(二同)ヨイトコーナー、ヨイトコーナー、ヨイサ、サツサ、くくくく。(音頭)根ね綱づな方かたにすやりほほ(横よこ著しやう)が見みえるぜい、(二同)ヨイトコーナー、ヨイトコーナー、ヨイヤサ、サツサ、くくくく。(以上掛か聲こゑ)先づくく待つちやれ。(二同)オイ(音頭)ここは根綱づなと相談だんだい。(二同)オイ(音頭)ここの石と申すれば、(二同)オイ(音頭)大大黒くろ柱はしらの立つ石で、減へ多た矢や鱗りんについたとて、(二同)オイ

(音頭)そんなにはいる石ちやない。(二同)オイ(音頭)おお且な様さまがついたなら、づんぶりづほんとはいるだらう。おおれにつづいてみなござれ。(二同)ヤンサノヤンサ、おん出でやれ。(音頭)おお且な様さまがおんでやれ。(二同)オイ(音頭)五ご十じゅう盃はい樽たるなど定ぢやうや出きべい。

○サテ胸むね突つのはじまりの、根ね原はらくはしくたづぬるに、抑おさ普ふ大おほむかし、國くに常じやう立たちのおん命みこと、御ご壽じゆ命めい百ひやく億いっ萬まん年ねんで、ツツイイ伊い弉さ諾だくの御代よとなり、神かみ代よは天神あまがみ七しち代よで、地ち神かみ五ご代よのはじまりに、天あま照てい御ご神かみいで給たまひ、それより五ご代よとすぎぬれば、イヨ人ひと皇みかどとはじまりて、神かみ武ぶ天てん皇みかどの御代よとなり、ならに都のたちし時とき、春はる日ひの御神かみいでたまひ、大おほ楠くすのぎの名木きを、一いっ丈ぢやう二に尺ぢやくに伐り卸し、イヨどうづきをかざられる。雲う出でのあしは四し本ほんだち、四し節せつを表したて給ひ、根ね綱づなの数は十二に本ほん、十じゅう二にの月を表したり。今いまは無けれど、いにしへは、あんこの綱づなとて五ご本ほんつき、まことに木き火か土ど金きん水すい、五ご色しきを表したて給ふ。ヨイくくヨイトサ。オシヤ、シヤノシヤントセ。ももとの綱づなの衆頼たのむぞえ。(西せい置ち賜み郡ぐん)

石搗歌

○鎌か田たかんちや、鍋なべのつる吞んだとや。喉のどは、けねいで、よく吞のんだぜい。あけれちや、ドン、あけれちや、ドン。○めでたくこの石いしつきよ。石いしは生き石萬まん代だい物ぶつよ。さて儲たくわけだしたく、此こ處ところの亭主しゆうしゆは心善ぜんく、働はたらき上手てで儲けだしたく。今いまはじめて、倉くらを建て、銀ぎんの柱に金のはり、黄わう金きんがやで屋根いもとを葺き、南なん開ひらきに錢せんすだれ、四しつの隅ぐみより金かが降る。東とう開ひらきに錢せんすだれ、錢せんの穴より旭あすさし、何なに處ところの大工だいこうが建てたやら、大だい工こうの爲めではありませぬ。此こ處ところの御亭ごてい主しゆうしゆは福の神、益えき々々身み上じやうあがります。○庄しやう内ない名な物なぶつナー、アハエー、庄しやう内ない名な物なぶつ寺てい田でん餅びやう、小こ真ま木き大だい根こん、民みん田でん茄か子し、外がい内ない島しま胡こ瓜かに。金きん峯ほうは糍だといふ。ヨーエートトナー、ハリヤリヤリヤリヤリ、ヨーエートトココ、ヨーエートトココナー、ヨエトコくく。(東とう田でん川がわ郡ぐん)

木遣歌

○けふいはなし、天あま氣きもよえし、(掛か聲こゑ)サー、ンニヤ、ン

ニヤヨー、日ひもよえし、吉きち日にち選せんんで、どんづぎだよい。(掛か聲こゑ)サー、ンニヤ、ンニヤヨー。)どんづぎのゆらいを、あけますよい。(掛か聲こゑ)サー、ンニヤ、ンニヤヨー。)どんづぎのはじまりはい、(掛か聲こゑ)この朝あさにはなしはじまらぬい。(掛か聲こゑ)大だい唐たうにてもはじまらぬい。(掛か聲こゑ)天てん竺てんのいない、そのてんのいない、(掛か聲こゑ)たいしやぐてんのいない、たつどぎよい、(掛か聲こゑ)ごんだがはの、ふもいどにい、(掛か聲こゑ)しらをとゆい木きは、これありさうらへど、(掛か聲こゑ)さでこの木きをねづりがへして、(掛か聲こゑ)いちぢやうにしやくにないきりはなし、(掛か聲こゑ)ながにたてたるないほんでんは、(掛か聲こゑ)たいしやぐてんとへうしたり。(掛か聲こゑ)じふろつほんのねづなはよ、(掛か聲こゑ)じふろぐらがんとないへうしたり。(掛か聲こゑ)しはうにくんだるよつわぐは、(掛か聲こゑ)してんのいぐみとへうしたり。(掛か聲こゑ)りやうのわぎのそのかんはい、(掛か聲こゑ)にづりん、ぐわづりんとへうしたり。(掛か聲こゑ)ながにたつたるどいづぎは、(掛か聲こゑ)くりからふどうとへうしたり。(掛か聲こゑ)どづぎのゆらいは、まだあれど、あんまりしやべるど、ばががめる。ここらで、ちやんと、きりぎりす。

山形縣 米とぎ歌 番樂舞歌

だれもどなだも、みなさまよ。腕元うでもど揃へておだのみだ。(掛聲)よーつぐなんえー、エンドゴナー〜サンヨ

○サーイヤ〜トナー、いづどーに、てびやうし揃へて、おだのみだー。ヤーはやしがなければ、しやべられぬー。けふーは〜どんづぎいはひのことなればー、さう〜そまつなことはしやべられのー。めでたいとごろでなー、これやもちまゑるー。おんいへのどんづぎのことなればー、七福神しづふぐんは、きぎつけるー。びしやもんでんはな、立先さきにたちー、九尺四方くしやぐしはうのしらぎのさんぼうをだしかけでー、大判小判おほばんこばんをなすぎなりやまにつみがさねー、御家旦那おんいへのだんなにとなー。祝儀大綱小綱おーだえこだえをもちきたり、六尺ろくしや酒踊ぐきだけをもちまゑてー、これはおんざのつぎてのぞーにおいはひだー。そのさけのんだるおんざのしゆう、いのづながらへまづだえちやうじやとなるわいなー。まだ文句もんくはほどながい。あまりしやべるはさにおそれー。こころでちやんときりおいてー、つぎなるいしばに

ひやま

三番叟

斯集

○おふさへ、こふさへ、かうつとまへて候。つとまへての御馳走に、うれしい事を申さうや、めでたい事を申さうや、めでたい事にとりては、久しい事を申さうや。ひさしい事にとりては、さきに舞ひたる翁のなり。只今舞ひたるは、さんばその事にて候。さきに舞ひたる翁の装束にもおとらんとして、とくさ色の狩衣に、はりひようが、うちたるしきの面取つて顔にあて、この處を、ひやくりようひやくたい、てんぢくまんざいあんのー、安穩そくさいにしつとりと、ふみ鎮めらうがその爲に、水天然のほんたて河原のみんなかみを、浄土のんほりと見てやれば、一だんのおもてには不動のじやうどー、二だんのおもてには、二王のじやうどー、三だんのおもてには、釋迦のじやうどー。それ釋迦のうへにめしたる袈裟、麻の衣はあいきやうは、羊の毛をもつて、おりたる綾のことなれば、心も詞もおよばれずして、それむかへをとるてつ

山形縣 ひやま

のせだならー、下手へだでもきやりなどしやべかけるー。つぎなるいしばにのせだなら、もどなるたづなにたづいて、おたのみまうしぞよー。チクナンエー、サンニョ〜。(北村山郡)

米とぎ歌

○つばくろが酒屋のはふに巢をかけた。夜あければ、よい酒出せとさへづるや。(最上郡)

番樂舞歌

○池の水江櫻影及枝
いけのみづみぎはのさくらかけせば、およばぬえだにかかるしらなみ。伊勢國かかるとらなみ。
○いせのくに、高天原たかまがはらにかみあそぶ。うたへばひらく、天あまのいはどに。
○おちよかひのみつめに、登のほりて、國見くにみれば、世界せかいはひろくくにはめだかき。
○ところみたてて、井戸堀ゐどほれば、水みづもでてくる、金かねもわきさうらふ〜。(最上郡)

ころもの袖、わがびんのひげに、ひつきおつくり、それししようつきとして、うつ太鼓も、うちさして、吹く笛もふきさして、きり〜と〜も打ちわらひ、その時われらのうれしさに、ほ、ら〜ほんと笑ひけり。それわれらが拍子と申するは、鹿島習かしまでならたはかしまん拍子、みしまでならたはみしまん拍子、三島上の拍子も、八拍子、しも下の拍子も、八拍子、あはせて十六拍子を、そるへて、そこもとしとんと、おつばへそ。

酒呑童子

○おんまへにまかり立ちたるつはものは、如何なるものと思召す。我は都にかくれなき、源の頼光源の頼光、渡邊の綱渡邊の綱にて候が、丹波の國大江山、酒呑童子をたいらけ、都鄙安全になすべきとの、君よりのせんじよにて、これまで來り候が、丹波の大江山をさして、いそがばやと存じ候。さう〜いそぎ候へば、大江山酒呑童子がいはやにもついで候。そなる女人は、何人やらおほせ候へ。かう前にたちたる女をば、いかなる女とおほしめす。われは都に

かくれなき、池田中納言はなごの姫にて候。ありし時、鬼神にさそはれて、まかりこれまで來り候が、それなきやくそんたち、これは鬼神の岩屋にて候程に、これよりさうくおんもどり候へ。かう前に候ものは、都にかくれなき源の頼光、渡邊の綱にて候が、ありし時鬼神にさそはれし姫共を、都にかへすその爲に、鬼神のありし處を語つて知らせうべし。難有や、それは真か。うれしさに、なごの儀ならば語るべし。ソレこの河上を上げ給ひて、見てやれば、瑠璃のくうでんに珠をたて、蔓をならべたて、おつぎすせつをまなふやら、ソレ鐵の門を立て、そのうちよくく見給へば、酒呑童子の有様は、色うす赤く、背は高く、かみかむろにおし亂れ、髪のおへはに、角がはえ、見ればなかなかおそろしや。ソラ身の毛も、よだつばかりなり。よくく忍び入り給へ。いとま申すぞ、さらばとて、おくをさしてぞかへりける。

備考 檜山は本郡吹浦村大字女鹿及び蕨岡村大字杉澤に行はるる舞曲にして、頗る古風を存し、鎌倉の田樂、

○「此の家に恵比須大黒ふりこんで、ふれやふれ「ふれやふりくる黄金に米、ふれや、ふり來る黄金に米。」

○「此の家に祝ひそなへし鶴と龜、まつと竹、松と竹との祝ひは久し、松と竹との祝ひはひさし。」

右は昔より祝宴の際、謠曲の次、俗謠の始にうたはる。(最上郡)

座敷歌

しやうぢらひ

○「しやうぢらひに、枝をいで、萬よき程、首尾もよき、朝おき、稼ぎ、油断なき、「辛抱よき世費のなき、「いつも家内は、むつまじき、これぞこの世に金なる。きみものたかな年なれや。」(最上郡)

お釋迦舞

○大千世界は(掛聲浮世ぢやな)みなをしへはわれならで(掛聲天にも地にもわれひとり、心の迷ひうちすぎで、悪といふ字をおつばらひ、(掛聲あらたなり)おしやかのばけは出たわえな。(掛聲サーサ拜ましやれ)あらあ

室町の申樂の流亞にして、能狂言の一種に屬すべきものなり。思ふに當地方人民の何れかより來住の際之を傳へたるものなるべし。惜哉傳誦の久しき漸次轉訛し不明の言語少からず。又脱落と覺しきもの多し。現今女鹿に傳ふるものは即ち、はんがく、さんばさう、かねふさ、かけきよ、しのぶの太郎、まつむかへ、田村、ほり河、みるでら、酒呑童子、しんた、わらびをり、猩々等の十三曲にして之を一々擧げんも煩はしければここにさんばさう、酒呑童子二曲を示すのみ。(飽海郡)

福は内

○「けに年徳やあきの方「福はうち鬼はそとへとはやす豆「まめでこそ「まめでつむなり、また年ひとつ、まめでつむなりまた年ひとつ。」

右の唄は當地方にて座敷唄といひて、祝儀の宴會等に於ては、必ず先以て座敷唄三つを歌ひ、然る後に諸種の俗謠を歌ふを常とす。(最上郡)

りがたや。(最上郡)

座頭舞

○(掛聲鍋の蓋も取り一方、風呂敷包も脊負ひ一方)それものがたり。(掛聲ゆふべおほき、これしきで御馳走なりました)片手に杖をついて、ののじのみぶりにまはる。(掛聲コイチヤ)よきこといふかどくくに、(掛聲アタエ)ハーンチンチン、榮えたるものがたり。(最上郡)

種蒔歌

○ザンクくくくと街道通る馬のナ、街道とほる馬のナ、すいの音きいたればノー、おらがおらが殿ごやと走りて、見たればノー、あれはそいでない。あれはよその殿ごだよ。ツエツトヤレ。○おらがおらが殿ごには、み印がござるしノー、こまは三歳、茸毛の駒でナ、眞鍮々々くらがさに、青がひ置いてだノー、五せんたばさみに、虎の皮のあをりだノー。

○大津々々三度かけに、ふみ馬ご免をノ、大文字でおい
てナ、今のくはやりのさいくぶしなどうたうてナ
ー、通る殿ごはおれはわしがとのごだの。ツエトヤレ
く。
(北村山郡)

桑摘歌

○一でかつこ花、二でかきつばた、三でさがりふち、四で
し、牡丹、五つい山の千本櫻、六つむらさき色よくそま
た、七つなんてん、八つ八重櫻、九つ小櫻のつらしをつ
けて、十でとのさまの思たやうにそまた。(北村山郡)

やすとこ

○ところは高砂の尾上の松も世をこめて、かゝる踊子「し
ら雪く、白雪やみなこがね。踊子「ヤストコ、ヤスト
コ「ヤストコヤストコナー。
○これのにさりとては、次第にのほるこのやかた、白き
踊子「ねずみはくねずみは金はこぶ。踊子「ヤストコ、
く「ヤストコヤストコナー。

○ふびす大黒うち出のは、うち出の小槌小袋は、うてば、
踊子「わきでるく「わき出るぜにとかね。踊子「ヤストコ
く、「ヤストコヤストコナー。

○松にからまるふぢの花色よく咲けば人もよる。又も踊子
「さきたやく、「咲きたやあの色に。踊子「ヤストコく、
「ヤストコヤストコナー。

○座しきに咲く花は、梅やら櫻、松と竹、つると、踊子「か
めとがく「かめとは舞ひあそぶ。踊子「ヤストコく、
「ヤストコヤストコナー。
(北村山郡)

せりふ

他人の歌をほめはやしていま一つと望む時にうたふ。
○正月、始めは、どぐのもち、二月、うのもち、三月
三日、雛の餅、四月八日、やぐしのもち、五月節句、菖
蒲餅、六月しては、いもむけ餅、七月七日、おぼとけ餅、
八月朔日、たのこの餅、九月九日、刈上餅、十月二
十日、ふびすの餅、うの餅、くの餅、すだみ餅、にがに
がしいや、とごの餅、ねつてかがるは、そばかい餅、
十萬餘騎の餅どもは、こごらが駒に打ちのりて、おすぎ

ぎつこすくり

がじやうに乗りだし、あづきのもち、まつこいと、ご
せをやぎ(立)白く、黒くは、人間の、しわざ、もとはお
なじ米にてさうらふ。関の聲をまんくとあけければ、
とぎのこ忍にも、おどろいて、庭のすみの、いとひけ納
豆太郎は、めをさまし、おれは誰だとおもふ。はたで豆
今は、庭の隅の、いとひけ納豆太郎とは我事なり。いと
ぎの鏡さつきときり、しろぎの胃、打ちかぶり、さーか
がれくと呼ばはれば、しろこの餅はとんで、その
つはもの逃さんと、とがあるにもないにも、やせばこそ、
八重十重に、繩をかけ、奥歯でおくしろ、前歯のまごす
け、舌の四郎兵衛を、うけどつたりと、喉の細道、おし
わけ、かいわけ、助腹さして、すとんくとおちにける、
まづひとつ所望。
○唯だ今諺つたるは、兄様だか、姉様だか知らねども、つ
一つとばかり、ほめて、しんぜませう、街道通る
は、おー奴、びんの髪は、にさんほん、しらみは、横縦
十文字、うらのせぎがは、はねるとて、かにはさまれ
で、いだえくとゆいとごろで、もーひとつしよまう

踊は手網又は笊を持ちて、裾を高くまくり上げ、雑魚
入を腰に着け、座中を廻りて、雑魚を捕る真似をなす。
○「あーきの方から、ぎつこすくりが、まゑたとや。雑し
てたんもれ、皆の衆よ。唯「シユツく「ゴーク、「どつ
から、すくうたらよつかるべー。あそからすくうたらよ
つかるべー、すつくり上げて見つたれば、がいろくだ(お
まじや)のぐんにやぐにやー。シユツーシユ、ゴーク、
どつからすくうたら、よつかるべー。あそから、すくう
たら、よつかるべー。すつくりあけて見つたれば、まぐ
だらむしのわさく。(種々食用とならざるもの網にかゝる
りたる歌を諺ひ、此) (まれ二三回行ひ、後に愈々雑魚の
の踊りの終りとす) (シユツく「ゴーク)よりすつくりあ
けてみれば返は前の如し)
或は、おほきなふなの、ばつたく、
或は、どんせうめがぬらう、
或は、かまぐらえびのこしまがり。
繰り返へし、
坐中の様に依
り、二三回雑魚
を捕り、蝦にて
終りとす。

山形縣 杓子舞歌

○是程の、御座に、何からかにならない程に、なんにもか
 んにもさしおいで、雑魚ざつこずく舞まいとも、囃はやしてたんもれ。
 これほーどの皆みな様さまよ、雑魚ざつこずく舞まいは、みーさいな。一
 番目ばんめの、かけどころ、どーこらほーどがよつかるしよ。
 こつこらほーどがよつかるしよ。しづごさんで、やつて
 みる。シンシゴーく、すつくりあけて見つたれば、か
 がるかがーつた奴やつこが、うれしいめめづぐ、ぐつちぐち。
 があるぐだー、ぐつちやぐちやー。こだなごんで、わが
 んない。これをしやんと打ちなけで、どこらほーどが、
 よつかしよ。ここらほーどが、よーかろしよ。ここらほ
 ーどが、よーがろしよ、しづごさんでやつて見る。シン
 シゴーく、すつくりあーけて見ーたれば、かがるかが
 ーつたやつこが、うれしい鎌倉かまくら蝦えびの腰こし曲まがり。これをちや
 んとをさめおぎ、三番目さんばんめの、かけどころ、どーこらほん
 どがよーかろしよ。ここらほーどがよつかるしよ。しづ
 ごさんでやつて見る。シンシ、ゴーく、すつくりあー
 けでみーたれば、かがるかがーつたやつこが、うれしい
 大鯛おほたけ、小鯛こたけ、めでたいものよ。千秋せんしゅう萬歳ばんざい、とこころも繁昌はんじやう、

且那様も御繁昌、めでたいものを、且那様に、納めます。
 (北山村郡)

杓子舞歌

○なにがらまへは見さいな、なにがらまへは見さえな。な
 にがらなにがら、おつとりおいてさしおいて、あふみのく
 にの、せんまが、たらうが、杓しやく子こきざみの、名人めいじんよ。し
 やぐしきざみの道具たぐいには、のみにかんなに、やれがんな、
 くりくがんなに、そりがんな、七尋ななひろもとつ(荷繩まの)を、ひ
 つからがつて、八尋やひろもとつで引つちよーた。そりりく
 とでーかけだ。一の坂さかもよいとごな、二の坂さかもよいとご
 な、三の坂さかのさがくで、腰こしをちやんと休やすめだ。しやぐ
 しぎをながめだ。みねに立つたる、木きのの名ななら、かたに立
 つたるかしから、さはに立つたるさはふさぎ、ぶつづく
 なつたる樨ひなぎくのぎもところちやんとはなして、うらこち
 やんとはなして、杓しやく木こも澤山たくさんよ。三年三月十九日と
 て、杓しやく子こ三本さんぽんきざんだ。三本の杓しやく子こを七尋ななひろもとつでひつ
 ちよーた。八尋やひろもとつで引つちよーた。そりりく
 とでかけだ。杓しやく子こくと、ふれたれば、まちやぐかると

岡崎女郎衆

○岡崎女郎衆、岡崎女郎衆にや宿かすな。疊かさねも切れる
 し、五器ごきや禿かぶける。
 (西置賜郡)

をばこ節

○をばこ居ゐだかやーとー、なんがしの、さまこーがら
 覗のぞてみーだー。アーヲバコデく。をばこ居ゐもせーで
 ー、隣となりのー婆はなは々々さーがいとーうーみだー。アーヲバコデ
 く。いとほーなーにーいと、かはいをどこのゆぎばー
 かまー。
 ○をばこなんほにならしやんす。此の年暮としくらしせば、をばこ十
 七じゅうしちだ。十七、河原かはらの雪ゆきつる、水みづ(雪融ゆきと)がでて、をばこ
 止とどまどさー。
 ○をばこなんほになる。此の年暮としくらしせば、花はなの十七じゅうしちだ。ヲバ
 コデく。
 (北山村郡)

○をばこあなんほになる。此の年こえれば花の十七よ。

山形縣 岡崎女郎衆 をばこ節

て、杓しやく子こ一本いっぽんとられた。二本にほんの杓しやく子こを七尋ななひろもとつで、ひ
 つからがつて、八尋やひろもとつでひつちよーた。杓しやく子こしやぐ
 しとふれたれば、彌次やぢどの、ぶちめが、わいくわいと
 吠わいて鳴なぐ。これがこれにいくいふつめだ。犬いぬのこまなが
 (頭かぶ)ひんもけるか、杓しやく子このこまながひんもけるか、先まづ
 一ひつやつて見る。いぬのこまながひんもけないで、しや
 ぐしのこまながひんもけだ。一本いっぽんの杓しやく子こを、七尋ななひろもとつ
 でひつからがつて、八尋やひろもとつで引つちよーた。杓しやく子こく
 とふれたれば、長者ちやうぢやう殿どの、お女郎おやうらうめが、杓しやく子こ買かはうと云いふ
 ほどに、なんほにはかーはれべ。十六文じゅうろくもんにまけないか。
 ほたな(な)ごんでは賣うられない。二十四文にじゅうしもんに買かうてな
 だ。さらばさつとされまける。二十四文にじゅうしもんの錢ぜにを腰こしに、ち
 やんとはさんで、餅屋もちやに行くか、蕎麥屋そばやにゆくか、田樂でんがく
 屋やにゆくか、とんと案あじだした、酒屋さかやがよがべ。二十四
 文にじゅうしもんの錢ぜにで、しづごーいれで、つわりづつと皆飲みなのんだ。あま
 り酔よつてしかなかない。あまりまたよつちちやな。千秋せんしゅう
 萬歳ばんざい、處ところも繁昌はんじやう、且那様ぢなさまも御繁昌ごはんじやう、杓しやく子こ舞まいもこればか
 り。
 (北山村郡)

○をばこあなほになる。この年おくれれば花の十七よ。十七をばこならなせまだ花こでも咲かなえけな。咲くは咲けども、山吹のよでみがならぬ。

○をばこなんほになる。此年送れば花の十七。十七をばこでなげに、花が咲かないな。咲けば實もなる。日かけのもみぢ色つかぬ。
(最上郡)

○をばこ来るかやと、たんほのはづれ迄出て見たば、をばこ来もせず、螢の蟲むすこなど飛んで来る。

○をばこ、なほになる。此年くらすと十七よ。十七八になて、花の咲く盛だが、なして咲かぬ。
(東田川郡)

鎌倉節

○本町二丁目の、ナヨイコノナ、本町二丁目の絲屋の娘、姉は二十一、ナヨイコノナ、姉は二十一妹は二十、妹ほしさに、ナヨイコノナ、妹ほしさに御りよ願かけた。御伊勢七度、ナヨイコノナ、お伊勢七度熊野へ三度、芝の愛宕山へ、ナソレヤ月参りナ。

おんりのみりやち

○くさとりともはなつむな、詞「かもく〜と〜」ごらんすな。詞「こつな〜やたらになびく〜」みごとなり。詞「よめのとをとるまめのくさ。」サツサ。

○ざえごのーみんごりさけやわたしばーのふねだ。ノンヤレ。スツチャヤレコツチャヤレ。詞「おきやくみかけ〜て、こせ〜と〜」。
(最上郡)

あがらしやれ節 (一名大澤節)

○あがらしやれ、ねなや、お前そーけだや、お前上らねば氣がすめぬ。

○雁も白鳥も可愛い鳥が御座ねよ。わたしやめごい鳥、お酌とり。

○大澤三千石のたくなえぢやなえども、(掛聲コエチャ)夜飯夜中で、ナ〜とどこまる。

○此の家座敷は目出たい座敷よ。(掛聲コエチャ)鶴と龜とは舞ひ遊ぶ。アレヤノメ〜。
(最上郡)

○かまくらの、ナヨイコノ、御所のお庭にはに庄屋さんの〜、ヤレコノ庄屋さんの娘がしやくに出た。しやくに出たそ。ナヨイコノ、さかなよりよい酒よりも、ヤレコノ庄屋さんのむすめは目についた。目にもつかうや。ナヨイコノつれてゆかんせ、イヨどこまでも。女おんなは他生の縁ぢやもの、えんぢや、ソヂヤものな。よいこだの。たとへ野の末、イヨ山のおく、どんな辛苦しんくもいとやせぬ。
(最上郡)

○鎌倉の御所のお庭に、庄屋さんの娘がしやくに出た。香より酒よりも、庄屋さんの娘が目についた。目につかば、つれて行かんせ、どこ迄も、女は他生の縁ぢやもの、たとへ野の末、山の奥、どんな辛苦も厭やせぬ。
(西置賜郡)

このや

○此の屋やに祝をひ供へし鶴と龜、(詞)鶴と龜、松と竹との齡よはは久し。
(最上郡)

まつかせる

○豊かなる世のことぶき、春のマツカセロ、花のさきての梅香る、花の咲きての櫻かをる。
(東田川郡)

いざやまぎ

○「いざや、絲竹調べを追うて〜、詞「その浪は」浪も鼓も拍子を揃へ、豊かなる世の樂しさよ。」

○「此家に恵びす大黒舞ひ込んで、詞「ふれやふれ」ふれやふれ、ふる黄金に米はふれやふれ、ふる黄金に米は〜。」

○「此家に祝ひ供へし鶴と龜、詞「其松は」松と竹との齡は久し〜。」

○ゆんべ見た夢目出度い夢よ、目出度い夢よ。月も月も月を枕に、朝日を抱いて、金の盃取ると見た。

○蹴と鎌はうちづの小槌、ふればふるほど我が身のとくぢや。後にたまるは靱俵。

○流れ清川身はかり川よ。かかる藤島まくのうち、さしぞ

盃おさいくぢ。
○春野には、もみでそだしろ夏の草、秋はほーよくこどほくみよる。
(最上郡)

○いざや絲竹、しらべの手、しらべの手拍子をそろへ、豊かなる代のたのしさよ。
(東田川郡)

○いざや絲竹調を逐うて、波も鼓も拍子を揃へて、豊かなる世の樂しさよ。

○頃は三月白帆が見ゆる。前は天黒、中恵比壽丸、後は萬の寶船。
(飽海郡)

よしあし節

○よしあしに分けて難波の名も高き、雲井につれて豊なれや。國の民草先づ是ならで、見ても美事に咲く花は、これも力の出しどころ。
(東田川郡)

長き夜節

い。六日の日に取りに行つたば、そんな無理な山刀借りたことない。七日の日に取りに行つたば、何にもせぬ、山刀借りたことない。八日の日に取りに行つたば、そんなやつもない(埒もない)の轉訛)山刀いつ借りたこともない。九日の日に取りに行つたば、そんな苦情な山刀借りたこともない。十日の日に取りに行つたば、そんな山刀とんと借りたことない。隣の鈍左商門にとぅく山刀取られたんの物語。
(飽海郡)

備考 これは郷方宴席に於て、よく語らる。

遊摺部歌

○遊摺部の、遊摺部の沼だよ。鴨は九つ鵜は七つ。
遊摺部歌は同村にて古へより大宴會の終りに儀式として必ず之を唄つて散す。同村は五十三年前最上川の南岸丸沼の近傍にありしが、河流の變化により全村今の地に移る。傳へ云ふ、其地元大なる沼ありて、常に鴨九羽鵜七羽游泳せしを、館主武藤氏鴨一つ射たるに大蛇浮び出で、之を啣へて水中に入る、怒濤狂瀾見る

山形縣 遊摺部歌 鱈捕口説 烏賊捕口説 湯治歌

○ながきよのく、とおのねふりのみなめざめ波のり舟の音のよきかな。下から讀んでも、ながきよのとのおのねふりのみなめざめ波のり舟の音のよきかな。
(東田川郡)

どーさ節

○やはらかに、見せてのそこは石狩の。是もじやうずな賣り言葉。夏から待ちた秋味の、うまいさかりのかもめらし、往來かねたる事かえな。

○福は内、鬼は外なる梅の風、何を願うても、かなふ福助は、これくその事かえな。
(東田川郡)

物語

○物語かたり候。めでたいものは芋の種、孫子澤山末廣く、ばつばつと榮えたんの物語。

○物語かたり候。隣の鈍左衛門へ、山刀一挺貸したんの物語。三日目に取りに行つたば、そんな山刀見たこともない。四日目に取りに行つたば、用もない山刀借りた事ない。五日の日に取りに行つたば、いつ山刀借りたことな

く沼淺せたりと。此歌は、即ち其當時のものなりと云ふ。
(飽海郡)

鱈捕口説

○花のヤーレ、花の飛鳥名所の名寄せ、上に鳥海景色見の名所。コレサ若者、押せや押せ押せ、しよすくり(地)までも、押せば鱈場も近くなる。おがみおしやく(地)を山立てて、繩をば入れずあけられず。見れば風は間の風(西北)真帆の風よ。おつとち(地)八幡大菩薩有難や。
(飽海郡)

烏賊捕口説

○勵む、サーイ、勵むくと烏賊釣商賣。今日は好い風、日の入り御座る。勝浦、法木の島船、小船、浦の真船の出鼻を見れば、姐も婢も皆乗り出して、船をおし押しにまき(舟出)の先に、おせなおせなとさふかせ通れば、風も好いしかまつを通れば、せじた宵鳥賊、せがらし宵鳥賊、ながせ、ながさき流れて通れば、風は南風で下り帆が早い。おしやく沖から錨を下す。波も靜で眼すりく

箕鞋はづす。空のすんばり荒崎沖よ。明星出づれば船足遅い。遅い船足たのしり沖よ。是でなるまい楫をかきく。おとぢをはづす。おとぢはづせば法木の前よ。ちかく。明の鴉の鳴く聲聞けば、首尾好い首尾好いと島中に告げる。内の婆様達早目を覺ます。にまにつきたる子供のはても、遊ぶひまなく大漁御繁昌で暮らす。ヤーレ。

(飽海郡)

湯治歌

向えの小山の崖の躑躅、八重か一重か霧島か。サンヨサンヨ。羽黒蔵川御瀧前の不動よ。サンヨサンヨ。(飽海郡)

石川縣

田打歌

前田の一羽の鳥、どこにとまろや、森がない。(鳳至郡)

田植歌

けさの下りはかに、なに苗を植ゑませう。かんぞの苗か、早稲苗か。あの藏の下積か。
鎌倉殿さへ馬から下りて、手水使うて、白玉珠數を手にかけて、をがまし給へし早少女衆。
世の中に目出度いものは、そばのたね、花咲きみだれて、其後は、みかどと、なりてみがる。
戀しき物の櫛い物、五月の霜に秋の雨、西の方なる降り景色、花ひよきて止め置かう。(石川郡)

苗々と呼ぶ聲は、山々越えて鹿の聲。(離)カッコ。

あさはかに、ひきだす駒はなんの駒。葦毛か、かけか、すみの黒。

あさはかに、植ゑたる早稲はなんの早稲。はひろの早稲で、倉のした。

苗々と呼ぶるをせいに腰を延す。とのまがめくれれば腰も延せん。

あがりはかには、親子もない。植ゑてあげやら。

しろかきは、ひろまをまつ。舟のりは、白帆をあげて風をまつ。

晝まより風の風が寒ければ、ヤーノ、小袖をかさねぎや。

田あるじが庭へ舟つけて、三年酒を、ヤーノ、あけてすすましょや。

田あるじが脇の稻によに、ヤーノ、もぐろが生えかかる。

しも晝ま田あるじの御方がめしもりそろへ、ヤーノ、柳の折箸や。

おぜんまち、やりかけてござれ、ヤーノ、耻はかかせまい。

田あるじがきとは、何きどや。ヤーノ、柳の折きどや。

日のくれに濱べをすれば、ましなき千鳥、ヤーノ、聲をそ

ろへ鳴く。

日も七つ、鐘つけお小僧、ヤーノ、植ゑあがりべし。

田あるじの娘が、どれがそや。白えのこてで、白笠で、ヤーノ、さやのまるごきや。

あこやが谷の茶の木原、茶の實がならで、ヤーノ、櫃の實がなつた。

石動の御前が前のかざりもの、針、くし、けぬき、ヤーノ、紅ぢや、おしろいや。

時鳥たつた一聲思はせぶりに、義理に鳴いたか時鳥。

思ひ立てれば富士の山、立ててくづせば何も無い。

たにしの秤をほしや。互に信實かけくらべ。(羽咋郡)

書間やら、たちうどは騒ぐ。お上様飯盛り添へて、イヤ、柳折り箸。

あがりばか親子もいらん。イヤ植ゑて上げよ。

ひでるとも笠著て御座れ。火の宮の小笹の露は雨となる。

太郎次が娘は何れがそや。真ん中程の白笠で、白い籠手、でさやの丸。

○苗々と呼ぶるる聲が山越えて、また山越えて鹿のこゑ。
○向ひの山に光るもな何ぢやいな。黄金の蟲か、螢の蟲か、今くる嫁の松明か。今來る嫁のたいまつならば、さしあけてともせ。瘦男や。ヨシタイ〜。

○朝はかに、引き出す、ハ、駒は何駒や、葦毛か、鹿毛か。すみの黒、すみのくろ。

○わたりだに、植ゑたる、早稲は何早稲や。葉廣の早稲か。
○朝はかに、植ゑだす早稲は何早稲や。はびろの早稲や、イヤナ、おくらのしたづみや。
(鹿島郡)

○あがれというてかはづごなる。太郎次の耳へは、はいらんか、〜。

○太郎次の耳へは、はいりてをれど、ただひとつとも、うゑたさに、〜。

○田植のときは親も子もないわいや。ざんざと植ゑて、でるがよい、〜。

○向ひの山に火が見える。いま來る嫁のたいまつか、〜。
○一念歸命の二葉の苗を、阿彌陀の體に植ゑまいか。

て、船を害ふな。
○日がくれて、庭に摺る靱小山だけ、あらしや庭の靱摺らずに米になればヨイ。

○しんくしや、そだてた親こそ親なれか、笹の葉の露ほども、育てん親のしよじんしよか。

○松蟲が、イヤ〜こがれ〜なく聲。おれも若い時や〜、こがれ〜聲をして來た。イヤ〜。

○早稲刈りてや、てにかかる。鍛冶屋様、鎌を揃へたか、鍛冶屋様。エ〜百挺の鎌を揃へたかえの！

○おじよ七の、生れた其年は、八穂で八合する。三把の稲に五斗五升ヤ〜。

○烏めが、イヤ〜、松の小枝に巢をかけてて、鷹にけをとされ、とがなの〜松をうらめる。イヤ〜。

○烏めが、イヤ〜、崖山かたやまかやりて、死なうとした。しのよ

り、いきやうというて、がけやまよそに、見てたつ。イヤ〜。

○森本の森も、林も、よけれども、森はさみしや、かけない森ヤ〜。

○阿彌陀の體と植るこでにおいて、他力の水をあてまいか。
○他力の水をあてごてにおいて、自力の草をとるまいか。
○自力の草を取上げてにおいて、菩薩の米を取るまいか。
(鳳至郡)

草取歌

○草の三ばん取りや嫁出そ〜と、苗をこきあけて、へをたてにおいて、早稲のでがほに見て笑ふ。
○おまへはくろの木、おら松の木、たより梨の木、氣はもめぢ。
(鹿島郡)

田切歌

○たんほへ、かいくて〜、たてば〜、うむにさかだ〜るつ〜けた〜よな〜。
(羽咋郡)

靱摺歌

○烏めが松の小枝に巢をくんで、鷹に蹴落され、罪ない風をうらんどる。

○船頭さま。なぎがよいとて船出すな。俄かうち風もまれ

○この里にや、おいと、つらいと二つある、おいは田の草、つらいは、こけすり(餘裕な)ヤ〜。

○石動いずるきの、紅屋の店の飾りもの、針はりや、はさみや、毛抜きけぬきや、紅や、おしろい。ヤ〜。

○石動の、紅屋のせどの茶の木もり、茶のみ、ならず、よ〜ない櫃かの〜實かなる。イヤ〜。

○石動の、紅屋のおせどの泉水に、がんや、かもがぞろ〜と、あれを引きあけて、今くる嫁の香に。ヤ〜。

○石動はきいて極樂、見てぢごく、前は大河、うしろは、しけしい松原。イヤ〜。

○しまひの白や、白に神樂をあけてくれ。

○ざんざと、あられの降るは見立在所の米かいな。

○追々お馬が七つ、金の長持廿五枚。

○根どりが元や。一つ頼むよ、さし木から。

○いちこくさんど〜、イヤ、庭のしまひが〜、おそ〜ござ〜る、イヤ、に〜はのしまひが〜おそ〜ござ〜る〜。
○代官たいくわんさま〜。もみよらし、ヤレ、イヤ〜、でたこめ〜、ヤ〜でた、こ〜め〜、ヤ〜も〜みのなから〜出たこ〜

石川縣 粉挽歌 石搗歌 木遣歌 祝儀歌
めやー。
(羽咋郡)

三二八

○庭のしまひはおそごさる。百姓の庭によなべせんもの鶏
ぢやー。

○百姓の庭はいつもどん／＼なるがよい。

○ことは世が善くて穂に穂がさがる。五束三把に五斗三
升。

○心に似せて狭いこといふな。田植しまひて、はいるまい
か。はりまは名所で田所ぢや。
(鳳至郡)

粉挽歌

○麥はひくとも小麥はいやぞ。小麥の八度びきや、お千代
にひかして、しなめり／＼。
(羽咋郡)

○てこ白ひいたり、粉をふるうたり。前だれかけても、お
尻はかくせん。オツソレサ。
(鳳至郡)

石搗歌

○世の中に目出度い者は大根種。ヨイ／＼、花咲く、實が
なる、俵なる。アーイーヨイトコナー。
(羽咋郡)

○殿様上よりおくだりやら、馬も嘶く、轡鳴る、鴨も立つ。
油火掻き立てて、吳座引き立てて、待つやれ。
○鳥めが谷の出水に影を見る。重い戀にもやつれ、色が黒
いかいな。
○荒白に荒なはしかけて嫁を待つ。嫁に磨らせうな、今く
る嫁に磨らせうな。

○高松七窪に松植ゑて、雨の降る時やあまはらし、ひでら
ば殿の涼みどこ。

○おじよしちは、せどのせん水へ茶の水くみに、あいの風
はそよ／＼吹けば、小袖のおつまを吹きあける、ヤーレ、
ふきあけるいな、／＼。
(鹿島郡)

○きーさの白は出るに、おいるにはかがい／＼。

○臼するうたはのほる、おあいる、おいかける。

○百姓の庭に、よなべせんもんな鶏。

○竹うす、木うす、中にほさつがいらつしやるー。

木遣歌

○芽出度いものは、そばのたね。タネリーリヤターネータ、
花咲く實なる、みかどたつ。アーエトコナーヤイト。

○このどうつきはまつの木ぢや。ソリヤ、松の木ぢや。松
は末代するはんじよ。アラエートコナー。

○わしね此のやのせんたえはしら、ソリヤ、はーしら、やう
ちやこけてもわしやこけぬ。アラエートコナ。
(羽咋郡)

祝儀歌

○おらがおせどの三がい松に、一つ枝には銀なる、二の
枝には金なる、三の枝には白お米がなり下る。松の緑
に鶴がすむ。松の本には龜がすむ。下から龜がまひ上る、
上から鶴がまひ下る。鶴と龜との舞ひ遊び。
(鳳至郡)

島根縣

苗取歌

○ヤーレーナー、水になるとや、富田の水。富田の若い衆
の化粧の水。

○ヤーレーナー、石になるとや、富田の石。富田の若い衆
の飛び石に。

○ヤーレーナー、杵築大社の五葉の松は何處に。元は三崎
に、葉は宇龍に。

○ヤーレ、きづきたかはまーをはねこえて、ヤーレ出雲こ
戀大社へしやおほやしろー。

○ヤーレ、米になるとや、とだこめに。ヤーレ富田
のわかいしゆーのめしごめに。

○ヤーレ、たかいナ、山からナ、木をだいて、ヤーレ
ふねにナつくりてーろでおへて。

○(前)ヤーレーナー、伊勢の雀が奈良へ出て、(後)ヤーレー

ナー、奈良の長押に巢をかけた。

○(前)ヤーレーナー、杵築大夫さんは器用な人、(後)ヤーレーナー、足に足拍子、手に太鼓。

○ヤレこちのよめごさんはどこそだち。ヤレ稻のおらほののぎそだち。

○ヤレ杵築の千家さんの五葉の松、ヤレ枝はみさきに葉は宇龍に。(能義郡)

○苗は皆取る、蝗どのは、どこで宿るか、蝗どの奴は。

○杵築高濱はねこえて、出雲戀しや大社。

○ヨイナガ、縄手走る小女房、長い髪をさばいて。

○ヨイナガ、長い髪がたわんだ、實が入るとて。

○ヨイナガ、せどにほいたる小麥は、昨日かるや、今日刈るか。

○米になりとや、富田米に。とだは名所で米所。

○石になりとや、とだ石に。富田の若衆の擔い石に。

○空で歌かく筆の軸、し竹、かん竹、からの竹。

○ヤレ、紅葉山の小蕨、ヤレ、つめどかごにたまらん。

○(上旬)ヤレこちの嫁御さんは何處育ち。(下旬)稻のうらほののぎ育ち。

○(上旬)ヤレきづき高濱をはねこえて、(下旬)ヤレ出雲戀しや大やしろ。

○(上旬)ヤレきづき太夫さんはきよな人、(下旬)ヤレ足ぢや足拍子、手ぢや太鼓。

○(上旬)ヤレ伊勢の雀が奈良へ出て、(下旬)ヤレ奈良のなけしに巢をかけて。

○(上旬)ヤレ米になりたや、富田米に、(下旬)ヤレ富田の若い衆のめし米に。

○(上旬)ヤレ水になりたや、富田水に、(下旬)ヤレ富田の若い衆の化粧水に。

○(上旬)ヤレ石になりたや、富田石に、(下旬)ヤレ富田の若い衆のこぶ石に。

○(上旬)ヤレ竹になりたや、富田竹に、(下旬)ヤレ富田の若い衆の笛竹に。

備考 上の句と下の句と、二紙に分れて、かけ合に歌ふなり。(仁多郡)

○ヤレ、これのナ、嫁子さんは何處そだち、ヤレ、稻のおらほののぎ育ち。

○杵築千家さまの五葉の松はどこに。枝は御崎に、葉は宇龍に。

○ヤンレーナー、伊勢の雀が奈良へ出て、奈良の長押に巢をかける。

○ヤーレ、杵築ナ、なごへ出て布さらし、さらし布こそ白ござる。

○ヤーレ、そこな山からナ、木を出いで、ヤレ、舟つくつて、ろでおいて。(大原郡)

○なんでござりや、淀の川瀬のナー、ヨイヤ水車。

○(上旬)ヤレなはてはしる小女房、(下旬)ヤレながいかみをさばいて。

○(上旬)ヤレ高山のつららを、(下旬)ヤレふけやおろせやつららを。

○(上旬)もみぢ山の小わらび、(下旬)ヤレつめどかごにたまらん。

○(さげ)にはとりは夜の何時に囀るか。(五月女)夜の九つにさへづる。

○(さげ)にはとりは十二の卵を産み揃へ、(五月女)諸國の寶をかきよせる。

○(さげ)けさうたうた鳥の聲はよき鳥の聲や、(五月女)この田には千石といはれ。

○(さげ)すがらすがまだ夜をこめて西へ立つ。(五月女)西にも森があるよ。

○(おろし)けさとうのすがらすは露にこのれての、うらうらとないて立つ、露にこそ。

○朝聲をならしにならせ、聲ならせ。ならさぬ聲はねごる。

○(おろし)あさまのほどはの、ねさらしきものや。

○朝おきて細戸をあけて見渡せば、黄金にまさる朝日。

○(おろし)唐紙障子を細戸にあけての、殿御招かうや細戸。旭さす日向の里で野芹摘む、大事な姫に笠を。

○(おろし)せまい小路で傘を、さし上げて通れからかさを。

○(おろし)させせからかさを、人にかすな傘を。

○改る年は若水で種をつけて、まかばや今朝の卯の刻。
 ○(おろし)あさまの種をば、けさもまたとや。
 ○大山の御山へ登る門出でに、朝垢離とりてお宮上り。
 ○(おろし)あさごりとらうより精進さんせよ。精進さんせよなら、今朝も精進。

○大山のお山、高さ見渡せば、雲うちかけてかくし。
 ○大山のふもとの寺のはねつるべ、水つりあけてかける。
 ○大山お山の宮で湯だてする、湯花の初穂参らせる。
 ○大山のお宮の樂を何とうつ。お宮のがくは八つとうつ。
 ○大山のお宮の中のかざりには、しめはりなほせ、宮の。
 ○大山のお寺でかねをつく。家中のものが目を覺ます。
 ○大山のお寺をめぐるには、七條のけさをなげかけ。
 ○大山のあけすの箱に何がある。八萬八聲のお經。
 ○大山の彌山の寺の其内で、萬部のお經もよまれ。
 ○大山のこならのまきの葉のかずは、七千三百八葉ござる。
 ○(おろし)大山お山のこならの木をば、をりかけこや、こなら。
 ○大山の岩根を傳うて出る清水、空うちはれて涼し。

○朝霧にまいこめられて鳴く鹿は、行きがたなうて野にすむ。
 ○(おろし)朝ぎりの山は、きりははれやかな。
 ○夜はあける、日りん様はどうなさる。さて行きなさる西へ。
 ○大山の神山様のおまつりに、しめ張りなほせ神山。
 ○大山の北山かけのすけのもと、なびかばなびけ、すけのもと。

○大山の北山かけでかるすけは、ほさばや天のかけほし。
 ○大山の裏町店で縫ふ笠は、早少女笠にたいこ。
 ○(おろし)早少女さんにきせるとて、大山笠にたいこだいたぞ、大山。
 ○(かつま)大山笠に、あやの緒。
 ○おなり様、生れはどこと尋ねれば、峠のさきの米子。
 ○おなり様、そだちはどこと尋ねれば、鴨越のそだち。
 ○おなり様、御名何とたづねれば、織姫様とおほえ。
 ○おなり様、としなんほと尋ねれば、子の年生れの十七。
 ○おなり様、汲んだる清水でかけ見れば、さもやつれたわ

がみ。

○おなり様、みどりの髪をとく時に、あをばのくしで八つととく。

○(おろし)長い髪には手ぐしを入れて、なげかけてとく手ぐす。

○おなり様、金なる盥に湯をとりて影みれば、さもさんするなわがみ。

○(おろし)化粧せうかと殿御にきけば、化粧せよとの御意だ。

○おなり様、迎への馬の足どりは、しんどうくと面白い。

○おなり様、迎への馬は何馬か。名馬の駒で迎へ。
 ○おなり様、門まで馬で迎へたが、もんより内は徒歩で。
 ○(おろし)おなり様、ヤラ來はなされたが、來はなされたが、椽に腰。

○おなり様、御倉のかぎを受取つて、白米倉の戸をあけ。
 ○おなり様、ひるまの米を取り出し、小櫛に小とほではかる。

○おなり様、ひるまの米をとぐ時は、あやなるたすきなける。

かけ。

○おなり様、ひるまの米をときあけて、七釜飯をたきあけ。
 ○(おろし)ひるまのやさいには何を買ひよせうか。何をかひよせうにはわかめ、わかめはよいもの、野菜に。

○(さげ)けさの戸を、ヤーレー、ほそ戸にーあーけーてーみわーたーせーばーよー、(五月女)サー見わたーせーばー

ー、ヤーレ、こがねーにーまーさーる朝日。
 ○(頭)ヤーレ杵築太夫さんは、ヨイサー、きーよな人(さげ)ヤーレ足でナー足調子ナー、手で太鼓。

以下囃畧す。
 ○杵築高濱はね越えて、出雲戀しや大社。
 ○こちの嫁子さんは何處育ち、稻のうらほののぎ育ち。
 ○伊勢の雀が奈良へ出て、奈良のなけしに巢をかけた。
 ○米になりたうや、富田米に、富田の若い衆の飯米に。
 ○水になりたうや、富田水に。富田の若い衆の化粧水に。
 ○高い山のつづらに、ひげやおろせやつづらを。
 ○しなひ竹がたわんだ、實がいとてたわんだ。
 ○なはて走る小女房、長い髪をさばいて。

- そらの山から木を出いで、舟を造りて艚こいでこいで。
- けふは日もよし風かぜもよし、ござれ出ませう、おごさ舟。
- おごさ舟には何を積む。綾や錦や絲物を。
- ならぬなけしに巢をかけて、如何なる大名も目の下に。
- 十七八なる小娘が、立つぞくるく梓の絲。
- 鶏は夜の何時にさやづるか。夜の九つにさやづる。
- 鶏は鳥類なれど時を知る、十二の時をうたふ。
- 鶏は十二の卵をうみそへ、よろづの寶かきよせる。
- 夜の國にさやづるならば、あけの人目をさます。
- 時はうつ、けさ明あけもつに巢がらす、さもうらくくと鳴いてたつ。
- 今朝とうの、すがらすが露によほぬれての、うらくと鳴いて立つ。
- 朝霧にまいこめられてさも鹿が、行きかたなくてこね。
- 朝とうよ、濱邊を行けば千鳥なく、なほ鳴け千鳥。
- けさの戸をほそ戸にあけて見渡せば、黄金にまさる朝日。
- 朝聲をならしにならせ、聲ならせ。ならさぬ聲は寐聲だ。
- 苗代の下葉の苗を求めて、はたなめては下へ。

- 植ゑて見よ、苗代かやは小町の物やれ。うすうに小苗によく植ゑ。
- 苗代の三角にみせしめかざり、三角に神の御座るやら。
- 苗代の三角の神の種祭、あまたの社家のあつまり。三角の神は五穀を守る。
- 苗代の澄みゆく水に舟浮べて、雀をのせては遊ぶ。
- 苗代の小雀が白い米をくはへて、御藏に一寸入れるや、白い米。
- 天竺のまこもが池にまこも立つ、まこもでなうて柳立つ。
- 苗代柳かや、もとを揃へて葉のつゞには、枝さす本を揃へ。
- この苗をもみあけて、苗のこいなごの、どこどこにやりやろにや、苗のこいなごの、苗のこいなご、丹後のしまに。
- 苗代のほとりに小麥こほいたよな、けにこほいたよな、ゆすりこほいたよな。何と小麥は挽かすとだんごに。

(邑智郡)

- ならしに、ならず、聲ならし。ならさぬ聲は、ね聲なり。
- 朝起きて、たぬしがはらを、見渡せば、器量きりょうよい姉が髪をとく。
- 朝起きて、細戸に明けて、見わたせば、黄金こがねにまさる、あさ日さす。
- 岩國の十露盤橋を渡るには、白足袋はいて奈良草履で。
- 朝方の種蒔きは、今朝も蒔いたやうな。
- 新玉の年の始にたねまきて、よろづたからかきとり。
- 田の神のうぶゆの水はどこの水か。大和の國のけしやう水。
- 田の神がどこからござるやら。西の宮やら。
- 新玉の年若水にたねつけて、蒔かば今朝の卵の刻に。
- 天竺の笠縫町の笠縫が、早少女笠を縫ひくたす。
- 天竺のまこもが池にまこもたつ。まこもたらいで柳がたつ。
- 濱田の橋の、ヨ一下を見れば、ア一鯉かや、鮒かや、ナ一はえのこか。
- 朝起きて、ヤ一レ、細戸にあけて庭見れば、こがねの露

- 朝起きて、ヤ一レ、年若水に種つけて、まかばや今朝の夜の刻に。
- 朝起きて、ヤ一レ、清水寺の鐘つけば、都のとのが目をさます。
- 田の神は、ヤ一レ、どちらからござる。西の宮、葦毛の駒にたづなかけ。
- けふの、ヤ一レ、さゝらの竹はどここの竹。大和の國のさんほ竹。
- 朝起きて、ヤ一レ、香茸敷をながむれば、彌山の霧が晴れてゆく。
- 尊さよ。ヤ一レ、
- (れり)此世の初出神の、ノ一サ、出神の、ヤ一レ、伊弉諾公がめし給ふ。
- (かけ)伊弉諾公は又有難い神、ヤ一レ、人間の生れくる伊弉册のお蔭よ。
- (れり)有難や。ヤ一レ、天上山に登られる、ノ一サ、登られる。ヤ一レ、五穀の種を求め来る。

- (かけ)天上山に行き、神のえん聞けばナ、廿五の菩薩が五穀種となされた。
- (ねり)五穀の種を求めては、ノーサ、求めては、ヤール、諸人のもの、命ずり。
- (かけ)五穀の種をば我等も求めた。ヤレうれし尊とや、五穀の種を求めた。
- (おろし)ヤールうれしや、五穀の種を求めた。
- (ねり)年若水を求めては、ノーサ、求めては、ヤール、萬の種をかし給ふ。
- (ねり)種蒔く時はいつだやろ、ノーサ、いつだやろ。ヤール、春三月の中旬に。
- (ねり)天照御神様の御利益は、ノーサ、御利益は、ヤール、今取る苗も五穀なり。
- (かけ)ほとり苗をようにとれ、ほとり苗こーそナ、千石のもみがるなる、ほとり苗にこーそな。
- (おろし)ヤールよう取れ、苗こそみをならすに。(避摩郡)

田植歌

- (さげ)田の神の、ヤール、ちちつけのおぼは何人か、ヤール、何人か、ヤール、(少女)何人か。ヤール、りゆう宮界、ごんかいのこの姫。
- (さげ)田の神の、ヤール、産衣を裁つには、何と裁つか、ヤール、何と裁つか、ヤール、(少女)何と裁つか。ヤール、七度くらべて、一度裁つ。
- (さげ)田の神の、ヤール、おほえの水はどこ清水、ヤール、どこ清水、ヤール、(少女)どこ清水。ヤール、山城の國の岩清水。
- (さげ)田の神の、ヤール、おほえの水を汲む人は、ヤール、汲む人は、ヤール、(少女)汲む人は、ヤール、鎌倉様の若君だ。
- (さげ)田の神の、ヤール、おほえの釜は何釜か、ヤール、何釜か、ヤール、(少女)何釜か。ヤール、金銀小釜の羽釜なり。
- (さげ)田の神の、ヤール、湯上げの小袖は何小袖、ヤール、何小袖、ヤール、(少女)何小袖。ヤール、錦の表にもみの裏。

- 田植の際さけと稱するもの早少女の前に立ち、大鼓をた、き拍子を揃へて歌をうたひ、早少女亦下た歌(即ち返歌)をうたひつつ田を植ゑしも、近年農事改良法の普及と共に、彼のサゲを廢せしより、田植に歌はるゝことは漸次衰へたり。されど下級民間の宴席にては尙ほ此歌を以て興を助くるもの多し。
- (さげ)天竺の、ヤール、高まの原に神あーらば、ヤール、神あーらば、ヤール、(少女)神あーらば、ヤール、田の神様の父御なり。
 - (さげ)天竺の、ヤール、まーこもが池に主あらば、ヤール、主あらば、ヤール、(少女)主あらば、ヤール、田の神様の母御なり。
 - (さげ)田の神の、ヤール、田成りし神は何月か、ヤール、何月か、ヤール、(少女)何月か。ヤール、正三月の中の月。
 - (さげ)田の神の、ヤール、生れし月はいく月か、ヤール、いく月か、ヤール、(少女)幾月か。ヤール、十月に足いて生れ来る。

- (さげ)田の神の、ヤール、産衣をへるには何ほへる、ヤール、何ほへる、ヤール、(少女)何ほへる。ヤール、十よめの糸を八尋へる。
- (さげ)田の神の、ヤール、産衣を織るには誰家内、ヤール、誰家内、ヤール、(少女)誰家内。ヤール、鎌倉様の母御なり。
- (さげ)田の神の、ヤール、産衣の色は何色か、ヤール、何色か、ヤール、(少女)何色か。ヤール、濃紫に模様つけ。
- (さげ)田の神の、ヤール、産衣の紋は何紋か、ヤール、何紋か、ヤール、(少女)何紋か。ヤール、六角丸に鷹の羽。
- (さげ)田の神の、ヤール、産衣を縫ふには誰が縫ふ、ヤール、誰が縫ふ、ヤール、(少女)誰が縫ふ。ヤール、鎌倉様の乙の姫。
- (さげ)田の神の、ヤール、産衣の袖は何袖か、ヤール、何袖か、ヤール、(少女)何袖か。ヤール、綾や錦をはぎ合はせ。
- (さげ)田の神の、ヤール、迎へる逢は何逢か、ヤール、

何窪か、ヤール、(少女)何窪か。ヤール、三島の窪の眞中へ。

○(さげ)鶏が、ヤール、夜の九つにはらはらと、ヤール、はらはらと、ヤール、(少女)はらはらと、ヤール、夜の九つに歌ひだす。

○(さげ)天竺の、ヤール、高まの原に晝ねして、ヤール、晝寢して、ヤール、(少女)晝ねして、ヤール、戀ひし殿御を夢に見る。

○(さげ)日は七つ、ヤール、鴨の子が三羽西へたつ、ヤール、(少女)西へ立つ。ヤール、西にもゆけがあらばこそ。

○(さげ)京へ、京へ登ると一て、京では何を習うた。 (少女)やーらやーすの手習ぞ。それをなーらふ。

○(さげ)大河の中の瀬には、ちこか文を落いた。 (少女)やな置け、やな置けと、やーなに文。

○(さげ)日が暮れた。おんばうす、(少女)鐘をごとつーきやーれ。

○(さげ)澄み澄み谷川、(少女)とこの子にぶー飲ませう。

○(さげ)ちん龜殿、ちん龜殿。前の川をわーたる時、腰

○(上)田の神の、ヤール、産著を裁つには何と裁つ、ヤール、(下)何と裁つ。ヤール、七度比べて一度裁つ。

○(上)田の神の、ヤール、苧を蒔く時は何時か、ヤール、(下)何時か。ヤール、正九つの丑の時。

○(上)戀しくば、ヤール、尋ねておじやれ、米子まで、ヤール、(下)米子の町のまん中へ。

○(上)米子から、ヤール、大山様までなんほあるか、ヤール、(下)なんほあるか。ヤール、三六道の五里ござる。

○(上)田の神の、ヤール、産著の衣を縫ふ時にや、ヤール、(下)縫ふ時にや、ヤール、たりはり揃へて縮け合はせ。

○(上)田の神の、ヤール、産著を裁つには何と裁つ、ヤール、(下)何を裁つ。ヤール、紅扇をさしかけて。

○(上)田の神の、ヤール、乳つけの乳母は何處の乳母か、ヤール、(下)何處乳母か。ヤール、りゆうぐんかいの乙姫。

○(上)田の神の、ヤール、産著の小袖はなんほある、ヤール、(下)なんほある。ヤール、白もく小袖が七重ね。

の巾着落いたが、拾はせんかや、ちん龜やー。(少女)拾はんぞー、拾はんぞー。拾はせんぞや、ちん龜はー。

○(上)田の神の、ヤール、生まれし月は幾月か、ヤール、幾月か、ヤール、(下)幾月か。ヤール、正月三日の注連の内。

○(上)田の神の、ヤール、産湯の鹽は、何鹽、ヤール、(下)何鹽。ヤール、白銀黄金の接ぎ鹽。

○(上)田の神の、ヤール、産湯の手桶は何手桶か、ヤール、(下)何手桶か。ヤール、桶樽に八つ輪かけ。

○(上)田の神の、ヤール、産湯の柄杓は何柄杓、ヤール、(下)何柄杓。ヤール、飛驒の工の曲け柄杓。

○(上)田の神の、ヤール、取上げ婆々は何婆か、ヤール、(下)何婆々か。ヤール、正八幡の母御なり。

○(上)田の神の、ヤール、いすぎの水は何水か、ヤール、(下)何水か。ヤール、大和の國の石清水。

○(上)田の神の、ヤール、産湯の釜は何釜か、ヤール、(下)何釜か。ヤール、田舎の明神えり釜。

○(上)田の神の、ヤール、産著の紐は何紐か、ヤール、(下)何紐か。ヤール、綾や錦の縵の紐。

○(上)田の神の、ヤール、生れを問へば陸奥の國、ヤール、(下)陸奥の國、ヤール、せんさら山のささ育ち。

○(上)田の神を、ヤール、迎へる駒は何駒か、ヤール、(下)何駒か。ヤール、葦毛の駒に手綱をかけて。

○(上)田の神の、ヤール、迎ひの駒が横入らば、ヤール、(下)横入らば、ヤール、綱引き戻せ、すなやかに。

○(上)田の神を、ヤール、迎へては來たが、何處へおろす、ヤール、(下)何處へおろす。ヤール、横へ道の田の中へ。

○(上)思ふとも、ヤール、色には出すな、燕子花、ヤール、(下)燕子花。ヤール、思はぬふりで思ひます。

○(上)鶏が、ヤール、夜の九つにはらはらと、ヤール、(下)はらはらと、ヤール、我が君さまの目を覚ます。

○(上)大山の、ヤール、籠にござるは撥釣瓶、ヤール、(下)はね釣瓶、ヤール、水汲み上げて垢離取る。

○(上)天竺の、ヤール、高天が原に晝寢して、ヤール、(下)天竺の、ヤール、高天が原に晝寢して、ヤール、

- (下)晝寝して、ヤール、東の殿御夢に見る。
- (上)今日の、ヤール、田主の屋形はどれ屋形、ヤールく、
- (下)どれ屋形。ヤール、八つ棟作り檜皮葺き。
- (上)今日の、ヤール、田主の旦那はどれ様か、ヤール
- く、(下)どれ様か。ヤール、朱鞆の大小に編笠で。
- (上)今日の、ヤール、田主の嫁ごさんはどれ様か、ヤール
- レ、(下)どれ様か。ヤール、かき帷子に襦子の帯。
- (上)紅を、ヤール、青葉に包んで隠せども、ヤールく、
- (下)隠せども、ヤール、色よき花であらはる、。
- (上)長柄の銚子に澄んだ御酒入れてな、(下)田主にまる
- らせうや。先は祝ひ。
- (上)扇の翳より竹の翳こそな、(下)涼し好かるや竹の翳。
- (上)千石舟の船人衆の夜の寝言には、(下)しもく八つに
- 鉢七つ、金が五兩。
- (上)苗代の隅々に立つた木は何の木、(下)何の木。樅の
- 木、五葉の松。
- (上)たあらいさま(田の神の名)は田作りやれ。私や布織る
- ぞな。(下)似寄うた夫婦だの。ヤたあらい。

- (上)京でも大阪でも鍛冶は多けれどな、(下)みじかまう
- に前をかける鍛冶は稀な。
- (上)お書まの峠で笠をわすれたよな。(下)笠はよい笠枯
- 梗笠。
- (上)今日の田の田友達は、名残り惜しい友達。(下)洗ひ
- の川でこそ文をまるらす。
- (上)洗ひをば何處だ。(下)前とほる川だ。
- (上)江の川を渡るとき、天鷲絨の巾着落いたが、拾ひは
- せぬかや、つん龜は。(下)拾はんど、拾はんど、假令江
- の川が逆しに流れうとも、拾ひはせんぞや、つん龜は。
- 大山の、ヤール、横手の空で舞ふ霧は、ヤール、まふ霧
- は、ヤール、まふきりは、ヤール、米子において雨となる。
- 横田では、ヤール、船通山のとがの木は、ヤール、梅の
- 木は、ヤール、梅の木は、ヤール、三がの國へかけをさ
- す。
- (音頭)日は七つ、ヤール、小鴨が三羽、西へたつ、ヤール
- レ、西へたつ、ヤール、(下)た西へたつ。ヤール、西に
- も小池があらばこそ。
- (音頭)十七が、ヤール、手に鍵もちてどの藏へ、ヤール、

どの藏へ、ヤール、(下)たどの藏へ、ヤール、白米藏の戸を開く。

- (音頭)白鷺が、ヤール、羽うちそろへてまふ時は、ヤール
- レ、まふ時は、ヤール、(下)たまふ時は、ヤール、五ぢ
- よ一の塔は、目の下に。
- (音頭)鶯が、ヤール、梅の木小枝に巢をかけて、ヤール、
- 巢をかけて、ヤール、(下)た巢をかけて、ヤール、花咲
- け咲けと、三度さへづる。
- (音頭)朝起きて、ヤール、細戸にあって待ちをれば、ヤール
- レ、待ちをれば、ヤール、(下)た待ちをれば、ヤール、
- 黄金にまさる朝日さす。
- (音頭)鎌倉の、ヤール、御所どの庭の杉檜の木、ヤール、
- 杉檜の木、ヤール、(下)た杉檜の木、ヤール、黄金の葛
- がまひあがる。
- (音頭)吾殿は、ヤール、鞍馬の山へ年ごもり、ヤール、
- 年ごもり、ヤール、(下)た年ごもり、ヤール、御福をも
- らうてけさ歸る。
- (音頭)横田の、ヤール、船通寺山の樅の木は、ヤール、

もみの木は、ヤール、(下)たもみの木は、ヤール、伯耆の國までかけをさす。

- (音頭)お書まんまは出来たさうなが、お汁の實は何やら。
- (下)た路のはたのわかめよし、それがお汁。
- (音頭)梅の木の下で、又まりをほんどけつたらな、(下)た
- 梅はばらり落ちるなり、まりは空に。
- (音頭)婚殿の今度の馬はどこへ又つないだ。(下)た峯越
- し谷越しさがり藤に。
- (音頭)婚殿のござる路に、板の橋かけうか。(下)た板の
- 橋はとんぐりく金の橋。
- 大山の、ヤールみせんにしむる桐の箱、ヤール桐の箱、ヤール
- 桐の箱、ヤール、千兩や萬兩や御經の箱。
- 七つから、ヤール西山、ヤール見ればおそろしや、ヤールおそ
- ろしや。アールねちれんさまの、ヤールお宿へ。
- 大山の地藏堂は、ひーはだぶきの、こがねのたるきはひ
- はだ。
- ひがくれた。おばうじのよ。やまのはなにかゝるぞ。
- 婚さんのござる道に、板の橋を架けやれ。板の橋はどん

島根縣 田植歌

どらどん、金の橋をかけやれ。
○あさまとのこ鳥は露にしよんほり濡れてな、うらうらと
鳴いてたつ、露にしよんほり。

○(太鼓打)あさとーね、ヤレ、しよーとくのかみを、お
るすねは、ヤレ、(植方)おるすねは、ヤレ、三ばの
なへを手にもちて。ナ。

○(太鼓打)田の神を、ヤレ、むかへるおんまは、なーに
うまか、ヤレ、なーに馬か、ヤレ。(植方)なーにう
まか。ヤレ、あしほのこまーに、たづなよーりかけて。
ナ。

○(太鼓打)大山の、ヤレ、おやまへ、のほるかどでに、
ヤレ、かどでに、ヤレ、(植方)あさごーりとる、ヤ
レ、しよーじがはーで。ナ。

○(太鼓打)山のなかで田つくれば、おもしろいナーもの。
ヤレ、(植方)さるがさ、らすーれやー、たぬきたい
こ。

○(太鼓打)花咲いて、ヤレ、みならのものはなんのはな、
ヤレサ、なんのはな、ヤレ、(植方)なんの花。ヤレ

い、ヤレ、日輪さまのお宿入り。

○京の三十三間堂の佛の数は何程ある。三萬三千三百三十
三體ごーざる。

○彌市が父さん、ヤンハレナ、頭がきんかで齒がぬけて、
どろろ、粥煮、味噌嘗めた。

○京へのほりくとて、何を習うてもどつた。一にや太鼓、
二にや笛、三にやさ、ら、てー拍子、へえちのかどをた
、くやうなちまをもらうた。

○兎どのくこなたの耳は長いな。枇杷の葉にこのまれ
て、それで長い。

○山の原の権右衛。鼻をどうしてぬすんだ。大塚酒にこの
しろ膾、それがもとで盗すんだ。

○夜田植のとんぎやれ(蛙)よ、目どもつくなよ、とんぎや
れよ。

○話がしややめにして、歌にせうぢやないか。話や喧嘩の
もとになる。

○今日の田主のやからを眺むれば、八棟造の檜皮葺。
○田の神には駒を参らせうや。何駒がえ、なにこまがえ。

島根縣 田植歌

ハレ、みならのものは菊のはな。サーサーサ。
(終りの)さげさん(打)どうしら、ばんにはさばたい。
あたまは、わしが。

○(下げ)田の神が生れる月はなんほ月、ヤレ、なんほ月、
ヤレ(合唱)なんほ月。ヤレ、十月にたせば生れくる。
○(下げ)生れきては、ヤレ、うぶの水はどこ水か、ヤ
レどこ水か、ヤレ、(合唱)どこ水か。ヤレ、やま
との國の岩清水。

○(下げ)生れきては、ヤレ、とりあけのばばどこばばか、
ヤレ、どこばばか、ヤレ、(合唱)どこばばか、ヤ
レ、正八幡の母御なり。

○(下げ)生れ来ては、ヤレ、乳付のうばはどこうばか、
ヤレ、どこうばか、ヤレ、(合唱)どこうばか、ヤ
レ、日輪さまの母御なり。

○(下げ)あさまとうの露草が手にとんとたまりな、(合唱)
どこのさへやら手にたまる。

○日は七つ、ヤレハレヤ、西山をがめ。おそろしい、ヤ
レハレヤ、おそろしい、ヤレハレヤ、(合)おそろし

葦毛の駒には、手綱よりかけ、手綱よりかけ。

○清水の舞臺の上でこそ、舞ふとりはやまふとりはヤ、や
まではちごのこ、まへあそぶエ、まへあそぶエ。
○晝間米をつくはとへ十二からおしれてな、嫁御なんども
出でつきやれ、十二がら。

○晝間米をかしには、綾のをのたしきで。
○晝間米はできたさうな。なにが御汁の實やら。磯のはた
のわかめよし、それがおしる。

○ひるまもーちがござるさうな。しろいかたぶらでな。ひ
らりしやらりと、白いかた。

四株挿
○(音頭)日が暮れた、御坊主(此の間に四) (早少女)どんと鐘
を撞きやれ(上)。

八株挿
○(音頭)今日の田の田友達は名残り惜しいもの、ヤレ、
(早少女)あらひの川でこそ文を参らす。

(能義郡)

十六插

○(音頭)天竺の、ヤール、高天が原に神あらば、ヤール、神あらば、ヤール、(早少女)神あらば、ヤール、田の神さーまの父御なり。

○(音頭)天竺の、ヤール、りうしやが川原に神あらば、ヤール、(早少女)神あらば、ヤール、田の神さーまの母御なり。

○(音頭)田の神さまの取りあけ婆々ほどの人か、ヤール、(早少女)どの人か。ヤール、正八幡の母御なり。

○(音頭)鎌倉さまの御はいの上止まりし鳥は何鳥か、ヤール、(早少女)何鳥か。ヤール、天下の鳥でおそろしい。

(能義郡)

四株挿練歌

○(音頭)牛若様が、丑の歳の、丑の月の、丑の日の又丑の刻に、生れなざる。その時より、牛若まると、御名をつけて、その時よりも繼信、忠信、辨慶さまや、兩

のしたへ。

(能義郡)

ひだのたくみ

○むかしのしゆうの物上手には、飛驒のたくみに、たてたり番匠、まづいちばんに、京の清水、六波羅堂や、三十三間、御堂もたてし、出雲の國では、大社や、ひのみさきばら、のぎのきよみづ、うかのしやうで、うんじやう寺、伯耆の國で、大山の地藏堂、檜皮茸、(下歌)ひだぶき、こがねのたるき、ひはだ。

○そのうつくしや。伯耆の國では、大山の地藏堂は、ひはだぶき、(下歌)ひはだぶき、こがねのたるき、ひはだ。○大山まゐりが、ヤール、裕の小袖、はだぬぎで、ヤール、はだぬぎで、ヤール、(下歌)はだぬぎで、ヤール、まだはだぬぎで、はだぬぎで。ヤール。

(能義郡)

たーらいさん

○たーらいさまは、こだてなをとこ、京から西への、よい男なり。筑紫の國から、渡りやる時に、髪さかいけを立

方三人、家來をつれて、山伏姿で、法螺の貝で、今こそ東へ下られーる、(早少女)下られーる。東んー、殿御が戀し。

(能義郡)

田の神の屋敷譽め

○これのやしきは、めづらし屋敷、朝日もうけて、夕日もうけて、はつちやうばかりな、珍し屋敷。石垣とらせ、白壁へいおひ、門までたて、その内にては、白銀柱、やつみねづくり、檜皮茸、金藏七つ、米藏七つ、衣裳藏七つ、いづみな、つ、まへには大きな、りんだいでござる。ひやくちやうばかり、じやうでんをかまへ、そのうちにては、若早少女に、田を植ゑさせて、おりさせたまうれ、しよーとくがみな、(下歌)おりさせたまれな。

○あんさはか、しよーとくがみを、おろしには、ヤール、おろしには、ヤール、(下歌)おろしには、ヤール、さんばのなへを、手に持つ。

○あんさはか、いはへれうか、どれをいはへれうか、どれをいはへれうか。(下歌)それかろい、うゑてなら、くら

派にしての、下には白もく、あひだにきもく、上にきたのが、らしやの羽織、帯は當世、はやりなのなこ、みよまはえて、きつやと結ぶ。とんとたたえて脊中へまはし、印籠巾着小脇にさけて、足袋は京ざし、やちをのせきだ、長い刀を、おとしとさいて、たーらいさまは、よい馬すきで、馬の毛もまた、かすあるなかで、鹿毛や茸毛や、こーばいつくけ、ぜんぜん茸毛に、かもかーらけや、これからしもの、奥州そだちの、あけ六歳の、青なる駒に、六尺をとこが、馬ひきなざる、せななでなざる、はらなでなざる。金覆輪の鞍なけしいて、らしややしやうじやうの、あとがいかけて、むながひ腹帯りんとすめて、虎の皮のな、障泥をかけて、きんがたついたる鏡をかけて、おもて羅紗のうら採草の、ばせんをしいて、るなかでしだいた、明珍くちわ、がんどとかませ、こんやうこんや、そうくれなるや、みつよりかけて、りやうがんつけて、手綱となざる。六尺男が、けんくわんへまはし、たーらいさまは、うへからしたへは、白装束で、真紅の馬ぶつ、よいふさつきで、腰にとさけて、た

島根縣 田植歌

いらいさまは、馬乗なざる。右なるおん手紅な扇、
ばらとひろけて、ほさつをまねく。たーらいさまは、
ひとむつぶてば、千里も走る、ふたぶつぶてば、二千里
も走る、みぶつよぶつで、馬も勇む。えいへんや、は
いどどて、まはらんばまるれや、にのみややー。(下歌)
にのみやへ、よざさんの、なかのな、こまつ。

○たーらいどのの、乗らざる馬は、何馬か、ヤレレ、何馬
か、ヤレレ、(下歌)なにうまか。ヤレレ、あをなるうま
に手綱よりかけ。

○たーらい殿が、田作らりや、わしは布りよーぞな。(下歌)
によたる、によーとこーや、なうヤたらい。(能義郡)

やはたのばば

○八幡のばば、はちまんの、神のし様は、ららいがたこ
て、しやうぎに腰かけ、てにしやくいたや、まはらばま
るれや、にーのみやへ。(下歌)にーのみやへ、よざさん
のー、露をば雨となる。

○やはたのばばでこそ、かさをさいたる、見さいのー、(下歌)

かみあらば、ヤレレ、(下歌)かみあらば、ヤレレ、たの
かみさまの、ははごなり。

○田の神は、ヤレレ、うまれるつきが、いくつきか、ヤレレ、
いくつきか、ヤレレ、(下歌)いくつきか。ヤレレ、とつき
にたいてうまれたら。

○田の神は、ヤレレ、とりやけのははは、どのははご、ヤレ
レ、どのははご、ヤレレ、(下歌)どのははご、ヤレレ、
しやうはちまんののははごなり。

○田の神は、ヤレレ、おほえの水は、何處水か、ヤレレ、
何處水か、ヤレレ、(下歌)どこすみつ。ヤレレ、大和の
國の、いはすみつ。

○田の神の、ヤレレ、おほえの水を、くむひしやく、ヤレ
レ、くむひしやく、ヤレレ、(下歌)なにびしやく。ヤレ
レ、ほんだのたくみ、わけひしやく。

○田の神の、ヤレレ、おほえの水を、くむたごは、ヤレレ、
くむたごは、ヤレレ、(下歌)なにごか。ヤレレ、かみ
すぎたごの七つわで。

○田の神の、ヤレレ、おほえの水を、沸しくどは、ヤレレ、

どなたさまも、みさいのー、かさをさいたり。
○ちよさかづきは、まづ一番に、さんばいさまや、田主さ
まや、田ほる人や、しろかきさまや、くまでのお方、さ
け、早少女や、わしひきさまや、ちかなへこども、ない
さけこども、奥のまから次のま、お臺所ひつかけて、し
まからしままで、まはらばまるれ、てうしー。(下歌)て
うしこーそ、まはらばまるれや、てうしー。

○さかなには、ヤレレ、きのみでかけた、かけだひは、ヤ
レレ、かけだひは、ヤレレ、(下歌)かけだひは、ヤレレ、
きりばの、しやくのまないた。

○まないたに、ヤレレ、いきりもみそろへて、どれまるる、
ヤレレ、どれまるる、ヤレレ、(下歌)どれまるる。ヤレ
レ、まづさんばいが、まるらざる。

○どなたさんが、参るやーら、尺の眞魚板でなー。(下歌)田
主さんが、参るやーら、尺のまなない。(能義郡)

田の神

○てんぢゆくの、たかまがはらに、かみあらば、ヤレレ、

わかしくどは、ヤレレ、(下歌)わかしくどは、ヤレレ、
七つのくどのまなかの。

○田の神の、ヤレレ、おほえのたらひは、なに鹽、ヤレレ、
何鹽、ヤレレ、(下歌)何鹽。ヤレレ、金銀黄金の、はぎ
鹽。

○田の神の、ヤレレおほえのゆあけは、なにゆあけ、ヤレレ、
なにゆあけ、ヤレレ、(下歌)なにゆあけ。ヤレレ、綾や錦
の縫ひあはせ。

○田の神の、ヤレレ、おほきをたちには、何ほたち、ヤレ
レ、なんほたち、ヤレレ、(下歌)なんほたち。ヤレレ、
七たびくらいて一度たち。

○田の神の、ヤレレ、おほぎの紐には何紐か、ヤレレ、なに
ひもか、ヤレレ、(下歌)なにひもか。ヤレレ、綾や錦の
よりひも。

○田の神の、ヤレレ、おほきの小袖が、なんほ重ね。ヤレ
レ、なんほ重ね、ヤレレ、(下歌)なんほ重ねか。ヤレレ、
しろもく小袖が、七重。

○田の神の、ヤレレ、生れは何處だ。てんぢゆくの、ヤレ

レ、てんぢゆくの、ヤール、(下歌)てんぢゆくの、ヤール、まこもがはらの育ちなり。

○田の神の、ヤール、このかいござる、みやのまで、ヤール、みやのまで、ヤール、(下歌)みやのまで、ヤール、せんだいはぎのさ、くさ。

○田の神の、ヤール、むかへる馬は、何馬か、ヤール、何馬か、ヤール、(下歌)なにうまか。ヤール、葦毛の馬に、手綱よりかけ。

○あしけなうまにたづなよりかけての、みゆそれたよなら、さんとろへ。

○田の神は、ヤール、門まで馬で門からは、ヤール、門からは、ヤール、(下歌)かどからは、ヤール、あけごしおこいで、迎へこむ。

○田の神は、ヤール、このかいござる、正月の、ヤール、正月の、ヤール、(下歌)正月の、ヤール、としとくじんと、いはひます。

○正月の、ヤール、十一日に、蹴ぞめは、ヤール、蹴ぞめは、ヤール、(下歌)蹴ぞめに、ヤール、ひと蹴に千石數

レ、(下)六つうてば、ヤールハレ、やはたのもりの巢鳥が。

○すがらすが、ヤールハレ、まだ夜をこめて西へたつ、ヤールハレ、(下)西へたつ。ヤールハレ、西にも森があればこそ。

○あさまとのこがらすが、露にしよんほりぬれてな、(下)うら／＼とないてたつ、露にしよんほり。小男鹿

○あさぎりに、ヤールハレ、まいこめられてさもしかは、ヤールハレ、(下)さもしかが、ヤールハレ、行きはうがなうてあとやさき。

○朝おきて、ヤールハレ、ほそどにあけて見わたせば、ヤールハレ、(下)みわたせば、ヤールハレ、黄金にまさるあさひさす。

○朝とうのほどはな、(下)ねむりせまいものやれ。

○朝草に、ヤールハレ、わが刈る山のつゆうけて、ヤールハレ、(下)つゆうけて、ヤールハレ、我かるさ、につゆうけて。

○朝がりのつゆ草は手にどんとたまるな。ヤールハレ、

しれず。

○田の神は、ヤール、さんばいさまに、おろしには、ヤール、どのくほに、ヤール、(下歌)どのくほに、ヤール、みしまのくほの、まんなかへ。

○正月の、ヤール、年若水に、もみかへて、ヤール、たねかへて、ヤール、(下歌)たねかへて、ヤール、ごさくさづかれ、あさをたね。

○なはずわらを手を持ちて、おきのさんだたいな、(下歌)どの苗とるやら、おきのさんだ。

○苗とり上手はもとへ手をいれての、(下歌)なであけて、こきあけて、もとへ手を。(以上田の神) (能義郡)

○にはとりが、ヤールハレ、十二の卵産みそろひ、ヤールハレ、飼ひ育て、ヤールハレ、(下)飼ひ育て、ヤールハレ、諸國の寶をかきよせる。

○にはとりが、ヤールハレ、夜九つに時を取り、ヤールハレ、(下)時を取り、ヤールハレ、其聲聞いてめをさます。

○朝起きて、ヤールハレ、帯取りさまに六つうてば、ヤールハレ、

(下)どこのさ、やら手にはどんと。

○朝聲は、ヤールハレ、ならしにならせ、聲ならせ、ヤールハレ、(下)聲ならせ。ヤールハレ、ならさの聲のね聲ぞや。

○あさはいをへてわとりのねをいれてな、ヤールハレ、(下)それかり入れてなら、くらの下。

○おなりどを、ヤールハレ、むかへるこまは何こまか、ヤールハレ、(下)何こまか。ヤールハレ、あけ參歲のあをのこま。

○さて今日のおなりどはどこからござる。あづまのさきのたうけの町の山田屋きんさま、これからござる。其村立の御身のかざりを申して見れば、越後の仕立てきんそめ／＼のかたびらめして、つむりのか、りを申してみれば、髪たかだかときんかんざしや、きんくし笄、あづまとさいて、おなりどは、ヤールハレ、かど迄うまで、門からは、ヤールハレ、(下)かどからは、ヤールハレ、くれなるかごでむかひとる。

○おなりどが、ヤールハレ、我身の前にかみ立て、ヤールハレ、

レノ、(下)かゞみ立て、ヤーハレ、我身の姿をみるか
いみ。

○ながいかみにはてぐしをいれて、(下)なげかけてとく
ぐしを。

○おなりどが、ヤーハレ、くらのかぎを手にもち、どの藏
へ、ヤーハレノ、(下)どのくらへ、ヤーハレ、白米藏
のとをひらく。

○おなりどが、ヤーハレ、藏のとをひらく、どのはえを、
ヤーハレノ、(下)どのはえを。ヤーハレ、千俵つみの
なかのはえ。

○おなりどが、ヤーハレ、白米ごめをかりだす、ヤーハ
レノ、(下)はかりだす、ヤーハレ、こますをとりおき
とではかる。

○おなりどが、ヤーハレ、十二の釜をどぎあけて、ヤーハ
レノ、(下)とぎあけて、ヤーハレ、まつさんばいのめ
しをたく。

○おなりどが、ヤーハレ、白米ごめをとりいだし、ヤーハ
レノ、(下)とりいだし、ヤーハレ、さんばいさまの米を

○数をばしれねども、松をばおこえた。(下)おこえた夜の
は松はおこし。

○あらたまる、ヤーハレ、たねさびごめはいつの日か、ヤ
ーハレ、どの日にか、ヤーハレ、(下)どの日にか。ヤー
ハレ、よい日をきらためたねをさび。

○あらたまる、若水に種を漬けた。(下)漬けたよ、種を漬
けた。

○あらたまる、ヤーハレ、わか水いけに種漬けて、ヤーハ
レノ、(下)種漬けて、ヤーハレ、我ばやさんよのあか
つき。

○改る、ヤーレ、たねまきごめにどちむいて、ヤーハレ
ノ、(下)どちむいて。ヤーハレ、あきはうへむいてた
ねをまく。

○千石萬石は門田にこそな。(下)おもふやうならかど田に。
○苗代の、ヤーハレ、すみへ行く水をあておいて、ヤーハ
レノ、(下)あておいて、ヤーハレ、おもふ人のかけを
見る。

○なはじ薬を手にもちて、おきのさん田だな、(下)どの

とぐ。

○おなりどのきたるまたのかたびらはな、(下)よいかたび
らな、すそ裾はそんより。

○ゆづりは、ヤーハレ、そだちをとへばどこそだち。ヤ
ーハレ、松原で、ヤーハレ、(下)松原の、ヤーハレ、松
こそ祝ひものでそろ。

○あらたまる、ヤーハレ、とし男には何をす、ヤーハレ
ノ、(下)何をす。ヤーハレ、かどにはかどまつしめ
かざる。

○去年こぞより今年ことしはかどの松高いの。(下)高いのも道理たよりのも
かどの松。

○あらたまる、ヤーハレ、若水くみにはどち向いて、ヤー
ハレノ、(下)どち向いて。ヤーハレ、あき明はうへ向い
て三度くみ。

○若水くみにはどち向いてくむかな。(下)あきのはうへ向
いて福をくみ。

○正月の、ヤーハレ、十一日のおおぞめに、ヤーハレノ、
(下)おぞめに、ヤーハレ、千石萬石数知れず。

苗をとるやらおきのさん田だ。

(大原郡)

田の神おろしの次第

○ひうがの、ヤーハレ、きりしま山は神始め、ヤーハレ
ノ、(下)神始め、ヤーハレ、これこそ神の始なり。

○田の神の、ヤーハレ、父おをとへば、天ぢくの、ヤーハ
レノ、(下)天竺、ヤーハレ、正八幡が父御なり。

○田の神の、ヤーハレ、母おをとへば天竺の、ヤーハレ
ノ、(下)天竺、ヤーハレ、りやうさん川のじやたいな
り。

○田の神の、ヤーハレ、たなりしをりのけしきには、ヤー
ハレノ、(下)けしきには、ヤーハレ、ちごやさんのし
めの内。

○田の神の、ヤーハレ、たなりし月は何の月か、ヤーハレ
ノ、(下)何の月か。ヤーハレ、たなりし月つきは九の月。

○田の神の、ヤーハレ、生れし月はいく月か、ヤーハレ、九
の月、ヤーハレ、(下)九の月、ヤーハレ、十月になれば
生れくる。

○田の神の、ヤーハレ、生れし其日は何の日か、ヤーハレ、何の時、ヤーハレ、(下)何時。ヤーハレ、いのめりつきのうまのこく。

○田の神の、ヤーハレ、生れし國は、陸奥の國、ヤーハレ、(下)陸奥の國、ヤーハレ、せんはら山のさ、原で。

○田の神の、ヤーハレ、取りあけの老婆はどれさまか、ヤーハレ、(下)どれさまか。ヤーハレ、正八幡の母ごなり。

○田の神の、ヤーハレ、うぶゆの鹽何鹽、ヤーハレ、(下)何鹽。ヤーハレ、こがねの鹽でうぶゆする。

○田の神の、ヤーハレ、うぶ湯のたがは何たがが、ヤーハレ、(下)何たがが。ヤーハレ、檜の木のたがにやつ輪かけ。

○田の神の、ヤーハレ、うぶ湯のひしやく何ひしやく、ヤーハレ、(下)何ひしやく、ヤーハレ、ひんだの匠のわけひしやく。

○田の神の、ヤーハレ、うぶ湯のかまはどこさだめ、ヤーハレ、(下)どこさだめ。ヤーハレ、しめはりかけて

○田の神の、ヤーハレ、うぶぎをたつに何とたつ、ヤーハレ、(下)何とたつ。ヤーハレ、七度くらべて二度たつ。

○田の神の、ヤーハレ、うぶぎのこそで何こそで、ヤーハレ、(下)何こそで。ヤーハレ、白むく小袖七つかさね。

○田の神の、ヤーハレ、うぶぎの紐は何ひもか、ヤーハレ、(下)なにひもか。ヤーハレ、あやなるひもを三尺に。

○田の神の、ヤーハレ、そだちの國は天竺の、ヤーハレ、(下)てんぢくの、ヤーハレ、十二の森のみやのうち。

○田の神の、ヤーハレ、むかへる駒は何こまか、ヤーハレ、(下)何駒か。ヤーハレ、あしけのお馬にたづなつけ。

○田の神の、ヤーハレ、迎へる駒はどこにおく、ヤーハレ、(下)どこにおく。ヤーハレ、千丈谷のさ、山に。

○田の神の、ヤーハレ、乗り出す馬がはしるには、ヤーハレ、(下)走るには、ヤーハレ、たづなをひけばしな

かなわする。

○田の神の、ヤーハレ、うぶ湯の清水どこしみづ、ヤーハレ、(下)どこしみづ。ヤーハレ、大和の國の岩清水。

○田の神の、ヤーハレ、湯あけのこそで何こそで、ヤーハレ、(下)何こそで。ヤーハレ、かのこのこそで湯あけする。

○田の神の、ヤーハレ、だきおばさまはどれやらす、ヤーハレ、(下)どれやらす。ヤーハレ、とよなる姫がだいてとる。

○田の神の、ヤーハレ、ちつけのおばごどれやらす、ヤーハレ、(下)どれやらす。ヤーハレ、りゆうごん界の乙の姫。

○田の神の、ヤーハレ、うぶぎをたつにたついたは、ヤーハレ、(下)たつ板は。ヤーハレ、したんのいたにあて、たつ。

○田の神の、ヤーハレ、うぶぎをたつにこがたなは、ヤーハレ、(下)こがたなは、ヤーハレ、三條こかちのほそめうち。

へくる。

○田の神の、ヤーハレ、むかへるときはをがむには、ヤーハレ、(下)をがむには、ヤーハレ、さんばうたいを手にもちて。

○田の神の、ヤーハレ、召したるかさは何かさか、ヤーハレ、(下)どこぬひか。ヤーハレ、京ならかさぬひはじめ。

○田の神の、ヤーハレ、つかさるつゑは何竹か、ヤーハレ、(下)から竹の、ヤーハレ、三つまたさいた一つのえだ。

○田の神の、ヤーハレ、これからむかへるとしとくに、ヤーハレ、(下)としとくに、ヤーハレ、春三月は田の神に。

○田の神の、ヤーハレ、高天が原にこしかけて、ヤーハレ、(下)こしかけて、ヤーハレ、今日の田主はめの下に。

○あさはかに、ヤーハレ、さんばい様をおろすには、ヤーハレ、(下)おろすには、ヤーハレ、さんばのなへを手にもちて。

○田の神の、ヤーハレ、どの田へおろすどのくほへ、ヤーハレ、此くほへ、ヤーハレ、(下)此のくほへ、ヤーハレ、三角のくほの真中へ。

○田の神の、ヤーハレ、小どくに酒ついで、ヤーハレ、酒たて、ヤーハレ、(下)酒たて、ヤーハレ、まつさんばいがまゐらす。

○田の神の、ヤーハレ、どれからござるみやのうへ、ヤーハレ、(下)みやの上、ヤーハレ、ことしの稲のたなおろし。

○さて此屋敷はいひの屋敷、京から西の大和國の本福屋敷、惣石かきの、惣堀おひの奥谷迄も、次谷までも、紫竹の小竹にしかめが九つ、錢かめ七つおりさし給いや、しやうとく神やれ。(下)おりさし給ひな。(大原郡)

かつま歌

○いはひには、ヤーハレ、田をこそうゑるもろむきね、ヤーハレ、(下)もろむき、ヤーハレ、ひととおひて千はさき。

るあさだちに。

○よしのまるりのあさだちに、それまきおといた。(下)それまきばかりか、しかもたつ。

○我との、ヤーハレ、都へのほる何かきに、ヤーハレ、(下)何かきに。ヤーハレ京からさいくの手をならひ。

○京へのほるとて、京では何をならうた。(下)やらやしの手聞いらすそれはならひ。

○京では京ごゑしやれ、みやこへのけげば、(下)みやごゑしやれ、みやこでは。

○みやこのほるあきんどになりてはみたいな。(下)にしきにおみやものなりたい。(大原郡)

大山歌

○大山の、ヤーハレ、おやまへ登るかどいでに、ヤーハレ、(下)かど出に、ヤーハレ、あさごり、取るよしやうじ川に。

○あさごり取るとしてしやうじ川にこそな、(下)それみさんせな、しやうじ川へ。

○けさのものが、ヤーハレ、こがねのくはをかたにかけ、ヤーハレ、(下)かたにかけ、ヤーハレ、千町の田の水を見る。

○けさのとちをしるわかとのかまの上のねむりは、(下)よのまがしぎよいやらほらねむり。

○わがとの、ヤーハレ、くらまへのほる年ごもりは、ヤーハレ、年ごもりは、ヤーハレ、(下)としごもりは、ヤーハレ、ごふくをもとめて今かへる。

○鞍馬のおやまの大國様は、(下)御福さづける大國は。

○大國様は、ヤーハレ、せはちそけれど、福の神、ヤーハレ、(下)福の神、ヤーハレ、千俵だはらにこしかける。

○御福もろたが、くらはどこへ立つか。(下)どこへ立つやら、くらは立てう。

○藏はたてたが中に何をつむか。(下)右左に俵をつんで中へ金を。

○わがとの、ヤーハレ、あさだちまゐるものとい、ヤーハレ、(下)どのもとい。ヤーハレ、よしのへまゐる

○大山の、ヤーハレ、ふもとにござるはねつるべ、ヤーハレ、(下)はねつるべ、ヤーハレ、水つりあけてこり

○大山の、ヤーハレ、ごんけんさまを拜むには、ヤーハレ、(下)拜むには、ヤーハレ、錦のまくをまきあけて。

○大山の、ヤーハレ、下山様を拜むには、ヤーハレ、(下)拜むには、ヤーハレ、くれなるうぶぎを手にもちて。

○大山の、ヤーハレ、御寺をまはるには、ヤーハレ、をがむには、ヤーハレ、(下)拜むには、ヤーハレ、七條のけさをかたにかけ。

○大山の、ヤーハレ、まはりやまきのはのかすは、ヤーハレ、(下)はのかすは、ヤーハレ、七千三百やはござる。

○大山のまき原のこならの葉はな、(下)をりかけにせうや、こならの。

○大山の、ヤーハレ、岩ねをまはりわく清水、ヤーハレ、わくしみづ、ヤーハレ、(下)わく清水、ヤーハレ、しみづでなうて、いづみわく。

○大山や、おやまのしたゆく水はな、(下)すいしよよかろやーたをゆく。

○大山の、ヤーハレ、うねこのつに谷七つ、ヤーハレ、吹くあらし、ヤーハレ、(下)ふくあらし、ヤーハレ、さぞさかもとは寒かろ。

○大山の坂本はさざさむかろぞな。(下)あはせのこそできてもよかろ。

○大山の、ヤーハレ、地藏堂の庭の八重櫻、ヤーハレ、(下)やへざくら、ヤーハレ、やへにはさかいでさく。

○ひんだのたくみ立てたるばんじやう、たてたるたふは、さて美しや。けやけの柱榭形作り、京では清水、奈良大佛や、大阪では天王寺や、五重の塔や、せいだの寺や、ほうきの國では、大山の地藏堂はひはだぶき、(下)ひはだぶき、こがねのたる木は、ひはだ。

○大山やまのさくらこそみごとなさくら、(下)みごとな櫻花、やへにはながさく。

○大山の、ヤーハレ、ごはいのゆでまをしかは、ヤーハレ、(下)まをしかは、ヤーハレ、すみかがなうて奈良

ヤーハレ、何つらは、ヤーハレ、(下)何つらは。ヤーハレ、こがねのおはししろかね。

○しろかねの、ヤーハレ、わんとりそろひめしめれば、ヤーハレ、(下)めしめれば、ヤーハレ、めしめるともにたべたまひ。

○ひるまはまるらせた、さんばいの神やれ。(下)たかはでにかけほせ、さんばいの。

○天竺の、ヤーハレ、高天が原にひるねして、ヤーハレ、まくらして、ヤーハレ、(下)まくらして、ヤーハレ、あづまのとのをゆめにみた。

○ひるまがたうけに笠をわすれたよな。(下)かさはよいかさ、はたのほつれ。

○田の神に、ヤーハレ、ごしゆまるらせるやよふさけ、ヤーハレ、(下)やよふさけ、ヤーハレ、ながいのお銚子やよもさけ。

○五月にはな、まづ一ばんにさんばいさまや、きやのためしに、しろかく人や、私らがやうなるさけ、早少女や、其外つかない、おなりどまでも、すけのこがさをかたふ

ですむ。

○大山の、ヤーハレ、まうせんの上にきりのはこ、ヤーハレ、(下)きりの箱、ヤーハレ、八萬八聲のお經ござる。

○大山の、ヤーハレ、みせんのかの御符の水、ヤーハレ、(下)ごふの水、ヤーハレ、よここの人のごふの水。

○大山の、ヤーハレ、もろ間てのあみがさは、ヤーハレ、(下)あみがさは、ヤーハレ、早少女がさにかひくです。

○早少女さまにきせるとて、大山のかさを、(下)かひくだいたは、大山の。

○大山のかさにこそあやの紐いれて、(下)くださりやせまいもの、あやの紐。

○書間はまつはたおきの舟とうかな。(下)ろばしらおしたて、かぜをまつり。

○ひるまはできて候。何がおしるには、(下)いそのはたのわかめ、よしそれがおしる。

○田の神の、ヤーハレ、ひるまのごしやうのめしつらは、

けて、(下)かたふけて、みれどもなかのはほうどに。

○さかづきはな、奥の間からつぎのまを、だいでころへひつかけて、参らばまはせや、銚子こそ、(下)銚子こそ、まらばまはせや、銚子。

○ながえのお銚子に、澄んだ御酒入れて、(下)田ぬしにまらせうや、まづはいはひ。

○酒にはさかな、さかなに何こそ、萱の葉を、(下)ちさのはを、すあいにしてまた御酒。

○酒にはさかな、きのふから、ヤーハレ、けふまでかけたかけ鯛は、ヤーハレ、(下)黒鯛は、ヤーハレ、きらばや尺のまないたで。

○まないたでは、ヤーハレ、きりもりそろへだれまるる、ヤーハレ、(下)だれまるる。ヤーハレ、まづさんばいにまるらせる。

○どなたさまがまるるやら、尺のまないたで、(下)さんばいさまがまるるやら、尺のまないた。

○鶯が、ヤーハレ、かれきの枝に巢をかけて、ヤーハレ、(下)すをかけて、ヤーハレ、はなさけくとさへ

づる。

○うぐひすの初聲と春は來れども、(下)はつこゑはまだきかぬ、はるはきたが。

○驚が、ヤーハレ、はるひなやまでほのほのと、ヤーハレ、(下)ほのほのと、ヤーハレ、さへづるこゑのおもしろい。

○さつきのさをとめと、はるのうぐひすは、(下)わたらぬさともない、はるのうぐひす。

○うぐひすが、ヤーハレ、此谷おくにをらうかい。ヤーハレ、をらいでは、ヤーハレ、(下)をらいでは、ヤーハレ、これほどひろい野のはらに。

○うぐひすのこばらみは杉山へこそ、(下)うめば十月にすぎやまへ。

○しらすぎ、ヤーハレ、はねうちかけて舞ふときは、ヤーハレ、(下)まふときは、ヤーハレ、五重の塔は目のしたに。

○しろい雀がしろい稻をくはへて、(下)おくらへつたる、しろい米を。

○上手な早少女こもにまかれたよな。(下)きがへがなうてこそ、こもにまかれ。

○我とのほは、ヤーハレ、常陸のくにの小栗さま、ヤーハレ、(下)をぐりさま、ヤーハレ、よこやま長者のてるてひめ。

○てるてのひめ御杖にごえんのふみは、(下)あけてをがめばごえんの。

○おしかけのむこいりはをぐりさまでこそ、(下)家の手を馬にのるおにかけに。

○十五夜の、ヤーハレ、つきこそそらにまひござる、ヤーハレ、(下)まひござる、ヤーハレ、十二のがくにはやされて。

○十五夜のつきよりもわが心こそ、(下)さえにさえたは我心。

○あれ見やね、ヤーハレ、田中にみゆる何もりか、ヤーハレ、(下)何もりか。ヤーハレ、さんばい様のもりの木だ。

○さんばいさまのもりの木に、しととの鳥がとまりた。

○今日の日の、ヤーハレ、田ぬしのやかたどれやらず、ヤーハレ、(下)どれやらず。ヤーハレ、やつむねづくりひはだぶき。

○今日の田の田ぬしさまにさんがさを入れて、(下)やつみねにくらをたてとくりまに。

○わがくにの、ヤーハレ、國大名が矢をはぐは、ヤーハレ、(下)やはぐは、ヤーハレ、しよこくの大王呼びよせて。

○矢はぎは上手が、やはぎあはせて、(下)白い羽に黒い羽をはぎあはせ。

○わがかどの、ヤーハレ、千町の田をば植ゑるには、ヤーハレ、(下)植ゑるには、ヤーハレ、かさばをそろひてはやしたて。

○上手がさいたるなはばにこそ、(下)いだもさいたるなはばにこそ。

○田にたてば、ヤーハレ、田なかにたてよ。家にすまば、ヤーハレ、(下)家にすまば、ヤーハレ、ごけんのお家のなかのまに。

(下)しととの鳥がとまる、つるもととまる。

○かみがたの、ヤーハレ、扇や町の扇や、ヤーハレ、(下)扇やは、ヤーハレ、千だの竹をかひくたす。

○我とのほは、ヤーハレ、扇や町の何をす、ヤーハレ、(下)何をす。ヤーハレ、扇のほねをけづりをる。

○扇のほねは七つけづりて、(下)やつつけづりてな、かなめいれ。

○扇をそでにいれて、京のまちへでたらば、(下)とのご招くや、京の町へ。

○扇をりてた、んで、(下)こしにさいていさんだ。

○おそろし、ヤーハレ、千里が内の竹山は、ヤーハレ、(下)竹山は、ヤーハレ、はしるは虎のならひかな。

○道ばたの竹の子どこのこむすめは、(下)惜しめどをしまれぬ、人のむすめ。

○きんのふから、ヤーハレ、今日まで吹くは何かぜか、ヤーハレ、(下)何かぜか。ヤーハレ、こひするかぜがしなやかに。

○そんより、吹く風は、竹のはやしこそな、(下)なびけ

てとほるものを竹のはやし。
 ○戀しくは、ヤーハレ、たづねてござれ、米子^{よなご}まで、ヤーハレ、(下)米子まで、ヤーハレ、よなごの町のまんなかへ。
 ○くれなるは、ヤーハレ、いまはうすほけて、ヤーハレ、(下)うすほけて、ヤーハレ、つむやつまずのはなざかり。
 ○くれなるかたびらをそめ乾^ほいたよな。(下)扇のはいろでそめほいたよな。
 ○くれなるは、ヤーハレ、あをばに巻いてかくせども、ヤーハレ、つ、めども、ヤーハレ、(下)つ、めども、ヤーハレ、色よいはなであらはれる。
 ○紺屋がころもをそめほいたよな。(下)扇のはいろでそめほいた。
 ○おなりどは、ヤーハレ、どこまでおくる。たうけ山へ、ヤーハレ、(下)たうけ山へ、ヤーハレ、なさけのためにおくります。
 ○おなりどをおくるには、たうけ山へこそな、(下)なさけ

のためこそおくります。
 ○たうけ山は、ヤーハレ、ぬしある山か。ぬしなくば、ヤーハレ、(下)ぬしなくば、山もりつけてわがやまに。
 ○みつるまに、よつるまは、とのみつるまに、(下)我が前つほになる、とのみつる。
 ○あれ見やれ。ヤーハレ、西山見ればありがたや、ヤーハレ、おそろしや、ヤーハレ、(下)おそろしや、ヤーハレ、日輪^{ひかりま}様のお入りかや。
 ○七つさがれば西の山ばにな、(下)こがねばなす西山に。
 ○北野^{きたの}では、ヤーハレ、天神^{てんじん}様の八重梅^{やへうめ}は、ヤーハレ、(下)やへうめは、ヤーハレ、きたのでならいでこそ、でなる。
 ○梅の木下^{した}で、また毬^{たま}をどんとけたれば、(下)梅はばらりおちるなり、まりはそらに。
 ○鎌倉^{かまくら}の、ヤーハレ、御所^{ごしよ}どの内をながむれば、ヤーハレ、(下)眺^{なが}むれば、ヤーハレ、巴^{とらふ}をかいた幕がある。
 ○鎌倉^{かまくら}のごしよにこそ巴^{とらふ}をかいたまくがある。(下)まんだこそあるな、とも忍^{しの}にかいた。

○かまくらの、ヤーハレ、ごしよどの上で舞^まふ鳥は、ヤーハレ、(下)まふ鳥は、ヤーハレ、てんがの鳥がおそろしや。
 ○かまくらの、ヤーハレ、ごしよどにはの杉^{すぎ}檜^ひの木、ヤーハレ、(下)杉檜^{すぎひ}の木、ヤーハレ、こがねのつたがまひあがる。
 ○せまいせうぢのからかさばな、(下)さしあけてさいたればさしそろひ。
 ○かみ杉は、ヤーハレ、ひしやくにわけて、大川^{おほがは}を、ヤーハレ、(下)大川^{おほがは}を、ヤーハレ、くみほすほどにおもひども。
 ○かみからくだいたは、白^{しろ}いすけのかさを。(下)買^かうたら賜^{たま}れやな、しろいすけを。
 ○我がとのは、ヤーハレ、ゐさしどので、くほがさで、ヤーハレ、(下)くほがさで、ヤーハレ、さもしなやかな、くほがさで。
 ○さい鳥さしのさいとりほうでさす鳥はさ、いで、(下)さす鳥はさしもせで、きみにこそ、ろ。

○田の神を、ヤーハレ、どこまでおくる。天然^{てんぜん}へ、ヤーハレ、(下)てんぢくへ、ヤーハレ、十二^{じふに}のりの宮^{みや}の内^{うち}。
 ○あれ見やれ、ヤーハレ、をいがたき(名^な地^ぢ)のみやたちは、ヤーハレ、(下)みやたちは、ヤーハレ、どこなる番^{ばん}匠^{じやう}がたてたやら。
 ○手斧^{てのこ}をかたいて、せいたの寺^{てら}へ、(下)ばんじやうにいっせいたの。
 ○木をけづる鉋^{かん}をかけて、をかの木をば、(下)なにするとてか、をかの木は。
 ○十七が、ヤーハレ、やつほそ布^{ぬの}をしたて、は、ヤーハレ、おるときに、ヤーハレ、(下)おるときに、ヤーハレ、いとよりちさい腰^{こし}をして。
 ○乙嬢^{おとぢやう}や、おとぢやう管^{くだ}をかけ、おとぢやう。(下)おとぢやうが、かいたくださいがはしる。
 ○十七が、ヤーハレ、やなぎが原^{はら}でぬのさらし、ヤーハレ、(下)ぬの晒^{さら}し、ヤーハレ、さらいたぬのこそ白^{しろ}いざる。
 ○宮^{みや}じまで、ヤーハレ、いまこそごさる御^ご神^{しん}事^じは、ヤーハ